

洲崎ヲ守ル赤橋守時ノ軍破

足利高氏ノ廟

新田義貞公篇

二八六

死シテ一人残り、百陣破レテ一陣ニ成トモ、イツ果ヘキ軍トハ見ヘサリケリ。

赤橋守時自害附大館宗氏討死并本間義死事

懸リケル處ニ、赤橋相模守今朝ハ洲崎ヘ向ハレタリケルカ、此陣ノ軍強クシテ、一日一夜ノ其間ニ、六十五度マテ切合タリ、サレハ數萬騎有ツル郎從モ數萬、西源院討レ落失ル程ニ、僅ニ殘ル其勢ハ、三百餘騎ニソ成ニケル、侍大將ニテ、同陣ニ候ケル南條左衛門高直ニ向テ宣ヒケルハ、漢楚八箇年ノ戰ニ、高祖度コトニ討負給ヒシカトモ、一度烏江ノ軍ニ利ヲ得テ、却テ項羽ヲ亡サレキ、齊晉七十度ノ戰ニ、重耳更ニ勝事ナカリシカトモ、遂ニ齊境ノ戰ニ打勝テ、文公國ヲ保テリ、サレハ、萬死ヲ出テ一生ヲ得、百度負テ一戰ニ利アルハ、合戰ノ習ナリ、今此戰ニ、敵聊勝ニ乘ニ似タリトイヘトモ、サレハトテ當家ノ運、今日ニ窮リヌトハ覺ス、然ト云トモ、盛時ニ於テハ、一門ノ安否ヲ見果ル迄モナク、此ノ陣頭ニテ腹ヲ切ント思フナリ、其故ハ盛時、足利殿ニ女性方ノ縁ニ成ヌル間、相模殿ヲ始奉リ、一家ノ人々モ、サコソ心ヲモ置給フラメ、是勇士ノ恥ル所ナリ、彼田光先生ハ、燕丹ニ語ハレシ時、此事漏スナト云レテ、其ノ疑ヲ散センタメ、命ヲ失テ、燕丹カ前ニ死タリシソカシ、此陣戰急ニシテ、兵皆疲レタリ、我何ノ面目カ有テ、固メタル陣ヲ引テ、而モ嫌疑ノ中ニ暫ク命ヲ

守時自害

十八日晩
義貞軍山
内ニ入ル

大佛貞直
ト本間某

十九日早
朝極樂寺
坂破ル

大館宗氏
本間某ノ
討

惜ヘキトテ、戰イマタ半ナル最中ニ、帷幕ノ中ニ物具脱捨、腹十文字ニ切給ヒテ、北枕ニソ伏給フ、南條是ヲ見テ、大將既ニ御自害アル上ハ、士卒誰爲ニ命ヲ惜ヘキ、イテサラハ御供申サントテ、續テ腹ヲ切ケレハ、同志ノ侍九十餘人、毛利家、北條家、金勝院、西源院本作三、百八十餘人、腹切テ、イヤカ上ニ重リ伏ス、本文義順傳、今サテコソ十八日ノ晩程ニ今出川家本、作レ、非也、洲崎一番ニ破レテ、義貞ノ官軍ハ山内マテ入ニケリ、天正本云、義貞ノ官軍ハ、山内迄攻入ケルカ、守時舉動ヲ聞テ、義貞猛キ眼ニ涙ヲ浮ヘテ感シ給フ、云々、懸ル處ニ本間山城左衛門ハ、多年大佛奥州貞直ノ恩願ノ者ニテ殊更近習シケルカ、聊勘氣セラレタル事有テ、出仕ヲ許サレス、イマタ己カ宿所ニソ候ケル、既ニ五月十九日早旦ニ、極樂寺ノ切通ノ軍破テ、敵攻入ナント聞ヘシカハ、本間山城左衛門、若黨中間百餘人、是ヲ最期ト出立テ、極樂寺坂ヘソ向ヒケル、敵ノ大將大館二郎宗氏カ、三萬餘騎ニテ、三萬、西源院本作三百、控タル真中ヘ懸入テ、勇誇タル大勢ヲ、八方ヘ追散シ、大將宗氏ニ組ント、透間モナクソ懸リケル、三萬餘騎ノ兵共、須臾ノ程ニ分レ靡キ、腰越マテソ引タリケル、餘リニ手繁ク進テ懸シカハ、大將宗氏ハ取テ返シ思フ程戰テ、本間カ郎等ト引組テ、刺違テソ伏給ヒケル、今出川家、毛利家、源院、南都本云、寄手分レ膝テ腰越マテソ引タリケル、如何シテ紛レ入テヤ組タリケン、宗氏ト本間カ郎等ト刺違テ、白洲ノ上ニソ伏タリケル、云々、系圖曰、宗氏爲ニ得河編四郎光秀ニ被、擊而死、云々、本間大ニ悦テ馬ヨリ飛テ下リ、其首ヲ取テ、鋒ニ貫キ、貞直ノ陣ニ馳參シ、幕ノ前ニ畏テ、多年ノ奉

元弘三年

二八七

公、多日ノ御恩、此一戦ヲ以テ報シ奉リ候、又御不審ノ身ニテ空シク罷成候ハ、後世マテノ妄念トモ成ヌヘフ候ヘハ、今ハ御免ヲ蒙テ、心安ク冥途ノ御先仕候ハント申モハテス、流ル、涙ヲ押ヘツ、腹搔切テツ失ニケル、三軍可奪帥トハ彼ヲソ云ヘキ、以德報怨トハ是ヲソ申ヘキ、ハツカシノ本間カ心中ヤトテ、落ル涙ヲ袖ニカケナカラ、イサヤ本間カ志ヲ感セントテ、自打出ラレシカハ、相從兵トモ涙ヲ流サヌハ無リケリ、

〔尊卑分脈〕 宗氏元弘三五十八、於鎌倉稻村崎爲公家討死、討手得川彌四郎光季也、

〔白河證古文書〕 上（楓軒文書） △六一、九五

去四月十七日、給旨、承謹了、抑相催陸奥出羽兩國軍勢、可令征伐前相模守平高時法師以下凶徒由事、道忠並一族等、折節幸在鎌倉仕候間、先於鎌倉相卒道忠舍弟竹見彦三郎祐義、同子息二人、田島與七左衛門尉廣堯、同子息一人、並家人等、自今月十八日始合戦、毎日連々企攻戦、同二十二日已追落鎌倉凶徒等了、且親類家人等、抽軍忠候次第、上野國新田太郎令存知之上者、定令注進、無其隱候哉、次兩國軍勢催促事

親朝男殊可致忠節之由、就下知候、隨分致其沙汰候云々、宜捧請文候歟、委細趣、以使者親類伯耆又七朝保令言上候、以此趣可有洩御披露候、道忠恐惶謹言、

元弘三年六月九日

沙彌道忠 請文

〔白河證古文書〕 三月十五日（護良親王令旨） 條ニ收ム（ニ對スル請文）

五月二十二日 新田氏義、同經政、大館幸氏等ノ官軍、十九、二十、二十一日ノ連日、極樂寺坂、靈山寺峯、稻村崎ノ天險ヲ攻撃シ、激戦ヲ演ズ。二十一日夜半、義貞、稻村崎ノ干潟ヲ徒涉シテ鎌倉ニ進入ス。二十二日、幕府軍敗北シ、北條高時以下數百人、東勝寺ニ於テ自殺、鎌倉幕府滅亡ス。

〔梅松論〕 十八日ノ（條ニ續ク） 同十八日より廿二日に至るまで山内小袋坂極樂寺の切通

以下鎌倉中の口々、合戦のときのこゑ矢さけび人馬の足音暫も止る時なし、さしも人の敬なつき、富貴榮花なりし夏、おそらくは上代にも有がたくみたしかども、樂つきて悲來る習ひ遁がたくして相模守高時禪門、元弘三年五月廿二日、葛西谷にをいて自害しける夏、悲むべくも餘あり、一類も同數百人自害することあはわなれ、爰にふしぎなりしは、稻村崎の浪打際、石高く道細くして軍勢の通路難儀の所に、俄に鹽干て合戦の間干潟にて有し夏、かたがた佛神の御加護とぞ人申ける、

弘元三年

二八九

鎌倉灰燼ニ歸ス

七百余人自害

然、^{イナシ}間録倉は、南の方は海にて三方は山なり、嶺つゞきに寄手の大勢陣を取て卒におり下り、所々の在家に火を放ちしに、いづかたの風もみな録倉に吹入て、殘所なくこそ焼はらはれける。天命に背く、^{イナシ}道理明らかなり、治承に右幕下草創より以來、天にせぐ、まり地にぬき足して、上を尊び下を惠み、政道の法度騎射の日記を定置て國を治めしかば、狼煙たつ事なく、家々戸さしを忘れて樂榮て、^イ年久しかりしに、時刻到來にや、元弘三年の夏、時政の子孫七百餘人同時に滅亡すといへども、定置ける條々は今に残りて、天下を治め弓箭の道をたえず、法と成けるこそ目出度けれ、^(五月是月ノ條梅松論ノ二、及、延元元年五月二十五日條梅松論參照)

〔將軍執權次第〕五月十四日將監入道泰家、爲大將軍向武州關戸合戰、新田多勢之間將監入道引退入録倉、同十七日相模守時南條左衛門尉以下各向武州山内離山合戰、十八日守時以下自害畢、武藏上野軍勢如雲霞滿山野云云、五月廿二日録倉方被打落、殿中以下懸火悉燒拂之、一族等或自害或落畢、

〔和田文書〕^(和田系) ^(鹿兒嶋縣和) ^(田中太氏藏)

追伐間事、副進 一通系圖

三木村惣領俊連等ニ屬ス新田氏義

稻村崎靈山寺ニ於ケル俊連ノ戦功

行俊 貞俊

右俊連^{三木村惣領}相觸同行俊同貞俊并一族、申承傍輩等令引率、於當國者罷立、一番屬于同大將軍新田藏人七郎氏義、去五月廿一日、^{元弘三}引籠敵靈山寺大門、射大手^{稻村}軍勢於散々之間、難打入之處、俊連自峯折下懸先、打破敵之籠大門、挾板戰之間、若黨羽生田九郎太郎盛政、^{被射}藤木田太重連、^{被射}中野郷房良賢、^{被射}數輩雖被疵、捨身命戰之間、追落朝敵、將又俊連責上靈山寺峯、及夜闇戰之處、又若黨奥富兵衛三郎俊家、^{被射}被疵畢、巨細所勸目安也、

一行俊同月同日於靈山寺致合戰、忠節之間、自身^{被射}中間孫六泰知、^{被射}雖被疵、捨身命戰之間、追落朝敵之條、日大將軍新田藏人七郎氏義令見知畢、巨細所勸于目安也、

一貞俊於所々致合戰之上、同月同日屬于日大將軍新田藏人七郎氏義、於靈山寺致合戰之間、若黨今溝余次有知討死畢、雖然捨身命戰之間、追落朝敵之條、氏義令見知上、巨細所勸于目安也、

然則被經御奏聞、爲由緒地上者、各浴恩賞、彌爲弓箭面目、恐々言上如件、^(以下欠)

〔塙文書〕〔萩藩閱録〕^(何レモ十五) 〔石川文書〕〔大塚文書〕〔天野文書〕^(何レモ十八)

高氏、義貞ニ舉兵ス
ト云フ

諸國ノ兵高氏ニ心ヲ寄セテ攻撃軍振フ
高時滅亡

高氏ノ末貞族ノ義貞大將軍ト云フ

〔保曆間記〕第五 又上野國に尊氏の一ぞく新田義貞はや録倉をせめんとて打立給ふ、尊氏のそくなんともにかせんをいたすべき由、尊氏さいそくす、すなはちよしさだかのぎをうけて、武藏、上野、相模、方々の勢をもよをしつゝ、録倉へはせつき、尊氏の息男と相圖を定、合戦いどまんとす、されば高時が一ぞく家人はせ向て去元弘三年五月中旬より、毎日行々において合戦數度に及、諸國の侍みなたかすけが無道のふるまひ、高時が私欲のふかきこと、つもりくゝて録倉を恨むる事あさからねば、ことくゝく尊氏に心をよせて、此時をまちゑたるふせいにいさみあへり、數年さかへたりし高時が一門あはれをとゞむる計なり、嗚呼、主將たる人士にめぐみをくはふるに、まことをもつてする時は、士また誠を以て報ず、高時士につねくゝ奢しかば、つゝるに五月廿二日高時一ぞく共、ことくゝくめつす、昨日までは天下の政をせしかば、誰かそむかんといふものやはある、ふかくイ馬をんをかうぶる人々もたちまち心かはりて、敵と成にし事、ともにきんしふの上下なり、これをあさましと思ふ事こそなからめ、我高名したるがほにいひのゝしるぞかなしき、
〔増鏡〕第十 ざるほどに東にもかねて心しけるにや、高氏のすゑの一族なる新田小四郎義貞といふもの、今の高氏の子四になりけるを大將軍にして、武藏國よ

新田ナドイフ國人

北條泰家ノ敗退

世ノ亂ニ思フ起ス

り軍をおこしてけり、この比の東の將軍は守邦親王にておはします、御後見仕うまつる高時入道、貞顯入道、城介入道、圓明、長崎入道、圓基などいふものども、驚き騒ぎて、高時入道、弟に四郎左近大夫泰家といひし、今は入道したるをぞ大將に下しける、五月十四日、録倉を立ちて向ふ、その勢十萬餘騎、高時入道の一族付き隨ふものそこら滿ちひろごりて、録倉始まりし頼朝の世、時政より今に至るまで多くの年月をつめり、僅なる新田などいふ國人に、たやすくいかでかは亡さるべきと覚えしに、程なく十五日に、敵既に録倉に近づくよし聞えて、家々を毀ち騒ぎのゝしる、世の既に滅するにやと覚えしとぞ、人はかたり侍りし、四郎左近大夫入道、軍にうち負けけるにや、隨ふ武士ども、殘なく新田が方へ付きぬれば、えさらぬ者どもばかり五六百騎にて、十六日の夜に入りて録倉へ引き歸る、僅に中一日にてかくなりぬる事夢かとぞ覺えし、かくて日々の軍にうち負けければ、同じき二十二日、高時以下腹切りてうせにけり、

〔神皇正統記〕卷之六 東にも上野の國に、源義貞といふ者あり、高氏が一族なり、世の亂におもひをおこし、いくばくならぬ勢にて、録倉にうちのぞみけるに、高時等運命きはまりければ、國々の兵つき隨ふ事風の草をなびかすがごとくして、五

月の二十二日にや、高時をはじめとして、多くの一族皆自滅してければ、鎌倉又平
ぎぬ、

〔夢窓國師年譜〕(元弘三年)三月、師歸瑞泉(鎌倉)夏五月、鎌倉亡、士卒敗奔、或遭擒及兵乃

將加以師道力得救者不可勝計、

〔參考太平記〕卷第十 稻村崎成干、湯附島津四郎降參事

サル程ニ、極樂寺ノ切通へ向ハレタル大館次郎宗氏、本間ニ討レテ、兵共片瀬腰越
マテ引退ヌト聞ヘケレハ、新田義貞遣兵二萬餘騎ヲ率シテ、二十一日夜半許ニ、片
瀬腰越ヲ打廻リ、極樂寺坂へ打臨給フ、明行月ニ敵ノ陣ヲ見給ヘハ、北ハ切通マテ、
山高ク路嶮シキニ、城戸ヲ構垣楯ヲ搔テ、數萬ノ兵陣ヲ雙テ並居タリ、南ハ稻村崎
ニテ沙頭路狭キニ、浪折涯マテ逆茂木ヲ繁ク引懸テ、澳四五町カ程ニ、今川家、北條家、
南都本、作三四五
十町、大船トモヲ並ヘテ、矢倉ヲカキテ、横矢ニ射サセント構タリ、實ニ此陣ノ寄手、
叶ハテ引ヌランモ理ナリト見給ヒケレハ、義貞馬ヨリ下給ヒテ、兜ヲ脱テ海上ヲ
遙々ト伏拜、龍神ニ向テ祈誓シ給ヒケルハ、傳承ル日本開闢ノ主、伊勢天照太神ハ、
本地ヲ大日ノ尊像ニ隱シ、垂跡ヲ滄海ノ龍神ニ顯ハシ給ヘリト、吾君其苗裔トシ
テ、逆臣ノ爲ニ西海ノ浪ニ漂給フ、義貞今臣タル道ヲ盡サン爲ニ、斧鉞ヲ操テ敵陣

義貞極樂寺坂ニ向

稻村崎ニ立チ龍神ニ祈願ス

稻村崎干潟トナル

官軍鎌倉中ニ突入ス

島津四郎

ニ臨ム、其志偏ニ王化ヲ輔ケ奉リテ、蒼生ヲ安カラシメントナリ、仰願ハ内海外海
ノ龍神八部、臣カ忠義ヲ鑒テ、潮ヲ萬里ノ外ニ退ケ、道ヲ三軍ノ陣ニ開カシメ給ヘ
ト、至信ニ祈念シ、自佩給ヘル金作ノ太刀ヲ拔テ、海中へ投給ヒケリ、眞ニ龍神納受
ヤシ給ヒケン、其夜ノ月ノ入方ニ、前々更ニ乾事モ無リケル稻村崎、俄ニ二十餘町
乾上テ、平沙渺々タリ、横矢射ント構ヌル數千ノ兵船モ、落行潮ニ誘ハレテ、遙ノ澳
ニ漂ヘリ、不思議ト云モ類ナシ、義貞是ヲ見給テ、傳聞後漢ノ貳師將軍ハ城中ニ水
盡、渴ニセメラレケル時、刀ヲ拔テ巖石ヲ刺シカハ、飛泉俄ニ湧出キ、我朝ノ神功皇
后ハ、新羅ヲ攻給ヒシ時、自干珠ヲ取、海上ニ擲給ヒシカハ、潮水遠ク退テ、終ニ戰ニ
勝事ヲ得セシメ給フト、是皆和漢ノ佳例ニシテ、古今ノ奇瑞相似タリ、進メヤ兵共
ト下知セラレケレハ、江田、大館、里見、鳥山、田中、羽河、山名、桃井ノ人々ヲ始トシテ、越
後、上野、武藏、相模ノ軍勢共、六萬餘騎ヲ一手ニ成テ、稻村崎ノ遠干潟ヲ、眞一文字ニ
懸通リテ、鎌倉中へ亂入、數多ノ兵是ヲ見テ、後ナル敵ニ懸ラントスレハ、前ナル寄
手跡ニ附テ攻入ントス、前ナル敵ヲ防ント欲スレハ、後ノ大勢道ヲ塞テ討ント欲
ス、進退度ヲ失ヒ、東西ニ心迷テ、墓々敷敵ニ向ヒテ軍ヲ致事ハ無リケリ、爰ニ島津
四郎ト申シハ、金勝院本云、名高時、今出川家、北條家、南都本、作、會我與太郎時久、下做之、按、會我家
譜、會我與太郎時助、仕、久明親王、其子、小次郎時之、仕、守邦親王、今所、云者、疑時之乎、大力ノ

元弘三年

二九五

聞へ有テ、誠ニ器量事柄、人ニ勝レタリケレハ、御大事ニ逢ヌヘキ者ナリトテ、執事長崎入道烏帽子子ニテ、一人當千ト憑レタリケレハ、専途ノ合戦ニ向ントテ、イマタ口口ノ防場ヘハ向ラレス、態相模入道ノ屋形ノ邊ニソ置レケル、懸ル處ニ、濱ノ手破レテ、源氏既ニ若宮小路マテ攻入タリト騒ケレハ、相模入道、島津ヲ呼寄、自ラ酌ヲ取テ酒ヲ進メ、三度傾ケル時、三間ノ既ニ立ラレタリケル、關東無雙名馬白波ト云ケルニ、白鞍置テソ引レケル、見ル人はヲ羨スト云事ナシ、島津門前ヨリ此馬ニヒタト打乗テ、由井濱ノ浦風ニ、濃紅ノ大笠驗ヲ吹ソラサセ、三ツ物四ツ物取著テ、アタリヲ拂テ馳向ケレハ、數多ノ軍勢是ヲ見テ、誠ニ一騎當千ノ兵ナリ、此間執事ノ重恩ヲ與ヘテ傍若無人ノ行迹セラレタルモ、理カナト思ハヌ人ハ無リケリ、義貞ノ兵是ヲ見テ、アハレ敵ヤト匂リケレハ、栗生、篠塚、畑、矢部、堀口、由良、長濱ヲ始トシテ、大力ノ覺ヘ取タル惡者トモ、天正與本云、義貞ノ四天王ト云レケル、栗生、篠塚、由良、我先ニ彼良新左衛門、畑六郎左衛門以下ノ若者共進出、云々武者ト組テ、勝負ヲ決セント、馬ヲ進メテ相近ツク、兩方名譽ノ大力共カ、人交モセス軍スル、アレ見ヨトノ、メキテ、敵御方諸共ニ、カタツヲ吞テ汗ヲ流シ、是ヲ見物シテソ控ヘタル、懸ル處ニ、島津馬ヨリ飛テ下リ、兜ヲ脱テ、閑々ト見ツクロヒヲスル程ニ、何トスルソト見居タレハ、オメオメト降參シテ、義貞ノ勢ニソ加リケル、

義貞ノ四天王

島津降參

賤上下是ヲ見テ、譽ツル言ヲ翻シテ、惡マヌ者ハ無リケリ、是ヲ降人ノ始トシテ、或ハ年來重恩ノ郎從、或ハ累代奉公ノ家人共、主ヲ捨テ降人ニナリ、親ヲ棄テ敵ニ附目モ當ラレサル有様ナリ、凡源平威ヲ振ヒ、互ニ天下ヲ爭ハン事モ、今日ヲ限トソ見ヘタリケル、

鎌倉火災

鎌倉兵火附長崎父子武勇事

サル程ニ濱面ノ在家、并稻瀬河ノ東西ニ火ヲ懸タレハ、天正本云、濱ノ東西ニ火ヲ懸テ攻入官軍手々ニ火ヲ放、云々折節濱風烈シク吹布テ、車輪ノ如クナル炎、黒煙ノ中ニ飛散テ、十町二十町カ外ニ燃附事、同時ニ二十餘箇所ナリ、二十、毛利家、北條家、金勝院、南都本作三十二猛火ノ下ヨリ源氏ノ兵亂入テ、度方ヲ失ヘル敵共ヲ、此彼ニ射伏切伏、或引組テ刺違、或生捕分捕様々ナリ、煙ニ迷ヘル女董部共追立ラレテ、火ノ中暫ノ底共云ス、逃倒レタル有様ハ、是ヤ此帝釋宮ノ戦ニ、修羅ノ眷屬共、天帝ノ爲ニ罰セラレテ、劍戟ノ上ニ倒伏、阿鼻大城ノ罪人カ、獄卒ノシモトニ驅レテ、鐵湯ノ底ニ落入ランモ、角ヤト思ヒ知ラレテ、語ルニ言モ更ニナク、聞ニ哀ヲ催シテ、皆涙ニソ咽ケル、サル程ニ餘烟四方ヨリ吹懸テ、相模入道殿ノ屋形近ク火懸リケレハ、相模入道殿千餘騎ニテ、葛西谷ニ引籠リ給ヒケレハ、諸大將ノ兵共ハ、東勝寺ニ充滿タリ、是ハ父祖代々ノ墳墓ノ地ナレハ、

高時葛西谷東勝寺ニ籠ル

長崎父子ノ奮戦

小町口ノ戦

天狗堂扇谷ノ戦

爰ニテ兵共ニ防矢射サセテ、心閑ニ自害セン爲ナリ、中ニモ長崎三郎左衛門入道思元三郎、毛利家、北條家、金勝院、南都本、作三郎下倣之、子息勘解由左衛門爲基今出川家、北條家、南都本、作基氏、金勝院本也、長崎三郎、同勘解由左衛門三人之名、諸本或同或異、未知孰是、二人ハ極樂寺ノ切通ヘ向ヒテ、攻入敵ヲ支テ防ケルカ、敵ノ関ノ聲、既ニ小町口ニ聞ヘテ、鎌倉殿ノ御屋形ニ火懸リヌト見ヘシカハ、相從兵七千餘騎ヲハ、七千、西源院本、作二千、猶本ノ攻口ニ殘置キ、父子二人カ手勢六百餘騎ヲ勝リテ、小町口ヘソ向ケル、義貞ノ兵是ヲ見テ、中ニ取籠テ討ントス、長崎父子一所ニ打寄テ、魚鱗ニ連リテハ懸破リ、虎韜ニ別テハ追靡ケ、七八度カ程ソ揉タリケル、義貞ノ兵共、蜘蛛手十文字ニ懸散サレテ、若宮小路ヘ颯ト引テ、人馬ニ息ヲソ繼セケル、懸ル處ニ、天狗堂ト扇谷ニ軍有ト覺テ、馬煙夥シク見ヘケレハ、長崎父子左右ヘ別テ、馳向ハントシケルカ、子息勘解由左衛門、是ヲ限ト思ヒケレハ、名殘惜ケニ立留リ、遙ニ父ノ方ヲ見遣テ、兩眼ニ涙ヲ浮ヘテ、行モ過サリケルヲ、父キツト是ヲ見テ、高ラカニ恥シメ、馬ヲ控ヘテ云ケルハ、何カ名殘ノ惜カルヘキ、獨死テ獨生殘ランニコソ、再會其期モ久カランスレ、我モ人モ今日ノ中ニ討死シテ、明日ハ冥途ニ寄合ンスル者カ、一夜ノ程ノ別、何カサマテハ悲シカルヘキト、高聲ニ申ケレハ、爲基涙ヲ推拭ヒ、サ候ハ、疾シテ冥途ノ旅御急キ候ヘ、死出ノ山路

長崎爲基

由井演ニ戦フ

ニテハ、待進ラセ候ハント云捨テ、大勢ノ中ヘ懸入ケル、心ノ中コソ哀ナレ、相從フ兵、僅ニ二十餘騎ニ成シカハ、今出川家、北條家、南都本、作二百餘騎、北條家、南都本、作三千餘騎、敵三千餘騎ノ、眞中ニ取籠テ、短兵急ニ拉カントス、爲基カ佩タル太刀ハ、面影ト名テ、來太郎國行カ國吉、百日精進シテ、百貫ニテ三尺三寸ニ毛利家、北條家、金勝院、西源院本、作三尺三寸、南都本作三尺四寸、打タル太刀ナレハ、此鋒ニ廻ル者、或ハ兜ノ鉢ヲ堅破ニ破ラレ、或ハ胸板ヲ、袈裟懸ニ切テ落サレケル程ニ、敵皆是ニ追立ラレテ、敢テ近ツク者モ無リケリ、只陣ヲ隔テ、矢衾ヲ作テ、遠矢ニ射殺サントシケル間、爲基カ駕タル馬ニ、矢ノ立コト七筋ナリ、角テハ然ルヘキ敵ニ近ツイテ、組ントスル事叶ハシト思ヒケレハ、由井演ノ大鳥居前ニテ、馬ヨリユラリト飛テ下、只一人太刀ヲ倒ニ杖テ、二王立ニソ立タリケル、義貞ノ兵是ヲ見テ、猶モ只十方ヨリ、遠矢ニ射計ニテ、寄合ントスル者ソ無リケル、敵ヲ謀ラシタメニ、手負タル眞似ヲシテ、小膝ヲ折テソ伏タリケル、爰ニ誰トハ知ラス、リツゴ、種子引兩ノ今出川家、北條家、南都本、作三引兩、笠驗附タル武者五十餘騎、ヒシヒシト打寄テ、勘解由左衛門カ首ヲ取ント、争ヒ近ツキケル處ニ、爲基カハト起テ、太刀ヲ取直シ、何者ソ、人ノ軍ニシクタヒレテ、晝寢シタルヲ驚スハ、イテ己等カホシカル首取セント云儘ニ、鏑本マテ血ニ成タル太刀ヲ打揮テ、鳴雷ノ落懸ル様ニ、大手ヲハタケテ追ケル間、五十

餘騎ノ者共、逸足ヲ出テ逃ケレトモ、勘解由左衛門大普揚テ、何クマテ逃ルソ、キタナシ返セト、旬ル聲ノ、口耳ノ本ニ聞エテ、日來サシモ早シト思ヒシ馬共、皆一所ニ躍ル心地シテ、恐シナント云計ナシ、爲基只一人、懸入テ裏ヘヌケ、取テ返シテハ懸亂シ、今日ヲ限ト戰シカ、二十一日ノ合戰ニ、由井濱ノ大勢ヲ、東西南北ニ懸散シ、北條家、金勝院、西源院、南都本、云々、七八度迄懸散、云々、敵御方ノ目ヲ驚シ、其後ハ生死ヲ知ラス成ニケリ、

大佛貞直金澤貞將討死事

サル程ニ大佛陸奥守貞直ハ、昨日マテ二萬餘騎ニテ、極樂寺ノ切通ヲ支テ、防戰給ヒケルカ、今朝ノ濱ノ合戰ニ、三百餘騎ニ討成レ、剩ヘ敵ニ後ヲ遮ラレテ、前後ニ度ヲ失テオハシケル處ニ、鎌倉殿ノ御屋形ニモ、火懸リヌト見シカハ、世ノ中今ハサテトヤ思ヒケン、又主ノ自害ヲヤ勸ケン、宗徒ノ郎從三十餘人、金勝院本、作二十人、白洲ノ上ニ物具脱棄、一面ニ竝居テ腹ヲソ切ニケル、貞直是ヲ見給ヒテ、日本一ノ不覺ノ者共ノ舉動カナ、千騎カ一騎ニ成マテモ、敵ヲ亡シテ名ヲ後代ニ殘スコソ、勇士ノ本意トスル所ナレ、イテサラハ最期ノ一合戰快クシテ、兵ノ義ヲ勸ントテ、二百餘騎ノ兵ヲ相從ヘ、先大島里見、額田、桃井、六千餘騎ニテ控ヘタル眞中ヘ破テ入、思フ程戰テ、敵數多討取テ、ハツト懸出見給ヘハ、其勢僅ニ六十餘騎ニ成ニケリ、天正本云、貞直大勢

大佛貞直
戰死ス

ニ破テ入、三度合テ三度分レ、六十餘騎ニ成ニケリ、云々、貞直其兵ヲ指招テ、今ハ末々ノ敵ト懸合テモ無益ナリトテ、脇屋義助雲霞ノコトクニ控ヘタル眞中ヘ懸入、一人モ殘ラス討死シテ、名ヲ戰場ノ土ニソ殘シケル、北條家譜云、元弘三年五月廿二日貞直戰死、

○今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、竝云、貞直快ク一軍シテ、義ヲ勸ントテ、二百五十餘騎ノ者共、今川家本作、二百餘騎、轡ヲ並ヘテ敵大勢中ヘ懸入、先一番ニ山名里見カ三千餘騎ニテ控ヘタル中ヘ懸入、一太刀打シテ、ツト懸拔見給ヘハ、五十騎許討レ、今川家本無三五、十騎戰死句、二百騎ニモ足スソナリニケル、毛利家、金勝院、西源院本、云々、二番ニ額田、桃井カ二千餘騎ニテ控タル中ヘ喚テ懸入、暫戰懸出見給ヘハ、三十騎許討ル、今川家本無三三、十騎戰死句、百八十騎ニ成ニケリ、百八十、毛利家本作、百七十、北條家、南都本、作、百六十、金勝院本作、百十騎、三番ニ大井田、鳥山カ、千餘騎ニテ控ヘタル中ヘ懸入テ、敵數多討取テ懸出タレハ、其勢僅ニ六十餘騎ニ成ニケリ、四番ニ搦手大將脇屋義助、六萬餘騎ニテ控タル中ヘ懸入テ、一人モ殘ラス討レケリ、云々、第十一卷、金剛山寄手等被レ誅段、諸本竝云、大佛貞直於、南都、兼染出陀峯、被レ誅者、大佛右馬權助高直也、非、貞直也、第十一卷、高訛作、貞、故貞直之死、重出、顯、然第六卷第七卷、圖、金剛山、亦有、大佛貞直者、高直之訛乎、若爲、貞直圖、金剛山、者、未審、何時、歸、鎌倉、

金澤貞將

金澤武藏守貞將モ、山内ノ合戰ニ、相從フ兵八百餘人打散サレ、我身モ七箇所マテ創ヲ被テ、相摸入道ノオハシマス、東勝寺ヘ打歸リ給ヒタリケレハ、入道斜ナラス

感謝シテ、驍ヲ兩探題職ニ居ラルヘキ御教書ヲ成レ、相摸守ニソ遷サレケル、貞將
ハ一家ノ滅亡（日、神田本）ノ中ヲ過サシト思ハレケレ共、多年ノ所望、氏族ノ規模トスル職ナ
レハ、今ハ冥途ノ思出ニモナレカシト、彼御教書ヲ受取テ、又戰場ヘ打出、給ヒケル
カ、其御教書ノ裏ニ、棄我百年命、報公一日恩ト大文字ニ書、是ヲ鎧ノ引合ニ入テ、大
勢ノ中ヘ懸入、終ニ討死シ給ヒケレハ、北條家譜云、元弘三年五月二十二日、貞將戰死、當家モ他家モ推ナヘテ、威
セヌ者モ無リケリ、

普恩寺入道信忽自害事

サル程ニ普恩寺前相摸入道信忍モ、西源院本作「信慧」下微之、按「北條家譜」信忍、俗名基時、尾張守時兼子、時政六世孫也、一名鑑忍、或云觀恩、未知孰是、假
粧坂ヘ向ハレタリ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、三千餘騎ニテ假粧坂ヘ向ハル、云々、按、義貞攻ミ入鎌倉一段云、金澤左近太夫將監守假粧坂、今作「信忍」者、蓋信忍亦俱守一所也、
夜晝五日ノ合戦ニ、郎從悉討死シテ、僅ニ二十餘騎ソ殘リケル、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、郎從或ハ討レ、或ハ敵ニ成テ、僅ニ三十六騎ソ殘ケル、云々、諸方ノ攻口皆破レテ、敵谷々ニ入亂ヌト申ケレハ、入道普恩寺、
討殘サレタル若黨諸共ニ自害セラレケルカ、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、入道ヲ始トシテ、三十六騎ノ兵トモ、皆普恩寺ヘ走入テ、同時ニ自害、子息越後守仲時、六波羅ヲ落テ、江州番馬ニテ腹切給ヒヌト告タリケレハ、
其最後ノ有様思ヒ出シテ、哀ニ堪スヤ思ハレケン、一首ノ歌ヲ御堂ノ柱ニ、血ヲ以テ書附給ヒケルトカヤ、

北條基時
其子江子
時仲死
其馬近
時仲死

マテシハシ死出ノ山邊ノ西源院本云、死出ノ山ユク、云々、旅ノ道

同シク越テ浮世語ラン

年來嗜ミ弄ヒ給ヒシ事トテ、最期ノ時モ忘レス、心中ノ愁緒ヲ述テ、天下ノ稱嘆ニ
殘サレケル、數奇ノ程コソヤサシケレト、皆感涙ヲソ流シケル、

鹽田入道父子自害附狩野重光事

爰ニ不思議ナリシハ、鹽田陸奥入道道祐カ、按、俗名國時、駿河守義政子、時政五世孫也、道祐、今出川家、北條家、南都本作「信時」、親ノ自害ヲ勸ント、腹カキ切テ、目ノ前ニ伏タリ
ケルヲ見給ヒテ、幾程ナラヌ今生ノ別ニ、目昏心迷テ、落ル涙モ止マラス、先タチヌ
ル子息ノ菩提ヲモ祈リ、我逆修ニモ備ヘントヤ思ハレケン、子息ノ尸骸ニ向テ、年
來讀給ヒケル持經ノ紐ヲ解、要文處々打上、心閑ニ讀誦シ給ヒケリ、打漏サレタル
郎等共、主ト共ニ自害セントテ、二百餘人並居タリケルヲ、三方ヘ差遣シ、此御經誦
給ヘル程、防矢射ヨト下知セラレケル、其中ニ狩野五郎重光計ハ、年來ノ者ナル上、
近ク召仕レケレハ、吾腹切テ後、屋形ニ火ヲ懸テ、敵ニ首トラスナト云合メ、一人留
置レケル、法華經既ニ五ノ卷ノ提婆品ハテントシケル時、狩野五郎門前ニ走出、四
方ヲ見ル眞似ヲシテ、防矢仕ツル者共早皆討レテ、敵攻近ツキ候、早々御自害候ヘ

鹽田國時
ノ自殺

戰場ノ心
經カニテ

ト勸ケレハ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本入道サラハトテ、經ヲハ左ノ手ニ握
 リ、右ノ手ニ刀ヲ拔テ、腹十文字ニカキ切テ、父子同シ枕ニソ伏給ヒケル、重光ハ年
 來ト云、重恩ト云、當時遺言旁遁難カリケレハ、應テ腹ヲモ切ンスラント思ヒタレ
 ハ、サハナクテ、主二人ノ鎧太刀刀剣取、家中ノ財寶、中間下部ニ取持セテ、圓覺寺ノ
 藏主寮ニソ隠居タリケル、此重寶トモニテハ、一期不足アラシト覺シニ、天罰ニヤ
 懸リケン、船田入道是ヲ聞附テ押寄セ、是非ナク召捕テ、遂ニ首ヲ刎テ由井濱ニソ
 懸ラレケル、西源院本無、鼻首之事尤角コソ有タケレトテ、惡マヌ者モ無リケリ、

鹽飽入道父子自害事

鹽飽新左近入道聖遠ハ、新左近、北條家、金勝院、西源院、南都本作、左衛門、下做之、西源院、南都本遠作、嫡子西源院本三郎左衛門忠
 頼ヲ呼テ、金勝院、西源院本無、左衛門字、下做之、

○今出川家、北條家、南都本竝云、聖遠ハ永井掃部入道カ子息掃部三郎忠頼ヲ北
家本作、忠朝、猶子ニシテアリケルヲ、前へ呼寄テ申ケルハ、下同、
 諸方ノ攻口悉破レ、御一門達、大略腹切セ給フト聞ヘケレハ、入道モ守殿ニ先タチ
 進ラセテ、其忠義ヲ知レ奉ラント思フナリ、サレハ御邊ハイマタ私ノ眷養ニテ、公
 方ノ御恩ヲセ蒙ラネハ、縦一所ニテ今命ヲ棄ス共、人強チ義ヲ知ヌ者トハヨモ思

ハシ、然ハ何クニモ暫ク身ヲ隱シ、出家遁世ノ身トモナリ、我後世ヲモ弔ヒ、心安ク
 一身ノ生涯ヲモクテセカシト、涙ノ中ニ宣ヒケレハ、三郎左衛門忠頼モ、兩眼ニ涙
 ヲ浮ヘ、シハシ物モ申サレサリケルカ、良有テ是コソ仰共覺候ハネ、忠頼直ニ公方
 ノ御恩ヲ蒙リタル事ハ候ハネト、一家ノ續命、悉是武恩ニアラスト云事ナシ、其上
 忠頼幼少ヨリ釋門ニ居タル事ナラハ、恩ヲ棄テ無爲ニ入ル道モ然ナルヘシ、苟モ
 弓矢ノ家ニ生レ、名ヲ此ノ門葉ニ懸ナカラ、武運ノ傾ヲ見テ、時ノ難ヲ遁レンカ爲
 ニ、出座ノ身ト成テ、天下ノ人ニ指レン事、是ニ過タル恥辱ヤ候ヘキ、御腹召レ候ハ
 、冥途ノ御道シルヘ仕候ハント云モハテス、袖ノ下ヨリ刀ヲ拔テ、竊ニ腹ニ撞タ
 テ、畏タル體ニテ死ニケル、其弟鹽飽四郎金勝院本云、名是ヲ見テ、續テ腹ヲ切ントシ
 ケルヲ、父ノ入道大ニ諫テ、暫ク吾ヲ先タテ、順次ノ孝ヲ專ニシ、其後自害セヨト申
 ケレハ、鹽飽四郎、拔タル刀ヲ歛メテ、父ノ入道カ前ニ畏テソ候ケル、入道是ヲ見テ
 快クニ打笑、閑々ト中門ニ曲录ヲ飾ラセテ、其上ニ結脚踏座シ、硯取寄テ、自ラ筆ヲ
 染、辭世ノ頌ヲソ書タリケル、今出川家、北條家、南都本云、頌ヲ大文字ニ書、云々、
 提持吹毛、截斷虚空、此二句、今川家、毛利家、金勝院、西源院、南都本云、著タル大口ニ書附、云々、
 ト書テ、又手シテ頸ヲ延テ、子息四郎ニ其討ト下知シケレハ、大袒ニ成テ父ノ首ヲ

墜落シ、天正本云、聖遠頭ヲノヘ、大祖ニ成テ、其討ト云ヘハ、四郎長テ父ノ首ヲ撃、云々其太刀ヲ取直シテ、鏝本マテ己カ腹ニツキ貫テ、ウツ伏様ニソ伏タリケル、郎等三人是ヲ見テ走寄り、同太刀ニ貫ヌカレテ、串ニ刺タル魚肉ノ如ク、頭ヲ連テ伏タリケル、

安東入道自害事

安東聖秀
ハ義貞ノ伯父ナリ
世良田太郎

安東左衛門入道聖秀ト申セシハ、聖秀、今出川家、北條家、南都本作昌賢、金勝院本作聖賢、下倣之、毛利家本作聖遠、恐非也新田義貞ノ北臺ノ伯父ナリシカハ、彼ノ女房、義貞ノ狀ニ我文ヲ書副テ、竊ニ聖秀カ方ヘソ遣サレケル、安東始ハ三千餘騎ニテ、三千、天正本作五百稻瀬河ヘ向ヒタリケルカ、世良田太郎カ金勝院本、稻村崎ヨリ、後ヘ廻リケル勢ニ、陣ヲ破ラレテ引ケルカ、由良長濱カ勢ニ、源云、名貞邦取籠ラレテ、百餘騎ニ討成サレテ、我身モ薄手數多所負テ、己カ館院本、自陣字ニ至レ、此三句不出、蓋誤脱手へ歸タリケルカ、今朝巳刻ニ、宿所ハ早燒テ、其跡モナシ、妻子眷屬ハ何チヘカ落行ケン、行末モ知ス成テ、尋問ヘキ人モナシ、是ノミナラス、鎌倉殿ノ御屋形モ燒テ、入道殿、東勝寺ヘ落サセ給ヒヌト申者有ケレハ、サテ御屋形ノ燒跡ニハ、傍輩何様腹切討死シテ見ユルカト尋ケレハ、一人モ見ヘス候トソ答ケル、是ヲ聞テ安東、口惜事カナ、日本國ノ主、鎌倉殿程ノ人ノ、年來住給ヒシ處ヲ、敵ノ馬ノ蹄ニ懸サセナカラ、ソコニテ千人モ二千人モ、討死スル人ノ無リシ事ヨト、後ノ人々ニ欺レン事コ

幕府ノ館
歸ル
燒蹟ニ

義貞ノ北臺
命ヲ助
ヨリテ
來ル

ソ恥辱ナレ、イサヤ人々、トテモ死センスル命ヲ、御屋形ノ燒跡ニテ、心閑ニ自害シテ、鎌倉殿ノ御恥ヲ雪カントテ、討殘サレタル郎等百餘騎ヲ相從ヘテ、小町口ヘ打莅ム、前々出仕ノ如ク、塔辻ニテ馬ヨリ下、空シキ跡ヲ見廻セハ、今朝マテ奇麗ナル大厦高牆ノ構、忽ニ灰燼ト成テ、須臾轉變ノ煙ヲ殘シ、昨日マテ遊戯セシ親類朋友モ、多ク戰場ニ死シテ、盛者必衰ノ尸ヲ餘セリ、悲ノ中ノ悲ニ、安東涙ヲ押ヘテ惘然タル處ニ、新田殿ノ北臺ノ御使トテ、薄様ニ書タル文ヲ捧タリ、何事ソトテ披見レハ、鎌倉ノ有様、今ハサテトコソ承候ヘ、如何ニモシテ此方ヘ御出候ヘ、此程ノ式ヲハ、身ニ易テモ申宥ヘク候ナト、様々ニ書レタリ、是ヲ見テ、安東大ニ色ヲ損シテ申ケルハ、梅檀ノ林ニ入者ハ、染サルニ衣自香シトイヘリ、武士ノ女房タル者ハ、ケナケナル心ヲ一ツ持テコソ、其家ヲモ繼、子孫ノ名ヲモ顯ス事ナレ、サレハ昔漢高祖ト楚項羽ト戰ケル時、王陵ト云者、城ヲ構テ籠リタリシヲ、楚是ヲ攻ルニ、更ニ落ス、此時楚ノ兵相謀テ云、王陵ハ母ノ爲ニ忠孝ヲ存スル事淺カラス、所詮王陵カ母ヲ捕ヘ、楯ノ面ニ當テ城ヲ攻ル程ナラハ、王陵矢ヲ射事ヲ得スシテ、降人ニ出ル事有ヘシトテ、潛ニ彼母ヲ捕テケリ、彼母心ノ中ニ思ヒケルハ、王陵我ニ仕フル事、大舜曾參カ孝行ニモ過タリ、我若楯ノ面ニ縛セラレ、城ニ向フ程ナラハ、王陵悲ニ堪ス

義貞夫妻ノ助命盡テ力ヲ拒ス

シテ、城ヲ落サルル事有ヘシ、如ス幾程ナキ命ヲ、子孫ノ爲ニ捨シニハト思定テ、自
劔ノ上ニ死テコソ、遂ニ王陵カ名ヲハ揚タリシカ、我只今迄武恩ニ浴シテ、人ニ知
ル、身トナレリ、今事ノ急ナルニ臨テ、降人ニ出タラハ、人豈恥ヲ知タル者ト思ハ
ンヤ、サレハ女性心ニテ、縦加様ノ事ヲ云ル、共、義貞勇士ノ義ヲ知給ハ、サル事
ヤアルヘキト制セラルヘシ、又義貞、縦敵ノ志ヲ計ラン爲ニ宣フ共、北方ハ我方様
ノ名ヲ失ハシト思ハレハ、固ク辭セラルヘシ、只似ルヲ友トスルウタテサ、子孫ノ
爲ニ憑レスト、一度ハ恨、一度ハ怒テ、彼使ノ見ル前ニテ、其文ヲ刀ニ拵リ加ヘ、腹カ
キ切テソ失給ヒケル、

龜壽落信濃附慧性偽自害落奥州事

爰ニ相模入道ノ舍弟、四郎左近大夫入道ノ方ニ候ケル、諏訪左馬助入道カ、毛利家、北條家、
金勝院、西源院、南都子息諏訪三郎盛高ハ、數度ノ戰ニ、郎等皆討レヌ、只主從二騎ニ成テ、
本作三左衛門入道左近入道ノ宿所ニ來テ申ケルハ、鎌倉中ノ合戰、今ハ是マテト覺テ候間、最期ノ御
供仕候ハン爲ニ參テ候、ハヤ思召切セ給ヘト勸申ケレハ、入道傍リノ人ヲノケサ
セテ、竊ニ盛高カ耳ニ宣ヒケルハ、此亂量ラサルニ出來、當家既ニ滅亡シヌル事、更
ニ他ナシ、只相模入道殿ノ御行迹、人望ニモ背キ、神慮ニモ違タリシ故ナリ、但天縱

諏訪盛高ト北條泰家

高時ノ子龜壽ト盛高

五大院某萬壽ヲ預ル

驕ヲ惡ミ、盈ヲ缺トモ、數代積善ノ餘慶家ニ盡スハ、此ノ子孫ノ中ニ、絶タルヲ繼キ、
廢タルヲ興ス者無ランヤ、昔齊襄公無道ナリシカハ、齊ノ國亡フヘキヲ見テ、其臣
ニ鮑叔牙ト云ケル者、襄公ノ子小白ヲ取テ中略、公孫無知ヲ討事ヲ得テ、遂ニ再ヒ
齊國ヲ保タセケル、齊桓公ハ是ナリ、サレハ我ニ於テ、深ク存スル仔細アレハ、左右
ナク自害スル事有ヘカラス候、遁ツクヘクハ、再ヒ會稽ノ恥ヲ雪ハヤト思フナリ、
御邊モ能々遠慮ヲ運ラシテ、何ナル方ニモ隱忍フカ、然スハ、降人ニ成テ命ヲ繼テ、
姪ニテアル龜壽ヲ匿シ置テ、龜壽、金勝院、西源院本作三桃壽、天正本作三兆壽、梅松論作三壽、
丸一下假之、按三北條家語、相模二郎時行、小名龜壽、一云全嘉丸時至
スト見シ時、再大軍ヲ起シテ、素懷ヲ遂ラルヘシ、兄ノ萬壽ヲハ、五大院右衛門ニ申
附タレハ、心安ク覺ルナリト宣ヘハ、盛高涙ヲ押ヘテ申ケルハ、今マテハ一身ノ安
否ヲ、御一門ノ存亡ニ任候ツレハ、命ヲハ惜ヘク候ハス、御前ニテ自害仕テ、二心ナ
キ程ヲ見ヘ進ラセ候ハンスル爲ニコソ、是マテ參テ候ヘ共、死ヲ一時ニ定ルハ易
ク、謀ヲ萬代ニ殘スハ難シト申事候ヘハ、兎モ角モ仰ニ隨ヘク候トテ、盛高ハ御前
ヲ罷立テ、相摸殿ノ妾二位殿御局ノ扇谷ニ、毛利家、北條家、金勝院、南都、天正本作三辨谷、オハシケル處ヘ參
タリケレハ、御局ヲ始進ラセテ、女房達マテ、誠ニ嬉シケニテ、サテモ此世ノ中ハ、何
ト成行ヘキソヤ、我等ハ女ナレハ、立隠ル、方モ有ヌヘシ、此龜壽ヲハ如何スヘキ、

兄ノ萬壽ヲハ五大院右衛門、隠スヘキ方有トテ、今朝何方ヘヤラン具足シツレハ、心安ク思フナリ、只此龜壽カ事思煩テ、露ノ如クナル我身サヘ、消柁ヌルソト、泣口説給フ、盛高、此事有儘ニ申テ、御心ヲモ慰奉ラハヤト思ヒケレ共、女性ハ墓ナキ者ナレハ、後ニ若人ニ洩シ給フ事モヤト思返シテ、涙ノ中ニ申ケルハ、此世中、今ハサテトコソ覺候ヘ、御一門大略御自害候ナリ、大殿計コソ、イマタ葛西谷ニ御座候ヘ、公達ヲ一目御覽シ候テ、御腹ヲ召ルヘキト仰候間、御迎ノ爲ニ參テ候ト申ケレハ、御局嬉シクニオハシツル御氣色、シホシホト成セ給ヒテ、萬壽ヲハ宗繁ニ預ツレハ心安シ、構テ此子ヲモ能々隠シテクレヨト仰モ敢ス、御涙ニ咽ハセ給ヒシカハ、盛高モ岩木ナラネハ、心計ハ悲シケレ共、心ヲ強ク持テ申ケルハ、萬壽御料ヲモ、五大院右衛門宗繁カ具足シ進ラセ候ツルヲ、敵見附テ追懸進ラセ候シカハ、小町口ノ在家ニ走入テ、若子ヲハ刺殺シ進ラセ、我身モ腹切テ燒死候ツルナリ、アノ若子モ、今日此世ノ御名殘是ヲ限ト思召候ヘ、トテモ隠レアルマシキ物故ニ、狩場ノ雉ノ草隠レタル有様ニテ、敵ニ搜シ出サレテ、幼キ御尸ニ、一家ノ御名ヲ失レン事口惜ク候、其ヨリハ大殿ノ御手ニ懸ラレ給ヒテ、冥途マテ御供申サセ給ヒタランコソ、生々世々ノ忠孝ニテ御座候ハン、疾々入進ラセ給ヘト勸ケレハ、御局ヲ始進ラ

盛高信濃
へ落ッ
中前代相
模二郎
北條泰家
奥州ニ落ッ

セテ、御乳母ノ女房達ニ至ルマテ、ウタテノ事ヲ申者カナ、セメテ敵ノ手ニ懸ラハ如何セン、二人ノ公達ヲ懷キ育ミ進ラセツル人々ノ、手ニ懸テ失ヒ奉ランヲ見聞テハ、如何計トカ思遣ル、只我ヲ先殺シテ後、何トモ計ヘトテ、少キ人ノ前後ニ取附テ、聲モ惜マス泣悲給ヘハ、盛高モ目昏心消々ト成シカトモ、思ヒキラテハ叶フマシト思ヒテ、聲ヲイラ、ケ色ヲ損シテ、御局ヲ睨奉リ、武士ノ家ニ生ン人、襦袢ノ中ヨリ、懸ル事有ヘキト思召レヌコソウタテケレ、大殿ノサコソ待思召候ラン、早御渡リ候テ、守ノ殿ノ御供申サセ給ヘト云儘ニ、走懸リ龜壽殿ヲ抱取テ、鎧ノ上ニ昇負テ、門ヨリ外ヘ走出レハ、同音ニワツト泣ツレ給ヒシ御聲々、遙ノ餘所マテ聞ヘツ、耳ノ底ニ留レハ、盛高モ涙ニ行兼テ立返テ見送レハ、御乳母ノ御妻ト申者ハ歩跳ニテ人目ヲモ憚カラス、走出サセ給ヒテ、四五町カ程ハ、泣テハ倒レ、倒レテハ起跡ニ附テ追レケルヲ、盛高心強ク、行方モ知レシト、馬ヲ進メテ行程ニ、後影モ見ヘス成ニケレハ、御妻今ハ誰ヲソタテ誰ヲ憑テ、命ヲ惜ヘキソヤトテ、アタリナル古井ニ身ヲ投テ、終ニ空シク成給フ、其後盛高、此若公ヲ具足シテ信濃ヘ落下リ、諏訪祝ヲ憑テ有シカ、建武元年ノ春ノ比、暫關東ヲ劫略シテ、天下大軍ヲ起シ、中前代ノ大將ニ、相模二郎ト云ハ是ナリ、角シテ四郎左近大夫入道ハ、二心ナキ侍共ヲ呼

中黒ノ笠
驗ヲ附ク

後、西園
寺家ニ仕
トヘテ時
興

長崎高重
ノ奮戦

寄テ、我ハ思フ様有テ、奥州ノ方へ落テ、再ヒ天下ヲ覆ス謀ヲ運スヘシ、南部太郎金部三郎景家、伊達六郎金部三郎景家、二人ハ、案内者ナレハ召具スヘシ、其外ノ人々ハ自害シテ、屋形ニ火ヲカケ、我ハ腹ヲ切テ焼死タル體ヲ敵ニ見スヘシト宣ヒケレハ、二十餘人ノ侍共、一議ニモ及ハス、皆御錠ニ隨ヘシト申ケル、伊達、南部二人ハ、貌ヲヤツシ夫ニナリ、中間二人ニ物具キセテ馬ニノセ、中黒ノ笠驗ヲ附サセ、四郎入道ヲアテ獲ニ載テ、血ノ附タル帷子ヲ上ニ引覆ヒ、源氏ノ兵ノ手負テ本國へ歸ル眞似ヲシテ、武藏迄ソ落タリケル、其後殘シ置タル侍共、中門ニ走出、殿ハ早御自害有ソ、志ノ人ハ皆御供申セト呼リテ、屋形ニ火ヲ懸、忽ニ煙ノ中ニ竝居テ、二十餘人ノ者共ハ、一度ニ腹ヲソ切タリケル、是ヲ見テ、庭上門外ニ袖ヲ連ネタル兵共三百餘人、面々ニ劣シ劣シト腹切テ、猛火ノ中へ飛テ入、尸ヲ殘サス焼死ケリ、サテコソ四郎左近大夫入道ハ、落給ヒヌル事ヲハ知スシテ、自害シ給ヒヌトハ思ヒケレ、其後西園寺ノ家ニ仕ヘテ、建武ノ比、京都ノ大將ニテ時興ト云レシハ、此入道ノ事ナリケリ、

長崎高重最期合戦事

サル程ニ長崎次郎高重ハ、次郎、今出川家、北條家、南都本、新田義貞舉義兵一段作、四郎、今同、本文、相繼語、高重、今出川家、毛利家、北條家、西源院、南都本作、其資、下倣之、按、義貞舉義

葛西谷ニ
歸リテ高
時ニ逃フ

兵一段、毛利家本作、爲基、金勝院本、前作ニ陸泰一而自レ此以下皆同ニ本文、ノ戦ニ本、天正、七、毎度先ヲ懸、圍ヲ破リテ、自相當ル事其數ヲ知ラス、然ハ手ノ者若黨共、次第ニ討亡サレテ、今ハ僅百五十騎ニ成ニケリ、西源院本云、我身モ手負、郎等、五月二十二日ニ、源氏早谷々へ亂入テ、當家ノ諸大將、大略皆討レ給ヒヌト聞ヘケレハ、誰固メタル陣トモ云ス、只敵ノ近ツク處へ馳合馳合、八方ノ敵ヲ拂テ、四隊ノ固ヲ破リケル間、馬疲レヌレハ、騎替、太刀打折レハ、佩易テ、自敵ヲ斬テ落ス事三十二人、陣ヲ破ル事八箇度ナリ、天正本作、十三度、角テ相模入道ノオハシマス、葛西谷へ歸リ參テ、中門ニ畏リ涙ヲ流シ申ケルハ、高重數代奉公ノ義ヲ忝シテ、朝夕恩顔ヲ拜シ奉リツル御名殘、今生ニ於テハ、今日ヲ限トコソ覺候へ、高重一人數箇所ノ敵ヲ打散シテ、數度ノ北條家、金勝院、南都本作、三、八箇度、戦ニ、毎度打勝候トイヘ共、方々ノ口々皆攻破ラレテ、敵ノ兵餘倉中ニ充滿シテ候、ヌル上ハ、今ハヤタケニ思フ共叶フヘカラス候、只一スシニ敵ノ手ニ懸ラセ給ハヌ様ニ、思召定サセ給ヒ候へ、但高重歸參テ勸申サン程ハ、左右ナク御自害候ナ、上ノ御存命ノ間ニ、今一度快ク敵ノ中ニ懸入、思フ程ノ合戦シテ、冥途ノ御供申サン時ノ物語ニ仕候ハントテ、又東勝寺ヲ打出レハ、其後影ヲ相模入道遙ニ見給ヒテ、是ヤ限ナルラント、名殘惜ケナル體ニテ、涙クミテソ立レ

崇壽寺ノ
南山士雲
ニ參ズ

タル、長崎次郎鑑ヲハ脱捨筋ノ帷ノ月日押タルニ、精好ノ大口ノ上ニ、赤絲ノ腹巻
著テ、小手ヲハ差ズ、兎雞ト云ケル坂東一ノ名馬ニ、金貝ノ鞍ニ、小總ノ鞞懸テソ乘
タリケル、是ヲ最期ト思ヒ定ケレハ、先崇壽寺ノ長老南山和尚ニ按、名士雲、重一參シ
國師法嗣也
テ案内申ケレハ、長老威儀ヲ具シテ出合給ヘリ、方々ノ軍急ニシテ、甲冑ヲ帶シタ
リケレハ、前云、高重脱、鑑著、腹巻、今云帶、甲冑、相繼、但金勝院、西源院本等異本、前無脱、鑑之句高重ハ庭ニ立チナカラ、左右ニ揖シテ
問曰、如何是勇士恁麼事、今川家本、作、未後事和尚答曰、吹毛急用不如前、北條家、南都本云、吹毛用了急須磨高重此
一句ヲ聞テ問訊シテ、門前ヨリ馬引寄打騎テ、百五十騎ノ兵ヲ前後ニ相隨ヘ、笠驗
カナクリ棄閑ニ馬ヲ歩セテ敵陣ニ紛入、

○天正異本云、高重百五十騎ヲ前後ニ立テ申ケルハ、面々今ニ至ル迄、度々ノ合
戰ニ、心底ヲ殘サス、振舞候條、返々其芳恩何ノ世ニモ謝シ難シ、只今打出ル處ノ
戰最期ナリ、若落ント思ハレン人々ハ落ラルヘシト申サレケレハ、士卒申ケル
ハ、何十度ト云數ヲシラス戰フニ、何百人カ御供仕討死シ候ヌランニ、我等萬死
ヲ出テ一生ニ逢コト、多年ノ值遇ナリ、今ニ至テ落退カン事、先タチテ討死仕ル
亡魂、草ノ陰ニテ思ハン事、返々恥入處ナリ、只死ネヤ死ネヤト、同音ニ喚叫テ懸
出ル、云々、

高重義貞
ヲ狙フ

由良新左
衛門

長濱六郎
左衛門

其志偏ニ義貞ニ相近ツカハ、組テ勝負ヲ決セン爲ナリ、高重旗ヲモサ、ス、打物ノ
鞘ヲハツシタル者無レハ、源氏ノ兵、敵トモ知ラサリケルニヤ、ヲメヲメト中ヲ開
テ通シケレハ、高重義貞ニ近ツク事僅ニ半町許ナリ、スハヤト見ケル處ニ、源氏ノ
運ヤ強カリケン、義貞ノ眞前ニ控ヘタリケル由良新左衛門是ヲ見知テ、只今旗ヲ
モサ、ス相近ツク勢ハ、長崎次郎ト見ルソ、サル勇士ナレハ、定テ思フ處有テソ、是
マテハ來ルラン、アマスナ漏スナト、大音上テ呼リケレハ、先陣ニ控タル武藏ノ七
黨三千餘騎三千、西源院
本作二千一東西ヨリ引裏テ、眞中ニ是ヲ取込、我モ我モト討ントス、高重
ハ支度相違シヌト思ヒケレハ、百五十騎ノ兵ヲ、ヒシヒシト一所ニ寄テ、同音ニ聞
ヲトツト揚、三千餘騎ノ者共ヲ、懸拔懸入交合、彼ニ顯レ此ニ隱レ、火ヲ散シテソ戰
ヒケル、聚散離合ノ有様ハ、須臾ニ變化シテ、前ニ有カトスレハ、忽焉トシテ後ニア
リ、御方カト思ヘハ、キツトシテ敵ナリ、十方ニ分身シテ、萬卒ニ同シク相當リケレ
ハ、義貞ノ兵、高重カ在所ヲ見定メス、多クハ同士打ヲソシタリケル、長濱六郎左衛
門本文脱、左衛門字、
今依、異本、補之是ヲ見テ、云甲斐ナキ人々ノ同士打カナ、敵ハ皆笠驗ヲ附スト見
ヘツルソ、中ニ紛レハ、其ヲ驗ニシテ組テ討ト下知シケレハ、甲斐、信濃、武藏、相模ノ
兵共推雙テハムツト組、組テ落テハ首ヲ取モアリ、トラル、アリ、芥塵天ヲ翳メ、汗

アハス敵

黨ノ者共

血地ヲ糺糊ス、其在様項王カ漢ノ三將ヲ靡シ、魯陽カ日ヲ三舍ニ回シ戰シモ、是ニハ過シトソ見ヘタリケル、サレ共長崎次郎ハイマタ討レス、主従只八騎ニ成テ戰ケルカ、猶モ義貞ニ組ント伺テ、近ツク敵ヲ打拂、動レハ差違テ、義貞兄弟ヲ目ニ懸テ廻リケルヲ、武藏國住人横山太郎重眞北條家、南都本作重直、金勝院本作重貞、推隔テ是非也、按系圖、重眞者、横山權守時安子也、推隔テ是ニ組ント、馬ヲ進メテ相近ツク、長崎モヨキ敵ナラハ組ント、懸合テ是ヲ見ルニ、横山太郎重眞ナリ、サテハアハス敵ソト思ヒケレハ、重眞ヲ弓手ニ相受、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、高重四尺三寸ノ太刀ヲ以テ、シタタカニ打附ル、下同三本文、兜ノ鉢ヲ菱縫ノ板マテ破著タリケレハ、重眞二ツニ成テ失ニケリ、馬モシリキニ打居ラレテ、小膝ヲ折テトウト伏ス、同國住人庄三郎爲久西源院本作長久、下倣之、是ヲ見テ、能敵ナリト思ヒケレハ、續テ是ニ組ントテ、大手ヲハタケテ馳懸ル、長崎遙ニ見テ、カラカヲ打笑、黨ノ者共ニ組ヘクハ、横山ヲモ何カハ嫌フヘキ、アハス敵ヲ失フ様、イテイテ己ニ知セントテ、爲久カ鎧ノ上卷、脚テ中ニ提ケ、弓杖五杖許、安々ト投渡ス、其人礫ニ中リケル武者二人、今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都本作二人、馬ヨリ倒ニ打落サレテ、血ヲ嘔テ空シク成ニケリ、西源院本云、長久カ鎧ノ上卷、脚テ中ニ提ケ、弓杖三杖ハカリ投タリケリ、則血ヲ吐テ死ス、云々、高重今ハトテモ敵ニ見知ラレヌル上ハト思ヒケレハ、馬ヲ懸居、大音揚テ名乗ケルハ、桓武第五皇子葛原親王ニ三代孫、按系圖、當作五代孫、平將軍貞盛ヨリ十三代、按北條家譜、當前作五代

西谷ニ歸ル
契約ニモ
再ビニ
葛原

相模守高時ノ諸異本作高原親王十八代孫、相模守高時、亦可疑、管領ニ、長崎入道圓喜カ嫡孫、次郎高重、武恩ヲ報センタメ討死スルソ、高名セント思ハン者ハ、ヨレヤ組ント云儘ニ、鎧ノ袖引チキリ、草摺數多切落シ、太刀ヲモ鞘ニ斂ツ、左右ノ手ヲヒロケテハ、此ニ馳合、彼ニ馳遠、大童ニ成テ懸散シケル、懸ル處ニ郎等共、馬ノ前ニ馳塞テ、何如ナル事ニテ候ソ、御一所コソ加様ニ馳廻リマシマセ、敵ハ大勢ニテ、早谷谷ニ亂入、火ヲ懸物ヲ亂妨シ候、急御歸候テ、守ノ殿ノ御自害ヲモ勸申サセ給ヘト云ケレハ、高重郎等ニ向テ宣ケルハ、餘リニ人ノ逃ルカ面白サニ、大殿ニ約束シツル事ヲモ忘ヌルソ、イサ、ラハ歸參ントテ、主従八騎ノ者共、山内ヨリ引歸シケレハ、逃テ行トヤ思ヒケン、兒玉黨五百餘騎五百、西源院本作五十、下倣之、キタナシ返セト匂テ、馬ヲ爭テ追懸タリ、高重コトコトシノ奴原ヤ、何程ノ事ヲカ仕出スヘキトテ、聞ヌ由ニテ打ケルヲ、手茂ク追テ懸リシカハ、主従八騎キツト見歸テ、馬ノ轡ヲ引回ストソ見ヘシ、山内ヨリ葛西谷口マテ、十七度マテ返シ合セテ、五百餘騎ヲ追退ケ、又閑々トソ打テ行ケル、高重カ鎧ニ立處ノ矢二十三筋、蓑毛ノ如ク折カケテ、葛西谷ヘ參リケレハ、祖父ノ入道待請テ、何トテ今マテ遅カリツルソ、今ハ是マテカト問レケレハ、高重畏リ、若大將義貞ニ寄合セハ、組テ勝負ヲセハヤト存候テ、二十餘度マテ懸入候ヘ共、遂ニ近ツキ得

ス、其人ト覺シキ敵ニモ見合候ハテ、ソツロナル黨ノ奴原四五百人今川家、天正本作三四五十人、斬落シテソ捨候ツラン、哀罪ノ事タニ思ヒ候ハスハ、猶モ奴原ヲ濱面ヘ追出シテ、弓手馬手ニ相附、車切胴切立破ニ仕棄度存候ツレ共、上ノ御事如何ト御心元ナクテ、歸參テ候ト、聞モ涼シク語ルニソ、最期ニ近キ人人モ、少心ヲ慰メケル、

高時附一門以下於東勝寺自害事

サル程ニ高重走廻テ、早々御自害候ヘ、高重先ヲ仕テ、手本ニ見セ進ラセ候ハント云儘ニ、胴計殘タル鎧脱テ抛棄御前ニ有ケル盃ヲ以テ、舍弟ノ新右衛門ニ今出川家本作右衛門、北條家、南都本、作左衛門、毛利家、金勝院、西源院本、作新左衛門、恐共非也、詳註三下、酌ヲ取セ、三度傾テ攝津刑部大輔入道道準カ前ニ置道準、今出川家、北條家、南都本、作道集、下倣之、思サシ申ソ、是ヲ肴ニシ給ヘトテ、左ノ小脇ニ刀ヲ撞タテ、右ノ傍腹迄切目長ク搔破リ、内ナル腸繰出シテ道準カ前ニソ伏タリケル、道準盃ヲ取テ、アハレ肴ヤ、如何ナル下戸ナリトモ、此ヲノマヌ者アラシト戲テ、其盃ヲ半分計飲殘シテ、諏訪入道カ前ニ指置毛利家本、及神天正本、入道上有左衛門字、下倣之、同シク腹切テ死ニケリ、諏訪入道直性毛利家本、及神明鏡作直性、其盃ヲ以テ心閑ニ三度傾ケテ、相模入道殿ノ前ニ差置テ、若者共隨分藝ヲ盡シテ舉動レ候ニ、年老ナレハトテ、只ハ爭カ候ヘキ、今ヨリ後ハ、皆是ヲ送り肴ニ仕ルヘシトテ、腹十文字ニ搔切テ、其刀ヲ拔テ入道殿ノ

高重先ツ切腹ス

攝津道準

諏訪直性

長崎圓喜

長崎新右衛門

前ニ指置タリ、長崎入道圓喜ハ、是マテモ猶相模入道ノ御事ヲ、如何ト思タル氣色ニテ、腹ヲモイマタ切サリケルカ、長崎新右衛門西源院本作左衛門次郎、前作新左衛門、今編蓋一人矣、諸異本說具註三圖下、前後可并見、今年十五ニ成ケルカ、祖父ノ前ニ畏テ、父祖ノ名ヲ顯スヲ以、子孫ノ孝行トスル事ニテ候ナレハ、佛神三寶モ定テ御免コソ候ハンストラントテ、年老殘タル祖父ノ圓喜カ肱ノカ、リヲ二刀刺テ、其刀ニテ己カ腹ヲカキ切テ、祖父ヲ取テ引伏テ、其上ニ重テソ伏タリケル、

○今出川家、今川家、北條家、南部本並云、圓喜ハ是迄モ、猶入道殿ノ御供申サント、暫念佛シテ居タルカ、老年ナリトモ御先懸申サントテ、腹十文字ニカキ切テ、腸ヲ繰出シテ居タリケレ共、心少モ撓マスシテアリケルヲ、圓喜カ次男按長崎家譜、左衛門高貞也、被誅河彌陀峯、今云次男、不知何人也、圓喜子高資有三子、次郎高重、次男新右衛門也、蓋誤以孫爲子乎、本文作圓喜孫新右衛門爲得、十六歳ニナリケルカ、父祖ノ名ヲ顯サンニハ、佛神モ定テ御免ソアランスラント云テ、圓喜カ肘ノカ、リヲ二刀刺テ、返ヌ刀ニテ、己カ腹七寸許カキ切テ、同枕ニソ伏タリケル、下同

此小冠者ニ義ヲ進メラレテ、相模入道モ腹切給ヘハ、系圖云、高時以嘉元元年生、保曆間記云、三十一歳也、北條家譜云、四十二歳而自殺、恐非也、城入道續テ腹ヲソ切タリケル、是ヲ見テ堂上ニ座ニ列タル一門他家ノ人々、雪ノ如クナル膚ヲ推袒キ推袒キ、腹ヲ切人モアリ、自頭ヲカキ落ス

高時自害
一門以下
之ニ殉ズ

人モアリ、思々ノ最期ノ體殊ニ由々敷ソ見ヘタリシ、其外ノ人々ニハ、金澤大夫入道崇顯越後守顯時子、俗名貞顯、佐介近江前司宗直、甘名字駿河守宗顯毛利家、西源院本、無三字、金勝院本作海士名駿河守武元、家譜作甘繩伊豫守顯實、貞顯弟也、按常樂記、嘉曆二年三月廿六日、甘繩駿河入道顯實卒、年五十五、然則不當出子此、未知孰是、子息駿河左近大夫將監時顯按系圖、金勝院本作時、依、非、小町中務大輔朝實西源院本作中務權大輔入道、常葉駿河守範貞、名越土佐前司時元、金勝院本作土、寬、今出川家、北條家、南都本、作、時、光、恐、非、攝津刑部大輔天正本不出、按、攝津刑部大輔入道道準自殺、既出子前、今重出者、恐非也、伊具越前前也、按、北條家譜、時元左近將監時國子也、攝津刑部大輔準自殺、既出子前、今重出者、恐非也、伊具越前前司宗有金勝院本不出、西源院本作宗末、非也、按、北條家譜、宗有者兼義子也、城加賀前司師顯時長、秋田城介師時金勝院本作時、非也、今出川家、

毛利家、北條家、西源院、南都本、作、時、城越前守有時北條家、金勝院、西源院、南都本、無、城、字、今出川家、北條家、南都本、前作、後、、南部右馬頭茂時南部、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作、南、西源院本有作、左、毛利家、西源院本茂時作、義、時、恐、非、也、北條家譜云、右馬權頭茂時、相模守時子也、同、高、時、自殺、今作、南部氏、者、亦、非、也、、陸奥右馬助家時按、第六卷、家時在、攻、金剛山、之中、今出、此、相模右馬助高基、武藏左近大夫將監時名、陸奥左近將監時英、左、或、右、櫻田治部大輔貞國、江馬遠江守公篤、

式部大輔篤時按、第十一卷、及保曆間記、北條家譜云、治時、江守、於阿彌陀峯、與、此、矛盾、北條家、阿曾彈正少弼治時、按、諸本第十一卷、及保曆間記、北條家譜云、治時、請云、公篤於、鎌倉、自害、說未、知、孰、是、、阿彌陀峯、被、誅、今出、于、茲、者、蓋、誤、也、且、重出、兩所、大、顯、今、按、北條家譜、有、三、時、治、而、或、作、治、時、由、是、見、之、被、誅、阿彌陀峯、者、阿曾彈正少弼時治、而、自、殺、鎌倉、者、武藏左近將監時治乎、

阿彌陀峯、者、阿曾彈正少弼時治、而、自、殺、鎌倉、者、武藏左近將監時治乎、

兵庫助顯勝、備前左近大夫將監政雄、坂上遠江守貞朝、陸奥式部大輔高朝、城介高量、系圖作、同、式部大輔顯高、按、時顯子、同美濃守高茂、加賀守、秋田城介入道延明、天正本作、延、高景、

增鏡作、圖明、自、陸奥右馬助、至此、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、不出、下同、本文、明石長門介入道忍阿、長崎三郎左衛門入道思元

條家、金勝院、西源院、南都本、不出、下同、本文、

三郎、毛利家、北條家、金勝院、南都本、鎌倉兵火段、作、次郎、今、同、本文、相繼、隅田次郎左衛門按、金勝院本不載之、既出、于、第九、、攝津宮内大輔高親金勝院本不出、、同左近大夫將監親貞金勝院本秀慶、、名越一族三十四人、鹽田、赤橋、常葉、佐介ノ人々四十六人天正本云、左近大夫將監親貞、此人々ヲ始トシテ、以上百、、總シテ其門葉タル人二百八十三人天正本作三百八十餘人、梅松論云、時政子孫七百餘人、同時滅亡、云々、、我先ニト腹切テ、屋形ニ火ヲ懸タレハ、猛火盛ニ燃上リ、黒煙天ヲ翳タリ、

○毛利家、北條家、西源院本、載、鹽田陸奥入道、按、鹽田陸奥入道道祐自、殺、既出、前、今、誤、重、出、

○金勝院本載、明石民部大輔宗繼、同玄蕃允宗邦、長崎守重、諏訪二郎左衛門尉直城、同新八郎宗遠、安東掃部助利長、普恩寺相州入道信忍、安東左衛門入道聖賢、鹽飽入道聖遠、子息三郎忠賴、同四郎忠久自、普恩寺、至此、前、既、自、殺、誤、重、出、于、此、、○北條家譜云、武藏左近將監忠時貞將、佐々目大僧正有助、同相模入道高時、自殺、云々

庭上門前ニ並居タリケル兵共是ヲ見テ、或ハ自腹カキ切テ、炎ノ中ヘ飛入モアリ、或ハ父子兄弟刺違ヘ重リ伏モアリ、血ハ流テ大地ニ溢レ、漫々トシテ洪河ノ如クナレハ、戸ハ行路ニ横テ、累々タル郊原ノ如シ、死骸ハ燒テ見ヘネ共、後ニ名字ヲ尋ヌレハ、此一所ニテ死ヌル者、總テ八百七十餘人ナリ、

餘、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正、異、本、作、三、此外門葉恩願ノ者、僧俗男女ヲ云ハス、聞傳聞傳泉下ニ恩ヲ報スル人、世上ニ悲ヲ催ス者

弘元三年

遠國ノ事ハイサ知ス、録倉中ヲ考ルニ、總テ六千餘人ナリ、六千、毛利家、本作三千嗚呼此日如何ナル日ソヤ、元弘三年五月二十二日ト申ニ、平家九代ノ繁昌、一時ニ滅亡シテ、源氏多年ノ蟄懷、一朝ニ開ル事ヲ得タリ、

〔神明鏡〕

〔宮下過去帳〕（上野新田）十九日 元弘三年五月十九日極樂寺坂討死安養寺惟義政氏息

〔正文書〕（四月二十七）

〔註〕 岩松經家並ニ新田義貞兩大將トシテノ語ノ偽ナル事勿論ナリ。

〔阿波國古文書〕

（阿波） 名東郡徳島村豊住三輪五郎所藏 三好姓 △六、二、二、九六、

義盛 三好阿波守、小笠原 録倉執權北條高時、奢長シ積惡ニ依、元弘三年五月廿三日、親

羅足利兩大將トシテ是ヲ責、義盛一方之將トシテ武功ヲ顯、天皇ヨリ綸旨賜、延文

三年八月九日卒、法號高嚴院秋月。

〔益田家什書〕十一之

石見國益田莊宇地村地頭尼是阿相傳文書等、爲沙汰、被預置大内豊前權守長弘關（二九）東代官因幡法橋定盛之處、元弘三年五月廿三日動亂之時、定盛於録倉死去之間、彼

新田岩松
兩大將ト
シテ

親羅足利
兩大將ト
シテ

鎌倉ニ
シテ
死シテ
紛失ス
官文



三五 義貞公證判稅所氏着到狀

常陸新治郡石岡 山本吉藏氏藏
史料編纂所所藏寫眞複製

手繼文書以下、六波羅下知等、悉令紛失之由事、承及候畢、仍爲向後支證狀如件

建武二年七月十七日

(兼世)
兼世

五月二十三日 車駕、伯耆ヲ發シ給フ。

五月二十四日 常陸ノ稅所久轉等、鎌倉ナル義貞ノ軍ニ會ス。

〔稅所文書〕(茨城縣新治郡石岡山本吉藏氏所藏)

常陸國御家人

小四郎久轉

□四郎轉國

(五)月十九日馳參萬里小路藤房卿住所、參御方之由、紙摺着到同廿四日鎌倉江令(紙摺)仍着到如件、

(元)弘三年六月十四日

承了(新田義貞花押)

五月二十五日⁽¹⁾ 光嚴院ヲ廢シテ、元弘ノ號ヲ復シ給フ。

五月二十五日⁽²⁾ 九州探題減フ。

五月二十六日 長門探題減フ。

元弘三年

三三三

稅所久轉

十九日藤原藤房ノ許ニ馳參

義貞證判

五月二十九日 義貞ノ將船田義昌、北條高時ノ子邦時ヲ捕フ。義貞、命ジテ之ヲ殺サシム。

〔參考太平記〕卷第十一 五大院宗繁附相模太郎事

義貞己ニ錄倉ヲ鎮メテ、其威遠近ニ振シカハ、東八箇國ノ大名高家手ヲ東ネ膝ヲ屈セスト云者ナシ、多日附從テ、忠ヲ憑ム人タニモ如此、況ヤ只今マテ平氏ノ恩顧ニ隨テ、敵陣ニ在ツル者共生テ甲斐ナキ命ヲ續ンタメニ、所縁ニ屬シ降人ニ成テ肥馬ノ前ニ塵ヲ望ミ、高門ノ外ニ地ヲ掃テモ、己カ咎ヲ補ハント思ヘル心根ナレハ、今ハ浮世ノ望ヲ捨テ、僧法師ニ成タル平氏一族達ヲモ、寺々ヨリ引出シテ、法衣ノ上ニ血ヲ淋キ、二度人ニ契ラシト、髮ヲオロシ貌ヲ替ントスル亡夫ノ後室共ヲモ、所々ヨリ搜出シテ、貞女ノ心ヲ失ハシム、悲カナ義ヲ專ニセントシテ、忽ニ死セラル人ハ、永ク修羅ノ奴ト成テ、苦ヲ多劫ノ間ニ受ン事ヲ、痛カナ恥ヲ忍テ苟モ生ル者ハ、立所ニ衰窮ノ身ト成テ、笑ヲ萬人ノ前ニ得タル事ヲ、中ニモ五大院右衛門尉宗繁ハ、尉、金勝院本作、故相模入道殿ノ重恩ヲ與ヘタル侍ナル上、相模入道ノ嫡子相模太郎邦時ハ、金勝院本作、此五大院右衛門カ妹ノ腹ニ出來タル子ナレハ、甥ナリ、主ナリ、何ニ附テモ貳心ハ有シト、深ク憑マレケルニヤ、此邦時ヲハ汝ニ預置ソ、如何

五大院宗繁、北條邦時ヲ預ル

宗繁、邦時ヲ裏切ル

邦時、錄倉ヲ出ツ

ナル方便ヲモ廻シ、是ヲ隱シ置、時到ヌト見ヘハ、取立テ、亡魂ノ恨ヲ謝スヘシト、相模入道宣ヒケレハ、宗繁仔細候ハシト、領掌シテ、錄倉ノ合戦ノ最中ニ、降人ニソ成タリケル、角テ二三日ヲ經テ後北條家、金勝院、西源院本、作、三四日、天正本作、四五日、平氏悉滅ヒシカハ、關東皆源氏ノ顧命ニ從テ、此彼ニ隱居タル平氏一族共、數多搜シ出サレテ、捕手ハ所領ヲ預リ、隱セル者ハ忽ニ誅セラル、事多シ、五大院右衛門是ヲ見テ、イヤイヤ果報盡ハテタル人ヲ扶持セントテ、偶遁得タル命ヲ失ハンヨリハ、此人ノ在所ヲ知タル由、源氏ノ兵ニ告テ、貳心ナキ所ヲ顯シ、所領ノ一所ヲモ、安堵セハヤト思ヒケレハ、或夜彼相模太郎ニ向テ申ケルハ、是ニ御座ノ事ハ、如何ナル人モ知候ハシト、存テ候ニ、如何シテ聞ヘ候ケン、船田入道、明日是ヘ推寄候テ、搜シ奉ラント用意候由、只今或方ヨリ告知セテ候、何様御座ノ在所ヲ、今夜替候ハテハ叶フマシク候、夜ニ紛レテ、急キ伊豆御山ノ方ヘ落サセ給ヒ候ヘ、宗繁モ御供申度ハ存候ヘ共、一家ヲ盡シテ落候ナハ、船田入道サレハコソト心附テ、何クマテモ尋求ル事モ候ハント存候間、態御供ヲハ申マシク候ト、誠シ顔ニ成テ云ケレハ、相模太郎實モト、身ノ置所ナクテ、五月二十七日ノ夜半許ニ、忍テ錄倉ヲ落給フ、

○天正本云、宗繁ハ、態爰ニ罷留リテ、此人搜シ來候ハ、事ノ仔細ヲ陳シテ見候

元弘三年

三二五

ハン、叶候ハスハ腹切テ、ナキ名ヲ聞レ進ラセ候ヘシト、誠シ顔ニ成テ申ケレハ、邦時イマタ幼心ニ、萬淺マシクアシキナク思ヒ給ヒテ、此有様ニテ迷出タラハ何レノ誰カ哀ト思ヒテ扶持スヘキ、只一處ニテ兎モ角モ成ント宣ケルヲ、只先忍ハセ給ヒ候テ、事ノ様ヲ御覽候ヘ、惡クハ計ヒ申間敷候ト口説ケレハ、誠ト思ヒ給ヒテ、鎌倉ヲハ忍落給フ、云々、

昨日マテハ天下ノ主タリシ、相模入道ノ嫡子ニテ在シカハ、假初ノ物詣方違ト云シニモ、御内外様ノ大名トモ、細馬ニ轡ヲ嚙セテ、五百騎三百騎、前後ニ打圍テコソ往復セシニ、時移リ事替リヌル、世ノ有様ノ淺マシサヨ、怪ケナル中間一人ニ太刀持セテ、傳馬ニタニモ乗ラテ、破レタル草鞋ニ編笠著テ、ソコトモ知ス、泣々伊豆ノ御山ヲ尋テ、足ニ任セテ行給ヒケル、心ノ中コソ哀ナレ、五大院右衛門ハ、加様ニシテ此人ヲハスカシ出シヌ、我ト討テ出サハ、年來奉公ノ好ヲ忘タル者ヨト、人ニ指ヲ指レツヘシ、便宜好ランスル源氏ノ侍ニ討セテ、勳功ヲ分テ、知行セハヤト思ヒケレハ、急キ船田入道カ許ニ行テ、相模太郎殿ノ在所ヲコソ、委シク聞出シテ候ヘ、他ノ勢ヲ交ヘスシテ打テ出サレ候ハ、定テ勳功他ニ異ニ候ハンカ、告申候忠ニハ、一所懸命ノ地ヲ安堵仕ル様ニ御吹舉ニ預リ候ハント云ケレハ、船田入道、心中

宗繁、船田入道ニ告知ス

邦時ヲ捕

邦時ヲ討

ニハ惡キ者ノ云様カナト思ヒナカラ、先仔細アラシト約束シ、五大院右衛門尉諸共ニ、相模太郎ノ落行ケル道ヲ遮テソ待セケル、相模太郎道ニ相待敵アリトモ思ヒ寄ス、五月二十八日ノ曙ニ、淺マシケナル寢レ姿ニテ、相模河ヲ渡ラント、渡守ヲ待テ、岸ノ上ニ立タリケルヲ、五大院右衛門餘所ニ立テ、アレコソヌハ件ノ人ヨト教ケレハ、船田カ郎等三騎、馬ヨリ飛テ下リ、透間モナク生捕奉ル、俄ノ事ニテ、張輿ナトモナケレハ、馬ニノセ舟ノ繩毛利家、北條家、南都、天正本作ニ具緒、金勝院本作ニ具足上帶ニテ、シタタカニ是ヲイマシメ、中間二人ニ馬ノ口ヲ引セテ、白晝ニ鎌倉ヘ入奉ル、是ヲ見聞人コトニ、袖ヲシホラヌハ無リケリ、此人イマタ幼稚ノ身ナレハ、何程ノ事カ有ヘケレ共、朝敵ノ長男ニテオハスレハ、按三國太曆、高時長男菊壽丸、五歲而夭亡、然則邦時爲三男、閣クヘキニ非ストテ、則翌日ノ曉、潛ニ首ヲ刎奉ル、昔程嬰カ我子ヲ殺シテ、幼稚ノ主ノ命ニカヘ、豫讓カ貌ヲ變シテ、舊君ノ恩ヲ報セシ、其迄コソナカラメ、年來ノ主ヲ敵ニ打セテ、欲心ニ義ヲ忘レタル、五大院右衛門カ心ノ程、希有ナリト、見ル人コトニ爪弾ツメヅナヲシテ惡ミシカハ、義貞實モト聞給ヒテ、是ヲモ誅スヘシト、内々其議定マリケレハ、天正本云、義貞、人ノ郎等タル者ハ、必ス善ヲハ學ハスシテ、カハ、不當ヲ振舞事、向後見コリ聞コリノ爲ナレハ、召捕テ其首ヲ刎ヘシト、相觸ラル、云々、宗繁是ヲ傳聞テ、此彼ニ隠レ行ケルカ、鼻惡ノ罪身ヲ譴ケルニヤ、三界廣トイヘトモ、一身ヲ措ニ處ナク、故舊多シトイヘトモ、一飯

ヲ與フル人ナクシテ、遂ニ乞食ノ如ニ成果テ、道路ノ街ニシテ、飢死ケルトソ聞ヘシ、

五月是月 足利高氏、細川和氏等ヲ鎌倉ニ遣ハス。和氏等、高氏ノ子千壽王(義)ヲ擁シテ、義貞ニ挑戰ス。義貞之ニ應ゼズ。尋デ、潔ク鎌倉ノ功ヲ棄テ、上洛ス。

義詮、義貞ト共ニ鎌倉ヲ陷ス。諸將義詮ニ屬ス。尊氏細川等ヲ鎌倉ニ下向セシム。足利黨、義貞ニ挑戰ス。義貞應ゼズ。上洛ス。

〔梅松論〕(五月二十二日) 扱も關東誅伐の事は義貞朝臣其功をなす所に、いかゞ有けむ、義詮の御所四歳の御時大將として御こしに召れて、義貞と御同道イナにて關東御退治以後は二階堂の別當坊に御座有しイナシイに、諸將悉く四歳の若君に屬し奉りしこそめでたけれ、是實に將軍にて永々萬年御座有べき瑞相とぞ人申ける。爰に京都より細川阿波守、舍弟源藏人掃部イナ兄弟三人關東追討の爲に差下さる、所に路頭イナにをいて、關東はや滅亡のよし聞え有けれども、猶々下向せらる、かくて若君を輔佐し奉るといへども、鎌倉中連日空騒して世上穩かならざる間、和氏頼春師氏、兄弟三人、義貞の宿所に向て事の子細を問尋イナて、勝負を決せんとせられけるに依て、義貞野心を存せざるよし起請文を以陳じ申されし聞せいひつす、其後一族悉く上洛有ける。

〔梅松論〕(前後ノ全文、延元元年五月二十五日條ニ收ム) 又正成申上候へけるは、君の先代を亡されしは、

併尊氏卿の忠功なり、義貞關東を落す事は子細なしといへども、天下の諸侍悉以彼將に屬す、

〔參考太平記〕卷第十四 尊氏義貞確執奏狀附公卿會議事

(上文、建武二年九月二十七日條ニ收ム) 其根元ヲ尋ヌレハ、去元弘ノ初、義貞鎌倉ヲ攻亡シテ、功諸人ニ

勝レタリシカハ、東國ノ武士共ハ皆我下ヨリ立ヘシト思ハレケル處ニ、尊氏卿ノ二男千壽王殿三歳ニ

六月三日、下野國ヨリ立歸テ大藏谷ニオハシケル、又尊氏卿都ニテ抽賞他ニ異ナリト聞テ、是ヲ輒ク上聞ニモ達シ、恩賞ニモ預ラント思ヒケレハ、東八箇國ノ兵共

心替シテ、大半ハ千壽王殿ノ手ニソ屬タリケル、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、義貞ケルカ、上聞ヲ懼リ、加之義貞若宮ノ拜殿ニオハシテ、首共實檢シ、御池ニテ太刀長刀ヲ

洗、結句神殿ヲ打破リテ、重寶共ヲ披見シ給フニ、錦ノ袋ニ入タル二引兩ノ旗アリ、是ハ曩祖八幡殿、後三年ノ軍ノ時、願書ヲ添テ籠ラレシ御旗ナリ、奇特ノ重寶ト云ナカラ、中黒ノ旗ニアラサレハ、當家ノ用ニ詮ナシト宣ケルヲ、足利殿方ノ人は是ヲ聞テ、彼旗ヲ乞奉ル、義貞此旗ヲ出サ、リシカハ、兩家確執合戰ニ及ハントシケル

二引兩ノ旗

諸將義詮ニ屬ス

義詮下野ヨリ大藏谷ニ歸ル

ヲ、上聞ヲ恐憚テ默止ケリ、加様ノ事共重疊有シカハ、義貞、居若宮拜殿以下至其、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本不出、果シテ今新田足利一家ノ好ミヲ忘レ、怨讎ノ思ヒヲナシ、互ニ亡サント牙ヲ礪ク志顯ハレテ、早天下ノ亂ト成ニケルコソ淺マシケレ、

〔參考太平記〕卷第二 足利義詮上洛事（中略）

○今川家、毛利家、北條家、南都本、並云、此左馬頭ト申スハ、將軍ノ長男、先代赤橋相州ノ御女ニ當作妹、嫁シテ、儲給ヒシ御息ナリ、元弘ニ義貞ト同時ニ、鎌倉ヲ攻給ヒシ時、四歳ノ今川家、毛利家本、作三歳、非也、說見前、大將ニテ、千壽王殿ト申シ御事ナリ、

〔大塚文書〕（大塚貞成）（五月十八日）

〔註〕 本年七月五日條參照。

六月二日 天皇、還幸ノ途上、攝津西宮驛ニ於テ、義貞ノ發シタル鎌倉幕府滅亡ノ報ヲ得給フ。

〔參考太平記〕卷第十一 書寫山行幸附義貞註進到來事

五月二十七日ニハ、播磨國書寫山へ行幸成テ、（中略）是ヨリ龍駕ヲ早メラレテ、晦日ハ兵庫福嚴宗ト云寺ニ、儲餉ノ在所ヲ點シテ、且ク御座有ケル處ニ、其日赤松入道父子四人、五百餘騎ヲ率シテ參向ス、（中略）此寺ニ一日御逗留有テ、供奉ノ行列還幸

ノ儀式ヲ調ヘラレケル處ニ、其日午刻ニ、羽書ヲ頸ニ懸タル早馬三騎、西源院本、作三騎、門前マテ騎打ニシテ、庭上ニ羽書ヲ捧タリ、諸卿驚テ、急キ披テ是ヲ見給ヘハ、新田小太郎義貞ノ許ヨリ、相模入道以下ノ一族從類等、不日ニ追討シテ、東國已ニ靜謐ノ由ヲ註進セリ、西國洛中ノ戰ニ、官軍勝ニ乘テ、兩六波羅ヲ攻落ストイヘトモ、關東ヲ攻ラレン事ハ、ユ、シキ大事ナルヘシト、叡慮ヲ廻サレケル處ニ、此註進到來シケレハ、主上ヲ始進ラセテ、諸卿一同ニ猶豫ノ宸襟ヲ休メ、欣悅稱嘆ヲ盡サレ、則恩賞ハ宜シク請ニ依ヘシト宣下セラレテ、先使者三人ニ、西源院本、作三人、各勳功ノ賞ヲソ行ハレケル、天正本云、使者三人蒙、武官被レ行勳賞云々、

〔神皇正統記〕（前文ハ先月二十） 符契を合する事もなかりしに、筑紫の國々、陸奥

出羽のおく迄も、同じ月にそしつまりにける、六七千里の間、一時におこりあひにしに、時のいたり運の極りぬるは、かゝる事にこそと、不思議にも侍りしものかな、君はかくともしらせ給はず、攝津國西の宮といふ所にてそ、きかせまし〜ける、

〔神明鏡〕（新田足利兩家系圖）

〔註〕 鎌倉ノ捷報至リシ地ニツキテハ、今正統記ニ從フ。

六月五日 車駕、皇居ニ還幸シ給フ。是日、足利尊氏ニ内昇殿ヲ聽サレ、

足利兄弟ノ榮譽極メテ高シ。(公卿補任)(皇年代略記)(皇代曆)(大德寺文書)(參考太平記)

六月七日(1) 信濃ノ市河經助、同助泰、兵ヲ率ヅテ、義貞ノ軍ニ會ス。尋テ、十八日、兩人共ニ、尊氏ノ軍ニ會ス。

〔市川文書〕(酒田市 本間光正氏藏)

著到

市河經助

信濃國志久見郷地頭市河左衛門十郎經助、

右著到如件、

元弘三年六月七日

承了(新田義貞 花押)

義貞證判

〔市川文書〕(右同)

著到

市河助泰

信濃國志久見郷地頭市河左衛門六郎助房代甥三郎助泰、

右著到如件、

元弘三年六月七日

三六 義貞公證判市河經助着到狀

着到

信濃國志久見郷地頭

市河左衛門六郎助房代

甥三郎助泰

右著到如件

元弘三年六月七日

市河

三七 義貞公證判市河助泰着到狀

着到

信濃國志久見郷地頭

市河左衛門十郎經助

右著到如件

元弘三年六月七日

市河

義貞御判

承了(新田義貞)
(花押)

〔市川文書〕

信濃國市河左衛門六郎助房并舍弟十郎經助等、今月十八日、馳參御方候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元弘三年六月廿九日

神經助

市河助房
經助等、
尊氏ノ許
ニ參ズ

神助房(義判)

承了(足利尊氏)
(花押)

進上 御奉行所

六月七日⁽²⁾ 是ヨリ先、信濃ノ小笠原宗長、鎌倉幕府覆滅ノ狀ヲ足利尊氏ニ報ズ。是日、尊氏、書ヲ宗長ニ與ヘテ之ヲ勞ス。明日、又、書ヲ與フ。

〔山勝小笠原文書〕乾

關東合戰無程靜謐之處、委細承候之條、爲悅候、恐々謹言、

六月七日

高氏(足利)
(花押)

小笠原信濃(宗長)
入道殿

元弘三年

三三三

關東合戰事承候畢、早速靜謐之條、爲悅候、恐々謹言、

六月八日

高氏(花押)

小笠原信濃入道殿。

(註) 五月十五日條參照。

六月九日 結城宗廣、族人伯耆朝保ヲ京都ニ遣ハシテ、鎌倉ニ於ケル戰功ヲ具報ス。

〔白河證古文書〕(五月十八日)〔白河證古文書〕(三月十五日)

六月十二日 從五位上足利高氏、從四位下ニ敍セラレ、左兵衛督ト爲リ、

兵部大輔足利直義、左馬頭ト爲ル。〔公家補任〕〔足利家官位記〕

六月十三日 是ヨリ先、護良親王、志貴山ニ在リテ、足利尊氏ヲ除カン

コトヲ企圖セラル。天皇、諭シテ之ヲ止メ給フ。是日、親王、入京シテ、征

夷大將軍ニ補セラレ給フ。

〔增鏡〕^十月草の花〔參考太平記〕^十〔保曆間記〕〔職原抄〕

六月是月 諸國將士、相踵ギテ上洛ス。足利高氏、多ク是ニ證判ヲ與フ。

〔日根野文書〕〔鶯見文書〕〔香宗我部文書〕△六、一、六四〔市河文書〕(七日條)〔池

田文書〕〔相馬文書〕〔長防風土記〕〔狩野文書〕〔萩藩閥閥録〕〔紀伊國續風

土記附録〕〔相馬岡田文書〕△六、一、二、三、一、二、七、

七月五日 足利黨細川信氏、國々ノ軍勢ヲ相從ヘテ鎌倉ニ下向ス。

〔蒲神社文書〕(遠江) △六、一、六三

關東下向之間、國々軍勢、相從于信氏、雖被同道、於蒲總檢校者、爲神職之上者、所令免許也、仍狀如件、

元弘三年七月五日

源信氏(花押)

(註) 大日本史料註曰、コノ狀ノ文體、少シク類セザルモノアリ、姑ク疑ヲ闕ク、ト、

五月是月條參照。

七月十九日 新田岩松經家、飛驒守護職ト爲リ、又、北條氏ノ遺領伊勢國笠間庄以下十箇處ノ地頭職ヲ賜フ。

〔由良文書〕(東京帝大文) (集古文書ニハ横) (學部所藏) (瀨家所藏トアリ)

飛驒國守護職、可令管領者、天氣如此、仍執達如件、

元弘三年七月十九日

式部少輔(花押)

兵部大輔殿

元弘三年

三三五

〔由良文書〕(東京安川家之氏所藏) (集古文)(書同前)

- 伊勢國笠間庄 維貞跡
- 遠江國澁俣郷 泰家法師跡
- 同國蒲御厨 泰家法師跡
- 同國大池庄 高家跡
- 駿河國大岡庄 泰家法師跡
- 甲斐國安村別村 同跡
- 陸奥國泉荒田 同跡
- 出羽國會津 顯業跡
- 播磨國福居庄 維貞跡
- 土左國下中津山 泰家法師跡

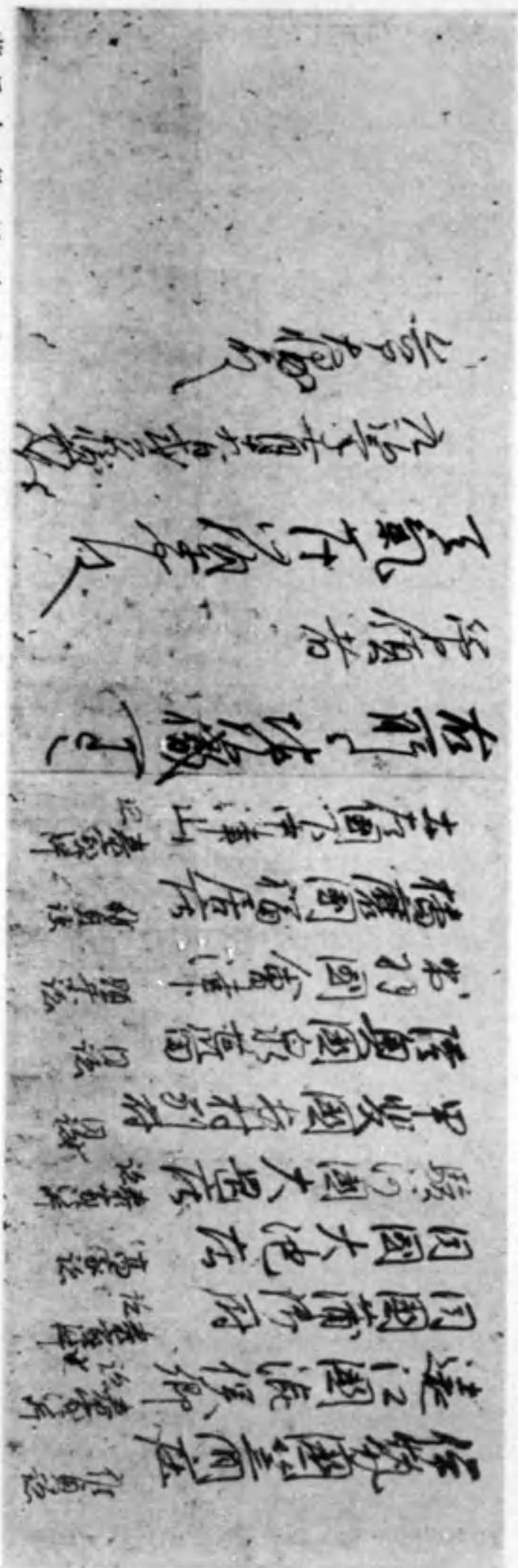
右所々地頭職可令管領者天氣如此仍執達如件

元弘三年七月十九日

式部少輔(花押)

兵部大輔殿

(註) 大日本史料曰、本書ニ兵部大輔ノ姓名ヲ記セザレドモ、岩松文書、建武二年



(書文良由) 旨 繪 皇 天 嗣 醒 後 宛 家 經 松 岩 八 三

十一月九日ノ狀ニ、岩松兵部大輔經家アリ、建武記、關東廂番ノ中ニモ其名見エタリ、且岩松ト横瀬トハ同族ナレバ、此書ノ横瀬家(由良家)ニ傳ハレルヲ見テモ、兵部大輔ハ岩松ナルコト、亦自ラ明カナリト。又明年三月二十二日、四月九日條ニヨリテ右ハ確認サル。應永三十三年七月是月條參照。

七月二十日 新田(江田、世良田)行義、上野新田庄平塚村ノ地ヲ同國長樂寺ニ寄進ス。

〔長樂寺文書〕(上野)

奉寄進 上野國世良田長樂寺、

右當國新田莊平塚村內、得分貳拾貫文地、所奉寄進也、仍如件、

元弘三年七月二十日

源行義(花押)⁽³²⁾

(註) 五月八日、同十八日條參照。

八月五日 北畠顯家、足利高氏、從三位ニ敍セラレ、顯家ハ陸奥守、高氏ハ武藏守ニ任ゼラレ、高氏、更ニ常陸、下總ヲ加ヘラル。又、高氏ヲ更メテ尊氏ト爲サル。尋テ尊氏ハ鎮守府將軍ニ、新田義貞ハ越後守、及ビ上野大介、播磨大介ニ、脇屋義助ハ駿河守ニ、楠木正成ハ攝津守、河内守ニ、

名和長年ハ因幡守、伯耆守ニ、夫々任ゼラル。

北畠顯家

〔公卿補任〕三十二年條 參議從三位源顯家、(北畠)五月十七日止上階、左中將、六月十二

足利尊氏

日兼彈正大弼、八月五日更敍從三位、同日兼陸奥守、(中略)

非參議從三位源尊氏(廿九利)八月五日敍、元左兵衛督、從四位下、今日以高字爲尊、同日兼武藏守。

〔參考太平記〕卷第十二 安鎮國家法附高政貞義等謀叛并諸大將恩賞事

義貞上洛

東國西國既ニ靜謐シケレハ、筑紫ヨリ少貳、大友、菊池、松浦ノ者共、大船七百餘艘ニテ參洛ス、新田左馬助北條家、南都本作、左兵衛佐、非也、舍弟兵庫助北條家、南都本作、右衛門佐、非也、七千餘騎ニテ上洛セラル、此外國々ノ武士共、一人モ殘ラス上リ集ケル間、京白河ニ充滿シテ、王城ノ富

恩賞

貴、日來ニ百倍セリ、諸軍勢ノ恩賞ハ、姑ク延引ストモ、先ツ大功ノ輩ノ抽賞ヲ行ハルヘシトテ、足利治部大輔高氏ニ、武藏、常陸、下總三箇國、舍弟左馬頭直義ニ、遠江國、

領尊氏ノ受

新田左馬助義貞ニ左馬助、今川家、北條家、西源院、南都本作、左中將、金勝院本作、治部大輔、非也、上野、播磨兩國、子息義顯ニ、越後國、

領義貞ノ受

舍弟兵部少輔義助ニ兵部少輔、天正本作、兵庫助、爲得、西源院本作、治部大輔、非也、駿河國、補判官正成

赤松則村
播磨守護
職ヲヤメ
ラル

ニ、攝津國河内、名和伯耆守長年ニ、因幡、伯耆兩國金勝院本載、出雲、爲三箇國、非也、時置治高貞領、出雲、ヲソ行ハレケル、其外公家武家ノ輩、二箇國三箇國ヲ賜リケルニ、サシモノ軍忠有シ赤松入道

圓心ニ、佐用庄一所計ヲ行ハレ、播磨國ノ守護職ヲハ、程ナク召返サレケリ、サレハ建武ノ亂ニ、圓心俄ニ心變シテ、朝敵トナリシモ、此根トソ聞ヘシ、其外五十餘箇國ノ守護國司、國々ノ關所大庄ヲハ、悉公家被官ノ人々、拜領シケル間、陶朱カ富貴ニ誇リ、鄭白カ衣食ニ飽リ、

〔異本元弘日記〕元弘四年二月、尊氏賜武藏、下總、常陸三箇國、直義遠江國、義貞上野、播磨二箇國、同義助駿河國、義顯越後國、正成攝津、河内二箇國、長年因幡、伯耆二箇國、元弘四年二月十三日、義顯敍從五位上、同日、義貞敍從四位上、兼播磨守。

〔新田足利兩家系圖鐃阿寺本〕(系圖部ニ收ム)

〔註〕大日本史料曰、太平記、高氏等ノ受領ヲ、建武元年八月、西國ノ諸將上京ノ下

ニ連敍シ、異本元弘日記、鐃阿寺本、新田足利系圖モ亦、同年二月十三日ノ事トセリ、然レドモ、高氏ノ武藏守トナリシハ、今年八月五日ナリシ事、本條ノ公卿補任ニ明文アリ、直義ノ相模守トナリシコトモ亦、是歲十一月八日ニアリ、又十二月五日條ノ上野國宣、及ビ同月十四日條ノ越後國宣ニ、イヅレモ義貞ノ押署アルヲ見レバ、其既ニ任ヲ受ケタルコト知ルヘシ、又、十月二十六日、正成

ノ觀心寺ニ與ヘシ書ニ據レバ、正成既ニ河内守タルニ似タリ、名和長年モ亦、伯耆守ト稱セシコト、八月十三日ノ狀ニ見エタリ、然レバ、此等功臣ノ賞ヲ行ハレシコトハ、既ニ已ニ本年ニ在ルコト明ケシ、但シ其月日ヲ的知セザルヲ以テ、姑ク此ニ(八月五日)合載ス、又、太平記等ニ、高氏ヲ武藏、常陸、下總トシタレドモ、武藏ノ外ハ未ダ明據ヲ見ズ、又、直義ヲ遠江守トシタレドモ、十一月八日條ノ補任ニ據レバ、相模守ナリ、義貞ヲ上野、播磨トシ、義顯ヲ越後トシタレドモ、十二月十日條ノ越後國宣ニ據レバ、越後守ハ義貞ニシテ、義顯ニアラズ、又、建武元年四月三日ノ播磨國宣ニ據レバ、義貞ハ其大介ニシテ、國守ニアラズ、上野モ亦然リ、十二月五日條ト。明年二月十三日條參照。

八月九日 足利尊氏、令シテ、濫リニ早馬、又ハ使者ト稱シテ、東海道諸驛ヲ狼藉スルヲ禁ズ、(三島神社文書)

十月九日 是ヨリ先、記録所ヲ復シ、雜訴決斷所、及ビ侍所、武者所ヲ置キ、新田氏ノ人々ヲ以テ武者所ノ頭人トナス。

〔梅松論〕上 御聖斷の趣、五畿七道八番にわけられ、卿相を以、頭人として、(決斷所)斷決所と號て、新に造らる、是は先代引付の沙汰のたつ所也、大議イにをいては、記録所にをい

雜訴決斷所
記録所

侍所
武者所

て裁許あり、又侍所と號して土佐守兼光、太田大夫判官親光、富部大舍人頭參河守師直等を衆中(ト)として、御出有て聞召イ、むかしのごとく武者所ををかる、新田の人々を以、頭人イにして諸國の輩を詰番せらる、

〔三寶院文書〕(元弘三年十月九日附)
(雜訴決斷所際ナリ)

〔註〕 武者所設置ノ年月日ヲ的知セザルヲ以テ、三寶院文書ノ雜訴決斷所際ノ初見ニヨリテ、此ニ係ケタリ。明年五月七日條延元元年四月條參照。

十月二十日 陸奥守北畠顯家、皇子義良親王ヲ奉ジテ任ニ赴キ、併セテ出羽ヲ管ス。(神皇正統記)〔相顯抄〕〔元弘日記裏書〕〔異本年代記拔萃〕〔梅松論〕〔保曆間記〕

十月是月 諸國ノ將士、相踵ギテ上京ス。足利尊氏、多ク其ノ着到狀ニ證判ヲ與フ。

〔横岳家文書〕〔和田文書〕〔龍造寺文書〕〔三原文書〕〔都甲文書〕〔萩藩閥閥錄〕〔相良文書〕△六、二二六四―二六八、

十一月八日 足利直義、相模守ニ任ゼラル。(公卿補任)〔足利家官位記〕
十二月五日 義貞、上野大介トシテ、伊達貞綱ニ上野公田郷ヲ安堵セシ

△
〔伊達文書〕(伊達伯爵家藏) △六一三三〇

任今年七月廿六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件、

元弘三年十二月五日

(新田義貞)
源朝臣(花押)

上野國公田郷(勢多郡下川淵村ニ)一分地頭伊達孫三郎入道道(貞綱)西謹言上、

欲早且任傍例、且任相傳道理、賜安堵國宣、全當知行、公田郷一分地頭職間事、

副進

一通 讓狀案、弘安五年三月廿二日、

一通 讓狀案、文保三年正月十日、

一通 關東下知案、弘安九年二月廿七日、

右道西最前參御方、(千種忠國)將家御手、致合戰忠節之間、申恩賞之上者、任傍例、可賜安堵國宣者也、當知行之條、若有御不審者、可有御尋伊達彦七郎朝基哉、然者、早賜安堵國宣、爲全當知行、粗言上如件、

元弘三年十月 日

上野公田郷
宣旨ニ任
セテ知行

三九 義貞公外題上野國宣

任今年七月廿六日 宣旨
不可有相違之狀、國宣如件
上野國公田郷一分地頭伊達孫三郎入道道西謹言上
欲早且任傍例、且任相傳道理、賜安堵國宣
全當知行、公田郷一分地頭職間事
副進
一通 讓狀案、弘安五年三月廿二日
一通 讓狀案、文保三年正月十日
一通 關東下知案、弘安九年二月廿七日
右道西最前參御方、將家御手、致合戰忠節之間、申恩賞之上者、任傍例、可賜安堵國宣者也、當知行之條、若有御不審者、可有御尋伊達彦七郎朝基哉、然者、早賜安堵國宣、爲全當知行、粗言上如件、
元弘三年十月 日

伯爵 伊達 興宗 氏藏
史料編纂所藏寫真複製

宣旨ニ任
セテ知行

越後奥山
庄

十二月十日 義貞、越後守トシテ、和田茂長女子ニ、同國奥山庄鉄柄堰
澤・鹽谷三箇村等ノ地頭職ヲ安堵セシム。

〔色部文書〕(舊米澤藩士伊佐早謙氏舊藏、
現所藏者不明)

任今年七月廿六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件、

元弘三年十二月十日

(新田義貞)
源朝臣(花押)

和田左衛門四郎茂長女子平氏謹言上、

欲早賜安堵國宣、備永代龜鏡、當知行所領、越後國奥山庄内鉄柄村、並堰澤村、鹽谷
村等地頭職間事、

右於彼所領者、氏女相傳當知行無相違之條、同國大島庄上條地頭左京亮忠隆、並同
中條地頭紀伊守明長存知之上者、無其隱者也、然早下賜安堵國宣、爲備後證、仍言上
如件、

元弘三年十一月 日

(註) 三浦文書ニ雜訴決斷所建武元年九月二十九日ニ茂長女子ニ此地ヲ安堵
スル牒狀アレドモ略ス。

元弘三年

十二月十四日⁽¹⁾ 義貞、越後守トシテ、色部長倫ニ同國小泉莊色部條惣領職并ニ粟島地頭職ヲ安堵セシム。

〔色部文書〕〔同前〕

任今年七月二十六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件。

元弘三年十二月十四日

(新田義貞)
源朝臣(花押)

越後小泉莊

宣旨ニ任
セテ知行

越後國小泉莊^(岩船郡)内加納色部惣領地頭色部三郎長倫謹言上、

欲早下賜安堵國宣全知行當莊内色部條惣領職、并粟島地頭職事、^(岩船郡)

右地頭職者長倫重代相傳當知行無相違之地也、其子細色部又五郎泰忠、同四郎太郎長秀等進上請文上者、不可有御不審者哉、然者早下賜安堵國宣、爲令知行、恐々言上如件。

元弘三年十月日

十二月十四日⁽²⁾ 足利直義、成良親王ヲ奉ジ、往キテ鎌倉ニ鎮ス。是ヨリ東國ノ將士直義ニ歸服シテ京都ノ命ヲ奉ゼズ。〔武家年代記〕〔元弘日記〕裏書〔相顯抄〕〔將軍執權次弟〕〔鎌倉大日記〕〔和漢合符〕〔神皇正統記〕〔保

舊米澤藩士 伊佐早謙氏複製
史料編纂所所藏寫眞複製



四〇 義貞公目筆外題越後國宣

成良親王
鎌倉下向
坂東八ヶ
國ノ兵直
義ニ屬ス

尊氏ノ
口ズナシ
ミ

東國武士
直義ニ屬
ラシテ朝
ヲ奉ゼズ
武家ノ政
論ヲ興ス

曆間記〔太平記〕(△六、二、三二九―三三二)

〔異本年代記拔萃〕十二月左馬頭源直義赴鎌倉不用光嚴正慶除目仁田左中將

義貞爲大將(註大日本史料曰義貞ヲ大將ト爲ストアルハ誤傳ニ屬ス)

〔梅松論〕

次に關東へは同年の冬成良親王征夷大將軍として御下向也下(の)御

所左馬頭殿供奉し奉られしかば東八ヶ國の輩大略勵し奉りて下向す鎌倉は去夏の亂に地拂しかども大守御座有ければ庶民安堵のおもひをなしけり爰に京都の聖斷を聞奉るに記録所決斷所ををかる(イナシ)といへども近臣臨時に内奏を経て非義を申斷間(イナシ)綸言朝に變じ暮に改りしほどに諸人の浮沈掌を返すがごとし或は先代滅亡のときに遁來る輩又高時の一族に破官の外は寛宥の義を以死罪の科を宥(イ)めらる又天下一統の掟を以安堵の綸旨を下さる(イナシ)といへ共所帯をめさる輩根を含時分公家に口ずさみあり尊氏なしといふ詞を好みつかひける抑累代叡慮を以關東を亡されし夏は武家を立らるまじき御爲なり然るに直義朝臣大守として鎌倉に御座有ければ東國の輩是に歸服して京都へは應せざりしかば一統の御本意今にをいて更に其益なしと思召ければ武家より又公家に恨をふくみ奉る輩は頼朝卿のごとく天下を專にせむ事をいそがしく思へり故

元弘三年

三四五

に公家と武家水火の争にて元弘三年も暮にけり。(下文明年三月九日條ニ收ム)
十二月是月 越後ノ佐々木加地八郎左衛門入道女子尼淨智、同國加地庄荻曾禰條内田中村地頭職安堵ノ國宣ヲ乞フ。

〔和田文書〕(不澤圖書館)

〔註〕 明年三月十八日條中條文書ノ寫シニシテ、義貞ノ免判ヲ脱セリ。

是歲 長樂寺住持白雲惠崇、退居シ、雄峰奇英、入寺ス。

〔禪利住持籍〕上野州世良田山長樂寺歷代 第十一世白雲諱惠崇、諡佛頂禪師(中略嘉應三年ノ條ニアリ) 住院

六年、退居于萬象菴、後迂淨智圓覺建長、

第十二世雄峰奇英、高無學、元弘三癸酉入寺、歲五十一、

元弘四年、建武元年甲戌(正月二十一日改) 二十九四

正月五日 足利尊氏、正三位ニ敍セラル。(公卿補任)〔足利家官位記〕

正月十三日 足利直義ノ奉ゼル成良親王、義貞ノ大介タル上野ノ太守ニ任セラレ給フ。

〔續史愚抄〕(二十後醍醐) 正月十三日壬寅、除目覺入眼、無品成良親王、在鎌倉 敍四品、任

上野太守、鎌倉將軍次第、紹運錄、皇年私記、執筆抄、神皇正統記。

〔相顯抄〕前田侯爵本 〔鎌倉將軍次第〕 成良親王、自元弘三十二、至建武二年、元弘三十一、二十立

親王、八歲(中略) 同四改建武 正十三上野太守、建武二八一爲征夷大將軍云々、

〔將軍執權次第〕 建武元年、成良親王、上野太守、後醍醐院第六御子 直義左馬頭、尊氏弟

〔武家年代記〕中 建武元政所(筆執) 廣秀(長) 上野親王應務、

〔註〕 義貞ノ鄉國ニ於ケル勢力喪失、察スベシ。

正月二十三日 恆良親王ヲ立テ、皇太子ト爲シ給フ。(元弘日記裏書) 其他

正月是月 關東廂番ヲ置ク。岩松經家、結番ノ中ニアリ。

〔建武記〕 關東廂番

定廂結番事次第不同

一番 刑部(兼用) 大輔義季(以下六名略) 二番 兵部(兼務) 大輔經家 藏人憲顯(以上杉) (以下四名略)

三番(略) 四番(略) 五番(略) 六番(略)

右守結番次第、無懈怠可令勤仕之狀、依仰所定如件

元弘四年、

二月五日 義貞、越後守トシテ、目代ニ令シテ、守護代ト共ニ、附近ノ地

元弘四年、建武元年

頭等ヲ催促シテ、和田義成等一族家人ヲ、金山郷ニ治罰セシム。

〔三浦文書〕

〔舊米澤藩士伊佐早謙氏舊藏現所藏者不明〕 △六、一、四四六、

〔花押〕

三浦和田彦四郎茂實申、越後國〔北浦原郡〕奥山内中條、金山兩郷事、就給旨被施行之處、如注進狀者、於中條内者、沙汰居茂實代官云々、金山郷者、和田又次郎家人三浦平四郎、和田彌三郎、同又三郎家人富澤孫太郎以下惡黨等、構城廓致合戰、乃傷殺害云々、所詮守護代相共、守宣旨御事書之旨、相催近郷地頭以下、任法可被加治罰、若不從催促者、可被注申交名之由、國宣所候也、仍執達如件。

建武元年二月五日

散位高秀奉

謹上御目代殿

二月十三日 義貞、從四位上ニ、義顯、從五位上ニ敍セララル。〔異本元弘日記〕

〔去年八月五日ノ條ニ收ム〕

二月十四日 義貞、越後守トシテ、和田茂泰後家教意ニ奥山莊高野郷ノ地ヲ、和田義成ニ、同莊羽黑、鷹栖等ノ地ヲ、佐々木加地章氏女子尼明泉ニ同國加地庄高濱條及櫻曾根條ヲ安堵セシム。

宣旨ニ任
セテ知行

越後奥山
莊

〔羽黑文書〕

〔舊米澤藩士中條家舊藏現所藏者不明〕 △六、一、四五三、

任去年七月二十日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件。

建武元年二月十四日

〔新田義貞源朝臣〕花押

三浦和田八郎茂泰後家教意代慶雲謹言上、

欲早下賜安堵國宣、備後龜鑑、越後國奥山莊〔蒲原郡〕高野郷内上野十圓房田在家、并

水無彌源二入道田在家間事、

副進

一通 讓狀案

一通 本御下文案

右所者尼教意重代相傳地也、當知行無相違之條、和田二郎兵衛尉義政請文上者、不可有御不審、然早下賜安堵國宣、欲備後代龜鏡、若以不知行之地、掠申安堵、可被行罪科也、仍恐々言上如件。

元弘三年十二月 日

〔羽黑文書〕

〔同前〕△六、一、四五四、

元弘四年建武元年

宣旨ニ任
セテ知行

越後奥山
莊

新田義貞公篇

任去年七月二十六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件、

建武元年二月十四日

(新田義貞)
源朝臣(花押)

三五〇

三浦和田又三郎義成謹言上、

欲早下賜安堵國宣、備末代龜鏡、越後國奥山莊(蒲原郡)中條内羽黒鷹栖并加地莊(蒲原郡)

(郡)古河條内田島在家荒野間事、

副進

二通 讓狀案

一通 本御下文案

右所者義成重代相傳地也、當知行無相違之條、進和田二郎兵衛尉義政請文上者、不可有御不審、然早下賜安堵國宣、欲備永代支證、若以不知行之地、掠申安堵者、可被行罪科也、仍恐々言上如件、

元弘三年十二月 日

〔新潟毎日新聞所載文書〕

任去年七月二十六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件、

宣旨ニ任
セテ知行

建武元年二月十四日

(新田義貞)
源朝臣(花押)

佐々木加地三郎章氏女子尼明泉謹言上、

欲早下賜安堵國宣、備末代龜鏡、越後國加地庄高濱條内深町田島(カ)同庄櫻曾根條

内桑口田在家事、

副進 二通讓狀案

右所者明泉重代相傳之地也、當地行無相違之條、進牧左衛門次郎(カ)宗朝請文上者、不可有御不審、然早下賜安堵國宣、欲備永代支證、若以不知行之地、掠申安堵者、可被行罪科也、仍恐々言上如件、

元弘三年十二月 日

(註) 右文書、越後鈴木精英氏ヨリ示サレタル昭和十三年三月十六日ノ越後新

潟毎日新聞ニ載リシ寫眞ノ切抜ヲ判讀轉寫セリ。花押其他ヨリ見テ義貞ノ外題國宣タル事疑ナケレド、今所藏者ヲ明ニセズ。

三月九日 是頃、護良親王、義貞・正成・長年等ト共ニ、潜ニ叡慮ヲ請テ、尊氏ヲ誅セント圖リ給フト雖モ、其ノ機ヲ得ズ。

元弘四年建武元年

三五二

〔梅松論〕

(前文去年十二月十日ノ條ニアリ)

翌年改元有て建武元季なり元三節會以下の儀式
 (は)雲客花の袂をつらねむかしにかへる躰なり然ども世中の人々心も調らずよ
 ろづ物さはがしくみえしかば此まゝにてはよもあらじとおそろしくぞ覺えし
 去程に兵部卿親王護良新田左金吾義貞正成長年潛にゑいりよを請て打立事度
 々に及といへども將軍に付奉る軍勢其數をしらざる間合戦にをよば難義た
 るべきによりて已に師有べき日先事を延ん爲に無異の躰にて北山殿へ臨時の
 行幸度々に及し也かやうの事に付ても洛中をだやかならざる時分三月上旬
 (將軍執權次第ニリ) 關東に本間と澁谷が一族先代方として謀反を興して相模國
 (レバ三月九日ナリ) 關東に本間と澁谷が一族先代方として謀反を興して相模國
 より鎌倉へ寄來間澁川刑部大輔義季を大將として極樂寺の前に馳向て責戰事
 數刻有しに凶徒打負ぬ此事京都へ注進を申たりし程に去年召置れし金剛山の
 討手の大將阿曾霜臺陸奥右馬介長崎四郎左衛門尉邊土にをいて誅せらる(蓮華
 去帳ニヨレバ三) 是は本間澁谷が謀反に依てなり(下文ハ六月七日ノ條ニアリ)

三月十八日 義貞、佐々木加地八郎左衛門入道ノ女子尼淨智ニ、越後加
 地庄荻曾彌條内田中村地頭職ヲ安堵ス。

〔中條文書〕

米澤市中條 弘資氏藏

義貞親王長年正成
 長年正成等請テ
 長年正成請テ
 長年正成請テ
 長年正成請テ
 長年正成請テ
 長年正成請テ
 長年正成請テ
 長年正成請テ

四一 義貞公外題越後國宣

延壽二年七月廿日 宣旨
 宣旨元氣三月十日
 宣旨元氣三月十日

四二 越後國衛宛難訴決斷所條 (三七五頁參照)

延壽二年七月廿日
 延壽二年七月廿日
 延壽二年七月廿日
 延壽二年七月廿日
 延壽二年七月廿日

共ニ米澤市北寺町 中條弘資氏藏

任去年七月廿六日宣旨、知行不可有相違之狀、國宣如件、

建武元年三月十八日

源朝臣(花押)

佐々木加地八郎左衛門入道女子尼淨智謹言上、

欲早被經御沙汰、任傍例、下賜安堵國宣、備向後龜鏡、

越後國加地庄、荻曾彌條內田中村地頭職間事、

右所者依爲尼淨智重代相傳所領、當知行致于今無相違者也、然則致調度具書等者、雖可令持參之、爲物詣依令在京、不及進覽之、於當知行之段者、佐々木加地孫二郎有盛有御尋之處、載記請文詞、請文令進覽之上者、不可相貽御不審者也、早下賜安堵國宣、爲備向後龜鏡、仍恐々言上如件、

元弘三年十二月 日

三月十九日 岩松本阿彌陀佛謀叛ノ由、岩松經家訴フルニヨリ、陸奥國
衙、令シテ之ヲ千倉莊ニ伐タシム。

〔會津四家合考〕九 △六、一、四八九

新田(岩松)兵部太輔經家代寂心申、行方郡(今磐城ニ屬ス)千倉莊事、同本阿彌陀佛其身者稱在

元弘四年建武元年

岩松本阿
彌陀佛謀
坂ヲ企ツ

朝敵與黨
落人陸奥ニ
下ル

新田義貞公竊

三五四

府、以代官構城郭、及合戰企候間、可加治罰之由、就今月十九日國宣、相催庶子等、來三日、令發向彼莊、可致其沙汰之旨、檢斷岩城彈正左衛門尉隆胤施行如此候、急速被相催庶子、可被莅彼所候、不可有緩怠之儀候、

一朝敵與黨人等、多以落下當國之由、就今月十六日國宣、警固路次、於有其疑之輩者、可召捕其身之由、同所被施行也、可被致其用意候、仍執達如件、

建武元年三月二十八日

沙彌判

鯨岡孫太郎入道殿

三月二十二日 朝廷、岩松經家ニ令シテ、某ノ播磨福居莊ヲ横妨スルヲ停メシム。

(由良文書) (東京、安川) (集古文書編目) (ノ部ニモアリ)

播磨國福居庄事、被止良日知行之上者、止其妨、可被全所務者、天氣如此、仍執達如件、

三月廿二日

右少辨藤長

新田兵部大輔殿

(註) 去年七月十九日、本年四月九日條參照、

三月二十四日 是頃、新田左馬權守貞義、越前守護タリ。是日、雜訴決斷

四三 岩松經家宛後醍醐天皇繪旨 (由良文書)

四四 岩松經家宛後醍醐天皇繪旨 (由良文書)

東京市品川區大井町南濱川一七二〇 安川繁之氏藏

(三五七頁參照)

東京帝國大學文學部藏

所、牒ヲ之ニ移シテ湯淺宗顯ノ圓覺寺領同國山本莊ヲ押領セルヲ停メ
シム。

〔圓覺寺文書〕(相模) △六一、四六二

當寺領越前國山本莊(今立郡)、如元知行不可有相違者、天氣如此、仍執達如件、

建武元年二月二十六日

(同前)
左衛門權佐

圓覺寺長老禪室

〔圓覺寺文書〕(徵古雜抄所收)

圓覺寺領當國山本莊、寺家如元可知行由事、任綸旨可被下知之由、國宣所候也、仍執
達如件、

(建武元年)
二月二十八日

左衛門尉行明

謹上 越前國御目代殿

越前國宣

越前守
新田左馬權守

圓覺寺雜掌僧契智申

欲早任綸旨國宣、如元可沙汰付寺家雜掌旨、可被成施行由、雖申守護新田左馬權
守、可申成牒旨、返答之上者、爲御沙汰、被仰下當寺領越前國山本莊事、

元弘四年建武元年

三五五

副進

壹通繪旨 建武元年二月二十六日

壹通國宣 同月二十八日

右當莊者、爲當寺最初之寺領、知行已經數十年之處、湯淺二郎左衛門尉宗顯爲恩賞、雖掠給之、當寺領之段就申披之、如元可知行之由、披成下繪旨國宣畢、仍可沙汰付寺家雜掌之旨、可成施行之由、度々申守護方之處、可申成牒之旨、返答之上者、爲御沙汰爲被仰下、言上如件、

湯淺宗顯

雜訴決斷所牒越前國守護

圓覺寺雜掌契智申、寺領當國山本莊湯淺次郎左衛門尉宗顯押領事、副申狀具書右止彼押領、可沙汰居雜掌於莊家者、以牒、

建武元年三月二十四日

左大史小槻宿禰圓

(高倉光寺)
左少辨藤原朝臣圓

(註) 新田左馬權守ハ名ヲ缺キタレド、建武年間記ノ武者所結番表ニハ貞義ノ肩ニ左馬權頭ヲ附シ、又新田系圖ヲ按ズルニ、脇屋義助、義治、堀口貞義(貞滿ノ父)皆

新田左馬權守



四五 義貞公押署播磨國司藏宣

姫路市五軒町正明寺藏

左馬權頭ノ系記アリ。蓋シ堀口貞義ナルベシ。

四月三日 義貞、播磨大介トシテ、留守所ニ令シテ、稱名寺ニ武士ノ狼藉スルヲ停止シ、且、寺領ヲ安堵セシム。

〔正明寺文書〕 乾(播磨)

應宣 留守所

可令早任先例、停止武士甲乙人等亂入狼藉、全寺領專祈禱事、

右播磨國稱名寺領等、不可有相違、任先例可致沙汰之狀、所宣如件、在廳官人等敢勿

違失、故以宣。

建武元年四月三日

(新田義貞)
大介源朝臣花押

四月九日 朝廷、出羽屋代庄地頭職ヲ楠木正成ニ賜ヒ、岩松經家ニ令シテ、之ヲ施行セシム。

〔由良文書〕(東京帝大文部所藏) (集古文書ニハ横瀬家所藏トアリ) (圖版四四参照)

出羽國屋代庄地頭職事、被充行正成畢、早可被沙汰居彼代官於庄家者、天氣如此、仍執達如件、

元弘四年建武元年

四月九日

左衛門權佐範國

新田兵部大輔殿

(註) 去年七月十九日、本年三月二十二日條參照、明年七月二十二日條參照。

五月七日 武者所ノ服制ヲ定ム。(建武記)

六月七日 護良親王、足利尊氏ノ第ヲ攻メ給ハントストノ風説アリ。尊氏、兵ヲ集メテ自ラ衛ル。

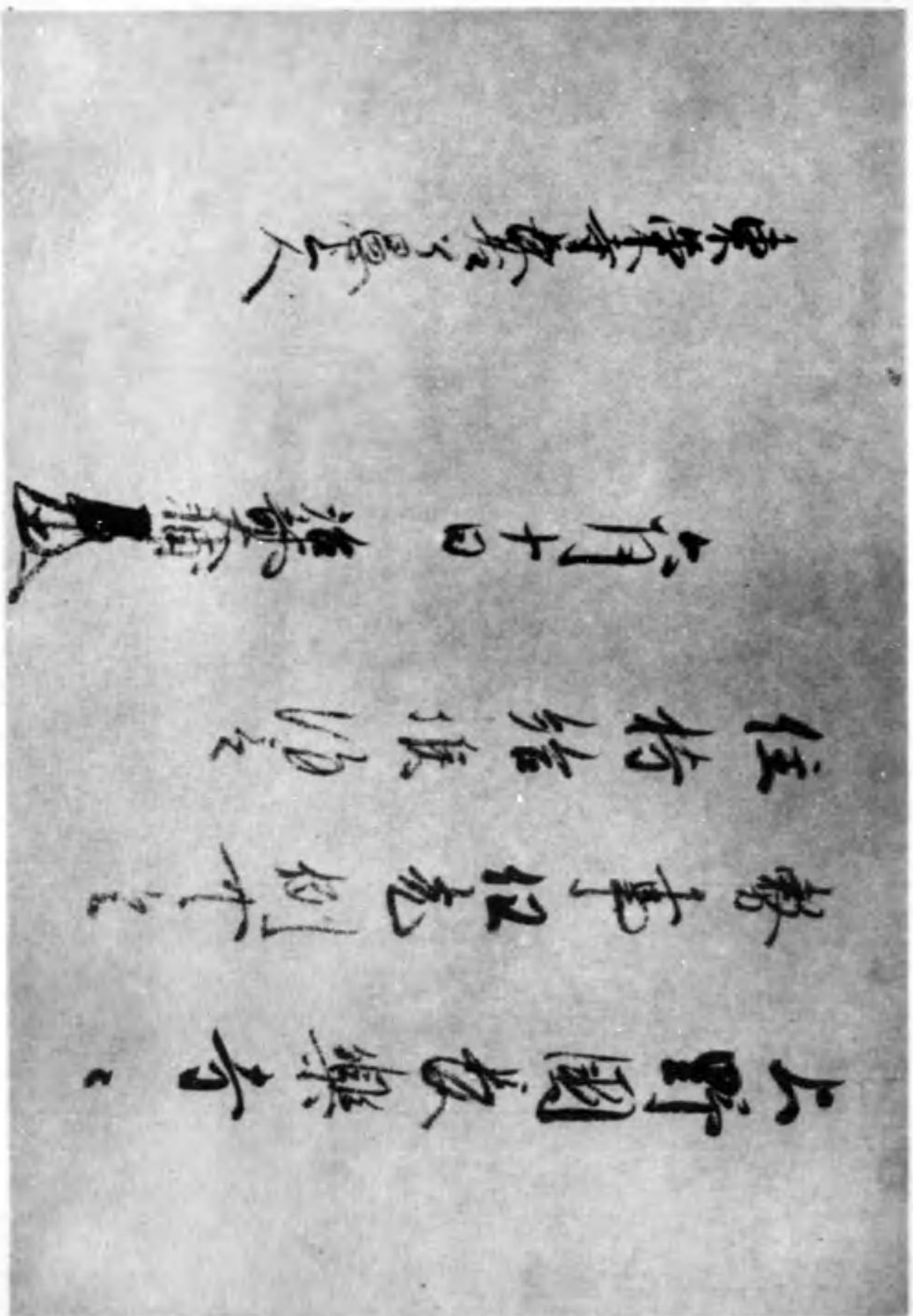
尊氏追討ノ風説

〔梅松論〕(前文三月九日) 其後もなを京中騒動して止時なし、中にも建武元年六月

七日、兵部卿親王大將として將軍の御前に押寄らるべき風聞しける程に、武將の御勢御所の四面を警固し奉り、餘の軍勢は二條大路に充満しける程に、事の特大義に及によつて當日無爲になりけれども、將軍よりいきどほり申されければ、全く忍いりよにはあらず、護良親王の張行の趣なりし程に、(下文十月二十二日ノ條ニ收ム)

六月十日 上野長樂寺住持雄峰奇英、退院ス。是日、義貞、上野大介トシテ、鈍翁了愚ヲシテ之ガ住持タラシム。

〔禪刹住持籍〕上野州世良田 十二世雄峰奇英(中略元弘三年是歲ノ條ニアリ) 建武元年甲戌退院後 迂禪奥康永元年壬午七月六日示寂、時六十歲。



四六 義貞公自筆長樂寺住持補任狀

十三世鈍翁了愚、扁月船、建武元甲戌入寺、歲六十二、同三年丙子退院。

〔長樂寺文書〕(野上)

上野國長樂寺々務事、任先例可令住持給候、謹言、

六月十日

(新田義貞)
治部大輔(花押)

東榮寺長老了愚上人

八月二十三日 繪旨及越後國宣ニヨリ、村山隆義ノ戰功ヲ賞シ、越後國田保地頭職ヲ與フ。

〔村山文書〕(羽前) △六、一七四〇

越後國頸城郡内蘭田保地頭職事、任繪旨國宣之旨、所打渡村山彌次郎隆義狀如件、

建武元年八月廿三日

(吉良綱義)
左兵衛尉(花押)(33)

〔註〕 繪旨國宣竝ニ所見ナシ、サレト國宣ハ義貞ノ發セシモノト見テ便宜此日ニ係ク。

〔源姓村山系圖〕

隆義村山彌次郎 父村山中務丞源義信、元弘三年五月廿二日、鎌倉北

條相模入道平高時御退治迄而、數度盡軍忠、對戰死之大功、新田左兵衛尉源義貞公南朝奏聞、南朝依志通、建武元年八月廿三日從後醍醐天皇、越後國頸城郡内蘭田保

元弘四年建武元年

地頭職之繪旨賜下、(奈良編年ノ誤)新田左兵衛尉源義貞公以御證判被打渡、

九月十二日 雜訴決斷所、牒ヲ脇屋義助ノ駿河國衛及、ヒ守護所ニ移シテ、久遠壽量院別當坊雜掌ヲ内谷郷ニ入レシム。

〔前田家所藏文書〕(實相院及東寺寶)

雜訴決斷所 駿河國衛

久遠壽量院別當坊雜掌申、當國內谷郷(志太郡ニ内)事、(谷村アリ)副解狀具書

牒止惡黨之濫妨可被沙汰居雜掌於地下者、以牒、

建武元年九月十二日

(町野信家)前加賀守三善朝臣花押

從一位源朝臣

左大史小槻宿彌

權中納言春宮權大夫藤原朝臣

左中辨藤原朝臣

參議右大辨藤原朝臣花押

雜訴決斷所 駿河國守護所

(以下同前ナル故ニ略ス)

〔註〕 駿河守ハ脇屋義助ナリ。

坊門清忠

九月二十一日 石清水八幡ニ行幸。二十二日、護國寺供養。導師東寺長者道意ナリ。其ノ大童子ニ德壽丸(新田義興ノ幼名ニ同ジ)、岩松丸アリ。

〔護國寺供養記前田侯〕△六、一七九〇 (九月廿日乙巳、天晴、今日下向八幡、日出程出)

門子(道)薄物衣香袈裟乘輿、新調車屋形外連子也、袖并金物等彫大文、力者十二人、衣、此外尻垂二人爲當日自開道參向、大童子

二人、岩松、得壽各狩衣、无單、侍二人、長宗、暹舜、各等身衣、指貫騎馬、仕丁二人、中略、今度下向人數、實尊法印

實猷法印(以下供僧) 侍 快辨法橋(以下十) 中間 隨聞(以下十) 中童子二人 岩

一丸 愛壽丸 大童子四人 鶴法丸 阿古松丸 岩松丸 德壽丸 此外相

應院岩門徒、并神呪寺々僧等爲裏頭參、

〔東寺塔供養記〕

〔註〕 尊卑分脈ヲ案ズルニ、德壽丸ハ新田義興ノ幼名ナリ。然レドモ斯波宗家

ノ子ニモ得壽丸アレバ必ズシモ定メ難シ。岩松丸ハ岩松氏ノ者ノ如クナ

レドモ之亦決メ難シ、

九月二十七日、(陸奥國衛)新田孫五郎ニ令シテ、岩手郡仁王郷ノ地ヲ後藤基泰ニ付セシム。

〔大石寺文書〕(河) △六、一九一五

元弘四年建武元年

岩松丸
德壽丸

後藤佐渡三郎太郎基泰^(中)岩手郡^(中)二王郷三分二事^(在)御下文之旨可沙汰付之由被仰^(下)左衛門六郎清時^(條南)之處稱本主支^(中)不打渡之結句下向津輕之間^(所カ)延引也云々早蒞彼所可沙汰付使^(代)不帶綸旨國宣者不可許^(代)使節及遲引者可有其咎者^(代)國宣執達如件

建武元年九月廿七日

大藏權少輔^(調)□^(卷)

新田孫五郎殿

(註) 新田孫五郎其ノ名ヲ缺グ果シテ上野新田氏ナルヤ或ハ奥州新田氏ナルヤ不明ナリ然レドモ長樂寺新田氏系圖中ニハ鳥山孫五郎成繼^(或ハ魁)アリ時代ハ一致ス。

九月二十七日⁽²⁾賀茂社行幸ニ扈從セル足利尊氏ノ隨兵中ニ山名近江守兼義アリ。

〔朽本文書〕△六、一、九一三、

建武元年九月廿七日等持院殿^(尊氏)供奉賀茂兩社行幸帶刀廿一番

(以下三十九名ノ隨兵中三十四番ニ) 山名近江守兼義□

(註) 右ハ名明カナラザレド尊卑分脈ヲ案ズルニ時氏ノ弟兼義カ。

十月五日 萬里小路藤房、諫奏シテ時弊ヲ痛論シ、是日、官ヲ棄テ、去ル。

〔參考太平記〕^{卷第三} 龍馬進奏藤房卿諫言事

藤房卿謹テ申サレケルハ、^(中)嗚呼今度天下ヲ鎮メテ君ノ宸襟ヲ休メ奉タル者ハ高氏義貞正成圓心長年ナリ彼等カ忠ヲ取テ漢ノ功臣ニ比セハ韓信彭越張良蕭何曹參ナリ又唐ノ賢佐ニ譬ハ魏徵玄齡世南如晦李勣ナルヘシ其志節ニ當リ義ニ向テ忠ヲ立ル所何レヲカ前トシ何レヲカ後トセン其賞皆均シク其爵是同カルヘキ處ニ圓心一人僅ニ本領一所ノ安堵ヲ全シテ守護恩補ノ國ヲ召返サル、事其咎ソモ何事ソヤ賞中其功則有忠者進罰當其罪則有咎者退ト云リ痛哉今ノ政道營ニ抽賞ノ功ニ當ラサル譏ノミニ非ス兼テハ綸言ノ掌ヲ翻ス憚アリ今若武家ノ棟梁ト成ヌヘキ器用ノ仁出來テ朝家ヲサミシ申事アラハ恨ヲ含ミ政道ヲ猜ム天下ノ士糧ヲ荷テ招サルニ集ラン事疑有ヘカラス

十月二十二日 護良親王ヲ武者所ニ拘ス。明日、常盤井殿ニ遷シ、又、武者所ノ番衆ニ命ジテ、親王ノ從者ヲ捕フ。尋テ、十一月十五日、親王ヲ鎌倉ニ流ス。

武功ノ臣ヲ評ス

赤松則村一人恩賞薄シ

護良親王
ヲ武者所
ニ拘ス

十一月鎌
倉ニ流ス

親王一身
ニ責ヲト
リ給フ

〔梅松論〕(前文ハ六月七
日ノ條ニアリ)

十月廿二日の夜、親王御參内の次を以、武者所に召籠奉
て、翌朝に常盤井殿へ迂し奉り、武家(の)輩警固し奉る、宮の御内の輩をば、武者の番
衆、兼日勅命を蒙りて、南部工藤を初として、數十人召預けられける、同十一月、親王
をば細川陸奥守顯氏請取奉て關東へ御下向あり、思ひの外なる御旅(イナシ)の空申もな
か、愚也、宮の御謀叛眞實は忍いりよにてありしかども、御科を宮にゆづり給
ひしかば、鎌倉へ御下向とぞ聞えし、宮は二階堂の藥師堂の谷に御座有けるが、武
家よりも君のうらめしく渡らせ給ふと御獨ごと有けるとぞ承る(下文明年七月二
十二日條ニ收ム)

〔保曆間記〕〔參考太平記〕〔大乘院日記目錄〕〔東大寺文書〕〔元弘日記〕〔無
名記〕

十二月十三日 五壇法ヲ宮中ニ修シテ、凶徒ノ平定ヲ祈ルヤ、新田大島
讚岐守義政、細川阿波守召サレテ南庭左右ヲ警衛ス。〔續史愚抄〕〔皇年代
私記〕〔皇代略記〕〔參考太平記〕

〔七卷册子〕(建武元年五月) 十一日飯盛山合戦アリト云々、京都ニ今度ノ逆徒追伐ノ御
祈ニ安鎮ノ法ヲ修セラルヘキヨシ、南都ヨリモ僧徒ヲ召ル、紫宸殿ニ於テ修法セ
ラル、導師竹内慈嚴僧正ト云々、鎮壇應護ノ兵士ハ結城左衛門尉、伯耆守、楠舍弟七

郎、鹽谷判官等四門ノ警衛ニマヒル、南庭左右ノ陣ハ千葉助三浦助ヲ召サル、ノ
所、兩人相手ヲ嫌ヒ申ニヨリ已ニ法會ノ違亂ニ及フ、俄ニ大島讚岐守、細川阿波守
兩人ヲ召レテマヒルヨシ云々、

十二月二十一日 藤原妙蓮(土用王御前)、上野新田庄、上總、讚岐等ノ所領ヲ養
子岩松直國ニ讓ル。

〔正文文書〕

三郎直國

ゆつりわたすやうし三郎た、くに(紙損)しよりやうの事、

一 かうつけのくににつたのしやうの中なりつかのかう、かなやのかう、すかしを
のかう、

一 をなしきくにせん(千段)さいのかうの中にいし(紙損)かうのさいけ、

一 をなしきいはまつのひんかしのや(紙損)

一 をなしきくにふたこつかのかうく下(紙損)

一 下つさのくにみなみさうまの中ふち心のかう、てかはふん、ひかしかたふせの
(紙損)

一 さぬきのくによしの、かう、

元弘四年、建武元年

みきのところへ、あまめうれんかおさな(紙損)とよわうかちうたいさうてんのしよりやうなり、しかるにこなきあいた、くくにやうしとして、たいくのでつき御下ふみをあいそへて、なかくゆつりわたすところしち也、たのさまたけあるへからす、よつてのちのためにゆつり上くたんの五とし、

けんむくわんねん十二月廿一日

(尼妙蓮) あまめうれ(紙損)

〔正本文書〕

(紙損) わたすみなもとのとよわうとの、ところ、

(紙損) つけのくににつたのしやううちなりつかのがう、

(紙損) しきかなやのむら、をなしきすかしほのむら、

(紙損) さいのかうのうちにいしまのがうのさいけ、

(紙損) なしきいわまつのひんかしのやしき、を(紙損) きふたこつかの上下、

(紙損) つさのくにみなみさうまの(紙損) う、おなしきてかひんふん、

ひんかしかたいひむらふせのむら、

(紙損) のところへ、あまめうれんのおさな(紙損) わうかせんそさうてんのそ

りやうなり、しかるを(紙損) するによつて、とよわうとのをやうしとして(紙損) のて

源土用王

尼妙蓮ノ
王幼名土用

つき御くたしふみをあいそへて、えいたひ(紙損) りわたすところしちなり、たのさまたけなく(紙損) うせられへきしやうしやうくたんのことし、

けんむくわんねん十二月廿一日

(尼) あまめうれん

〔註〕 弘安五年十一月十二日、尼眞如ノ讓狀ニ、女子藤原土用王御前アリ、コレ妙

蓮ナルベシ。妙蓮ノ逆修板碑ハ正安四年八月ノ條ニアリ、直國トとよわう

ハ同一人ナルベシ。妙蓮、直國跡ヲ相馬乙鶴丸ニ賜ラン事ヲ幕府ニ乞フ事、延

元二年四月十七日條ニ收ム。

建武二年乙亥 (一九九五)

三月十二日 越後凶徒蜂起ス。是日、藤原某(名闕) 色部長倫等ニ令シテ、堀口貞政ニ從ヒ之ヲ討タシム。

〔色部文書〕(越後、櫻井市 作氏所藏)

越後國凶徒蜂起事、□□□□□□□□□□新田□□□□□□□□也、早從貞(政)□□□□(堀口貞政)催一族

等、可□軍忠之由所候也、□□□□如件、

建武二年三月十二日

藤原□□

色部三郎殿

建武二年

三六七

三月十三日 義貞ノ大介タル播磨國衛、伊和社神主ヲ促シテ、己勝宮造營ノ功ヲ竣ラシム。

〔伊和神社文書〕(播磨) 六二二三〇、

御祈禱(所説カ)播磨國伊和社(當國一宮ニテ、尖栗)三社内己勝宮、去元亨年中爲神火令燒失間、追年雖致造營修理米不足間、未遂其功、而二季之祭禮闕分、職掌人雜事米、自喜曆年中至當年相積云々、早任先例、己勝社造營嚴密可終其功由、依被申、國宣所候也、仍執達如件、

建武貳年三月十三日

沙彌宗圓(花押)(34)

播磨國宣

一宮神主殿

三月二十九日 雜訴決斷所、牒ヲ義貞ノ受領タル越後國衛ニ移シテ、和田茂眞ノ同國奥山莊黑河條地頭職ヲ押領セルヲ停メ、本主齋藤實利代ニ交付セシム。依テ國衛、四月十三日、國宣ヲ發シテ目代ヲシテ之ヲ施行セシム。尋デ、實利、之ヲ養子南保重貞ニ讓ル。依テ、延元々々年四月二十一日、源爲經(目代)之ヲ重貞ニ打渡ス。

〔伊佐早文書〕(米澤、伊佐早) △六二二三五八
(謙氏舊藏)

雜訴決斷所牒 越後國衛、

長井福河齋藤三郎實利法師法名申、和田彦四郎茂眞、令押領當國奥山莊内黑河

條地頭職事、

牒、圓心帶讓狀公驗等、知行無相違之處、茂眞元弘三年八月以來、非分押領云云、太無其謂、早停止彼監妨、沙汰居圓心代、可被申散狀者、以牒、

建武二年三月廿九日

三 善(花押)

(吉田定房)
民部卿藤原

左衛門尉平(花押)(以下七名)
(ヲ略ス)

長井福河齋藤三郎實利法師法名申、和田彦四郎茂眞、令押領越後國奥山莊内黑河條地頭職事、決斷所牒副申如此、早任被仰下之旨、停止茂眞監妨、可沙汰付圓心代於當所之由、國宣所候也、仍執達如件、

建武二年四月十三日

左衛門尉(花押)(35)

源 (花押)(36)

沙彌(花押)(37)

謹上 御目代殿

建武二年

三六九

仰下サル
ル旨ニ任
セテ停止

越後國奥山莊内黒河條地頭職者圓心かくへち相傳の所領也、しかるを實子なき上、女房平氏のおいたる(男)によて、南保三郎右衛門尉重貞を養子として、未來所讓與也、但圓心ならひに女房一(男)この程は、此ところの得分半分、毎年に無未進沙汰しのほせて給候へ、殘半分をは、ともかくも進退たるへく候、此所は嘉曆三年八月所勞の時、女房にてうとの證文を相副て、一圓にゆつりわたし候あいたすてに外題安堵を申給候によて、此狀に女房判きやうをくわへて、一期のうちは、一圓に彼證文をあひそへ候て、知行(相違)をいあるましく候、このほかいかなる人出來、子細を申候とも、此狀に女房證判をのせ候上は、自餘は其をりに申おこなせ給候へ、仍爲後證自筆之讓狀如件、

建武二年卯月廿七日

沙彌圓心(花押)
平氏(花押)

打渡狀

越後國奥山莊黒河條地頭職事

右任去年(建武)三月廿九日御牒、同四月十三日國宣之旨、當所於長井福河齋藤三郎

實利法師(法名)圓心子息右衛門藏人重定、所奉付沙汰之也、仍渡狀如件、

延元々々年四月廿一日

源爲經(花押)

(註) 義貞重貞ニ命シテ守護代佐々木忠枝ヲ援ケシムルコト、延元二年三月十日ノ條ニ、新田義宗重貞ヲシテ黒河地頭職ヲ安堵セシムルコト、興國元年六月二十七日ノ條ニ見ユ。

五月十七日 雜訴決斷所、牒ヲ義貞ノ大介タル播磨國衛ニ移シテ、同國西奥村及ビ那波浦ニ南禪寺雜掌ヲ入ル、事ヲ遵行セシム。

〔南禪寺文書〕(山城)

播磨國衛并守護

南禪寺雜掌申、當國天野例名内西奥村(海老名)同那波浦(置鹽彦五郎)

四月廿三日給旨、可沙汰居寺家雜掌於當所者、牒送如件、以牒、

武二年五月十七日

前丹後守大江朝臣(實重)花押(以下六名ヲ略ス)

五月二十日 雜訴決斷所、播磨松原八幡別宮檢校任耀ノ訴ニ依リテ、義貞ノ大介タル播磨國衛ニ移牒ス。是日、國衛、目代ニ令シテ、牒旨ヲ遵行セシム。

〔松原神社文書〕 △六二、四一四

當國八幡松原別宮檢校兼公文下水大貳法眼任耀申、三野南條地頭河勾刑部入道宗蓮、同孫九郎入道親阿等、以前知行地掠給安堵牒之由事、決斷所牒副訴狀如此、(文、載七、ズ)任被仰下旨、嚴密加催促、可被進請文之由、國宣所候也、仍執達如件、

建武二年五月廿日

左衛門尉(花押)⁽³⁸⁾

右衛門尉

散位

國宣

謹上 播磨國御目代殿

六月十九日 義貞、上野國大胡郷内野中村地頭職ヲ長樂寺住職了愚ノ禪庵ニ寄進セントス。繪旨ニヨリテ聽サル。是日、義貞ノ大介タル上野國衙、目代ニ令シテ、地ヲ寺ニ交付セシム。

〔長樂寺文書〕

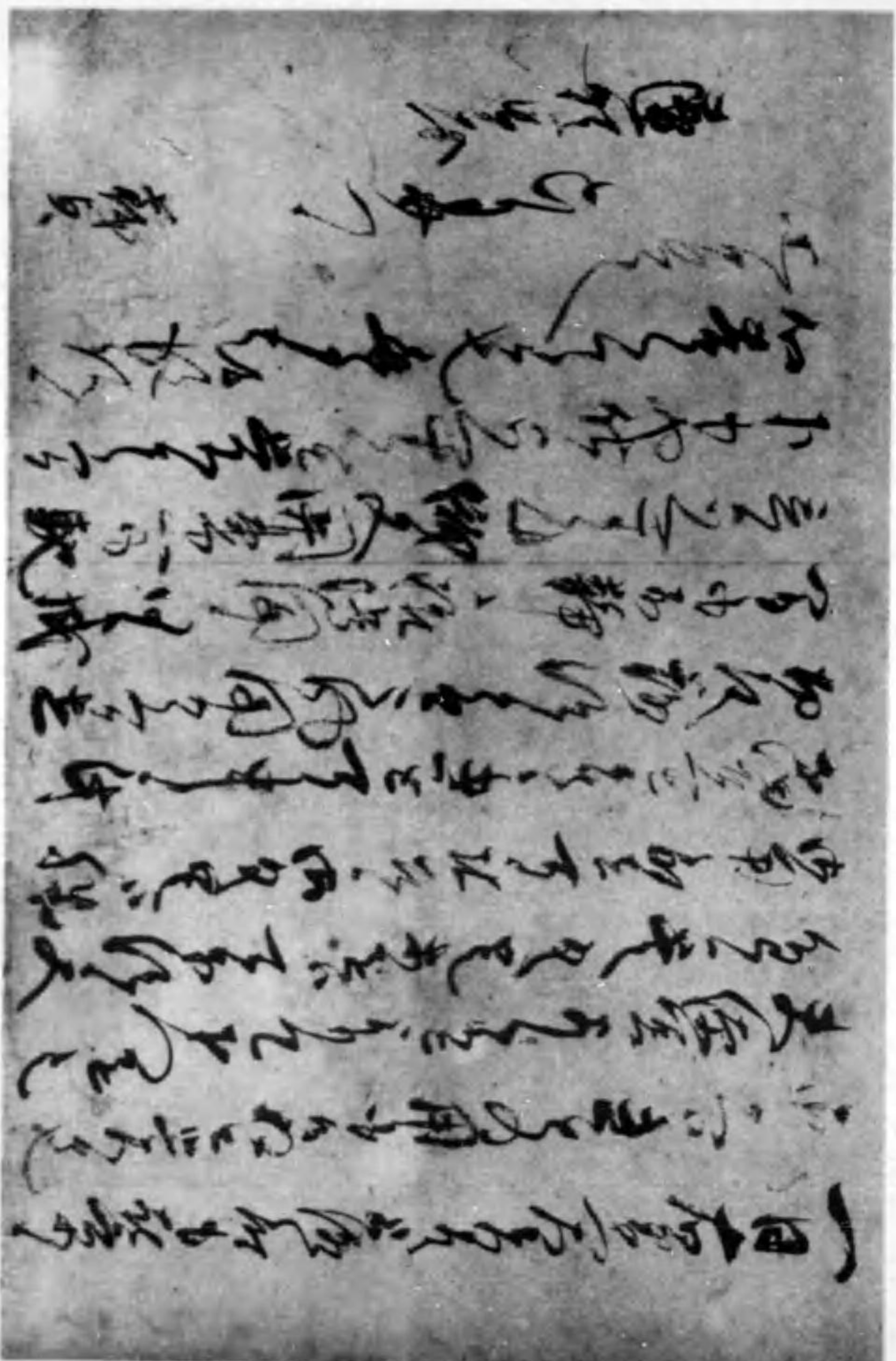
□野國大胡郷内野中村地頭職事、長樂寺了愚上人禪庵、義貞寄進被聞食了、不可有相違之由、繪旨如此、早可被沙汰付之旨、國宣所候也、仍執達如件、

建武二年六月十九日

平 (花押)⁽³⁹⁾

了愚上人
義貞寄進
聽許ノ繪
旨國宣

東京市小石川區雜司ヶ谷 保坂潤治氏藏
史料編纂所所藏寫眞複製



四七 傳義貞公書狀

源 (花押) (40)
沙彌 (花押) (41)

謹上 御目代殿

(註) 義貞了愚上人ヲ長樂寺住持タラシムル事、去年六月十日ノ條ニアリ。

〔東福寺文書〕(山城) △、六、八、五、二、四

國師滅後六十三年目、人數貳百六人、(編考)

開山木像助緣簿 康永三仲ヨリ 天保六未四百九十三年ニナル

勸進 (東福寺) 造 開山國師(聖一國師辨圓) 木像

助緣

康永三年仲冬日(以下人數二百六人ノ中ニ)

壹貫文

了愚 (花押)

六月是月 式部大輔新田里見義俊、播磨府中ニ卒ス。山内通繼、其遺子
土用鶴丸ヲ養ヒ、後、所領備後津田郷地頭職等ヲ之ニ讓ル。

〔山内首藤文書〕(足利家氏) 一十 △、六、二、四、五、五

(花押)

建武二年

聖一國師
ノ木像

了愚

新田義貞當公

三七四

讓渡所領事

一 備後國津田郷(世羅郡ニ上下津田村アリ)地頭職事、

一 遠江國飯田莊(長上郡)内加保村地頭職事、

一 伊賀國島原(阿拜郡ニ島ヶ原村アリ)郡司職事、

一 京都西岸寺御堂事、

山内通繼
里見土用
鶴丸ヲ養
フ見義俊
ノ子
通繼、尊
氏ニ屬シ
リテ鎌倉
西上スヨ

右件所領者、通繼重代相傳私領也、雖然依無實子、他姓之孫嫡子里見土用鶴殿爲養子、令改姓號山内土用鶴丸所讓渡也、親父新田里見式部大輔義俊、當年六月中、於播磨國府中、自被墮命以來、令養育處也、雖爲他姓、且云孫嫡子、且云養子、旁以其志深切之間、一圓所讓與也、依爲當歲子、雖有斟酌、自關東將軍家御上洛之由承及、馳參于海道、向戰場之上者、存命不定者歟、仍先所渡讓狀也、更不可有親類代人之妨、聊稱通繼之子孫、於彼所領有望申輩者、可申行罪科者也、仍爲後證、相副代々御下知證文、讓狀如件、

建武二年十一月廿八日

藤原通繼(花押)

任此讓狀、可令知行狀如件、

建武二年六月廿三日

七月十二日 雜訴決斷所、牒ヲ義貞ノ受領タル越後國衙ニ移シ、三浦和

田茂繼ヲ同國奥山庄内中地頭職タラシム。尋テ、二十日、越後國衙、目代及守護代ニ令シテ之ヲ施行セシム。

〔中條文書〕

(米澤市中條 弘資氏藏) (圖版四二参照)

雜訴決斷所牒

越後國衙守護

三浦和田三郎茂繼申、當國奥山庄内中條地頭職事、副申狀 具書 牒、任去六月廿日 繪旨、可沙汰居者以牒、

建武二年七月廿日

民部卿藤原朝臣 左衛門尉平(花押)

散位字佐宿彌

采女正中原

右京大夫藤原朝臣(花押) 左衛門大尉中原朝臣(花押)

大外記中原朝臣(花押)

前伊勢守小槻宿彌(花押)

正三位藤原朝臣(花押) 左少辨藤原朝臣

建武二年

三七五

三浦和田三郎茂繼申越後國奥山庄内中條地頭職事、決斷所御牒副申文 具書案如此、早任被仰下之旨、可被沙汰居茂繼於當所之由、國宣所候也、仍執達如件

建武二年七月廿日

右衛門尉(花押)

源 (花押)

沙 彌(花押)

(新田人遣(新田人遣トハ附箋カ) 御目代殿)

(右同文守護代由良入道宛ノモノ一通(由良入道トセルモ附箋カ))

三浦和田三郎茂繼申越後國奥山庄内中條地頭職事、七月廿日之國宣、同月廿四日任施行之旨、打渡(張カ)故畢、仍渡狀如件

建武二年八月十五日

(比野九郎(附箋カ) 守護御使貞元(花押))

七月二十日 足利尊氏、擅ニ、義貞受領ノ越後國內ニ於テ、且、新田氏ノ根據地ナル上田庄内秋丸村ヲ葦谷義顯ニ與フ。

(田島文書)(上野、嶋村、田島 善平氏所藏)

葦谷義顯

越後國上田庄

尊氏上田庄ヲ河野義貞ニ與フ

(足利尊氏) (花押)

下 葦谷六郎義顯

可令早領知越後國上田庄内秋丸村事、右以人爲勳功之賞所宛行也、早守先例可領掌之狀如件

建武二年七月廿日

(註) 右文書ニハ義貞公下知狀御筆ト題ヲ附シタレド、花押ハ尊氏ナリ、九月二十七日條參照、上田庄ガ新田氏ノ根據地ナル事、元弘三年五月八日條太平記ニヨリテ察スベシ。尊氏下文ハ既ニ元弘三年十二月廿九日(安保 文書)ニ見ユ。

(參考) 當時、尊氏ノ上田庄ヲ進退セル文獻アリ、左ニ掲グ。

(豫章記) (河野通貞) 其子通貞、對馬三郎、母別府七郎左衛門入道女、元亨年中、將軍方參テ、忠節ヲ致シ、越後國上田庄小栗山郷ヲ賜ル、

(河野系圖) 通貞、元弘年中、參將軍御方賜、越後國上田庄小栗山郷、

七月二十二日 北條時行、兵ヲ信濃ニ舉ゲ、進デ武藏ニ入ル。澁川義季、新田岩松經家等、之ヲ禦ギテ戰死ス。是日、足利直義、自ラ出デ、井出澤ニ戰ヒ敗績ス。明日、直義、護良親王ヲ弑シ、成良親王ヲ奉ジテ西走ス。

建武二年

三七七

北條時行

澁川義季
岩松經家
敗死ス

小山秀朝
敗死ス

直義、護
良親王ヲ
獄シテ去
ル

時行起ル

〔梅松論〕

(前文、去年十月二日、十二月日條ニ收ム)

かくて建武元季も暮れば、同二年、天下彌をだやかならず、同七月の初、信濃國諏方の上の宮の祝、安藝守時繼が父三河入道照雲、滋野の一族等高時の次男勝壽丸を相模次郎と號しけるを大將として國中をなびかすよし、守護小笠原信濃守貞宗、京都へ馳申間、御評定にいはいはく、凶徒木曾路を経て尾張黒田へ打出べきか、しからば早々に先御勢を尾張へ差向らるべきとなり、かゝる所に凶徒はや一國を相從へ、鎌倉へ責上る間、澁川刑部、岩松兵部、武藏安顯原にをいて終に合戦に及といへども、逆徒手しげくかゝりしかば、澁川刑部、岩松兵部、兩人自害す、重而小山下野守秀朝發向せしむといへども、戰難義にをよびしほどに、同國の府中にをいて秀朝をはじめとして一族家人數百人自害す、依之七月廿二日、下御所左馬頭殿、鎌倉を立て、御向有し、同日、藥師堂谷の御所にをいて兵部卿親王を失ひ奉る、御痛はしき申もなかゝをろかなり、武藏の井の出澤にをいて戦ひ暮しけるに、御方の勢多く討れし程に俄に海道を引退給ふ、上野親王成良、義詮六歳にして同相伴ひ奉る、

〔參考太平記〕

卷第十三

中前代蜂起附成良親王鎌倉御没落事

相模次郎時行ニハ、諏訪參河守、三浦介入道、同若狹五郎

澁川義季
小山秀朝
敗死ス

新田四郎
利根川ニ
支テ敗ル

直義、成
良親王ヲ
倉テ落ツ

北條家、南都本作「若狹守」非也、毛利家、西源院、天正本有「判官字」爲「得」按三浦家譜、若狹五郎判官名持明、若狹守景明子也、諸本第六卷亦有「三浦若狹五郎」又別一人也、第六卷所載者名「氏明」也、今所載者持明也、可合見三浦家譜有「若狹五郎二人」氏明、持明也、

草名判官入道、那和左近大夫、清久山城守、鹽谷民部大輔、工藤四郎左衛門、天正本載「安保入道及長崎」毛利家本載「安保次郎左衛門」已下宗徒ノ大名五十餘人、五十、毛利家本作「與シテケレハ、伊豆、駿河、武藏、相模、甲斐、信濃ノ勢共相附スト云事ナシ、時行其勢ヲ率シテ、

五萬餘騎、俄ニ信濃國ニ打越テ、時日ヲ替ス、則鎌倉へ攻上リケルニ、澁川刑部大輔、按名義季貞頼子、直義之妻弟也、小山判官秀朝、武藏國ニ出合、是ヲ支ントシケルカ、其ニ戰利ナクシテ、

兩人所々ニテ自害シケレハ、系圖云、建武二年七月十三日、秀朝戰死於武州、七月二十二日、義季於武州、其郎從三百餘人皆兩所ニテ討レニケリ、兩所、西源院、又新田四郎上野國利根川ニ支テ、

テ、利根川、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都本作「燕川」是ヲ防カントシケルモ、敵目ニアマルホトノ大勢ナレハ、

一戰ニ勢力ヲ碎カレ、二百餘人家、南都本作「三百」、討レニケリ、懸リシ後ハ、時行彌大勢ニ成テ、既ニ三方ヨリ鎌倉へ押寄ルト告ケレハ、直義朝臣ハ事ノ急ナル折節、用意

ノ兵少カリケレハ、角テハ中々敵ニ利ヲ附ツヘシトテ、將軍宮ヲ具足シ奉リテ、七月十六日、曉ニ、今川家本作「八月十六日」、毛利家、北條家、南都本、作「八月二十六日」、西源院本作「七月二十六日」、金

之日也、金勝院、天正本、說爲「得、當三與、下并考」、鎌倉ヲ落給ヒケリ、

○金勝院本云、諏訪前祝部參河守頼重、時行ヲ取立テ、國司博士左近少將入道ノ

建武二年

三七九

岩松恆家
燕川ニ敗
ル
濫川義季
女影ニ自
害

義季自害

季朝自害

新田四郎
敗死

許へ押寄ケレハ、少將入道自害セラレケリ、建武二年七月十八日ニ、上野國ニ打
入、那波左近大夫宗政ノ一類并國中ノ勢馳加リケリ、岩松次郎左衛門恆家、燕川
ニ馳向、一矢射テ纒ノ小勢ナレハ、鎌倉へ馳上ル、濫川刑部大輔義季二千餘騎ニ
テ、久米川ニテ打合ケリ、此勢ヲ三手ニ分テ、女影宿ノ北ナル野ニテ鬪ケルカ、三
百餘騎ハ討レニケリ、然レハ則義季自害シケリ、(中略)
○天正本云、時行信濃國ヨリ起テ、鎌倉へ攻入ル、直義驚駭テ、馳テ濫川刑部大輔
義季ヲ向ラルヘシトソ宣ヒケル、義季ハ敵ノ強大ニシテ、而モ東國ノ兵共過分
ハ内通ノ由ヲ聞給ヒシカハ、(中略)帷幕ノ中ニ物具脱捨テ、心閑ニ腹カキ切、西枕
ニソ伏給ヒケル、(中略)去程ニ女影原合戰、御方無勢ニテ難儀ナル由聞ヘシカハ、
直義重テ、小山判官秀朝ヲ助ノ兵ニソ差下サレケル、秀朝嚴命ヲ蒙テ、一千餘騎
ニテ馳下リ、武藏國府ニ著テ相戰シカトモ、ソレモ軍ニ利ヲ失ヒ、秀朝腹切シカ
ハ、若黨五百餘人、同枕ニ自害シテ、尸ハ路徑ニ横ハリケル、是ノミナラス、新田四
郎上野蕪河ニテ支戰シモ、一戰ニカヲ失テ、兵悉討レヌ、又細川四郎入道モ頼貞、名
法名義阿、病
床ニ臥ナカラ、敵陣ニ馳向ヒ、其身ハ腹切、若黨トモハ討死ス、サレハ所
俊氏子也、々々ノ合戰ニ、股肱ノ氏族、耳目ノ勇士、數ヲ盡シテ腹切討レシカハ、直義カクテハ

叶フマシトテ、將軍宮ヲ具足シ奉リ、細川陸奥守顯氏ヲ御供ニテ、七月二十三日
曉天ニ、鎌倉ヲソ落給ヒケル、

〔宮下過去帳〕

(上野新田二十日)

建武二年七月廿二日於女影討死、岩松四郎經家、同

禪師、同本空、長岡大藏卿源瑜女影討死、(中略)二十五日建武三年七月廿五日、相州八幡

原ニ而討死、鳥山太郎四郎氏盛、(中略)三十七日建武二年七月廿七日伊豆國七里野

自害畢、鳥山右京亮宗兼、同五郎氏綱、大館二郎時氏、

八月二日 足利尊氏、自ラ往キテ北條時行ヲ 伐タント請ヒ、且、征夷大
將軍總追捕使タランコトヲ望ム。未ダ許サレズ。是日、命ヲ待タズシテ
發ス。尋デ、尊氏、征東將軍ニ補セラル。尊氏、三河ニテ直義ニ會ヒ、連リ
ニ時行ノ兵ヲ破リテ進ム。八月十九日、鎌倉ニ入ル。其ノ勢望甚ダ高シ。
三十日、功ニヨリ從二位ニ叙セラル。

〔梅松論〕

上

扱關東の合戰の事先達イヨリテ京都へ申されけるに依テ、將軍御奏問有け
るは、關東にをいて凶徒既に合戰をいたし、鎌倉に責入間、直義朝臣無勢にしてふ
せぎ戰ふべき智略なきに依テ、海道に引退イヨきし其聞え有上は、いとまを給ひて合
力を加べき旨御申、たびイにおよぶといへども、勅許なき間、所詮私にあらず、天

岩松經家
同禪師
同本空
長岡源瑜
鳥山氏盛
鳥山宗兼
鳥山氏綱
大館時氏

尊氏赴授
請願勅許
ナシ

章氏、推
ニ東下ス
諸將從フ

時行軍ヲ
破リ進ム
恩賞

八月十九
日、鎌倉
ニ攻メ入
ル時、行
等没

中先代
廿日先代

下の御爲のよし申捨て、八月二日、京を御出立あり、此比公家を背奉る人々、其數を
しらす有しが、皆喜悅の眉をひらきて御供申けり、三河の矢作に御着有て、京都鎌
倉の兩大將御對面あり、今當所を立て關東に御下向有べき處に、先代方の勢遠、江
の橋本を要害に構て相支る間、先陣の軍士阿保丹後守、入海を渡して合戰を致し、
敵を追ちらして其身疵を蒙る間、御威の餘に、其賞として家督安左衛門入道道
潭が跡を拜領せしむ、是をみる輩、命を捨ん事を忘れてぞいさみ戰ふ、當所の合戰
を初として同國佐夜の中山、駿河の高橋細手、宮根山相摸川、片瀬川より鎌倉に到
るまで敵に足をためさせず、七ヶ度の戰に討勝て八月十九日、鎌倉へ攻入たまふ
とき、諏方の祝父子、安保次郎左衛門入道道潭が子自害す、相殘輩或降參し或責落
さる、去程に七月の末より八月十九日に到迄廿日餘、彼相摸次郎、ふたゝび父祖の
舊里に立歸るといへども、いく程もなくして没落しけるぞあはれなる、鎌倉に打
入輩の中に曾て扶佐する古老の仁なし、大將と號せし相摸次郎も、幻稚なり、大佛、
極樂寺、名越の子孫共、寺々にをいて、小僧喝食になりて適身命を助りたる輩、俄に
還俗すといへ共、それとしれたる人なければ、鳥合梟惡の類、其功をなさざりし莫、
誠に天命にそむく故とぞおぼえし、是を中先代とも廿日先代とも申也。

章氏ノ與
高シ

申請テ東
章氏征夷
將軍ノ宣
旨ヲ請フ
聽サレズ

章氏直義
將軍ノ號
ヲ蒙ル

申請テ東
征東將軍
ニナサル

去程に將軍御兄弟鎌倉に打入、二階堂の別當に御座有しかば、京都より供奉の輩
は勳功の賞にあづかる事を悦、又先代與力の輩は死罪流刑を宥められける程に、
先非を悔ていかにも忠節を致さむ事を思はぬ者、こそなかりけれ(下文八月十日)
〔保曆間記〕五第 同廿八日相摸次郎、その身は鎌倉にあつて、關東の侍ならびに在
國の輩みな京都へせめのぼらむとぎす、然るにより京都の騒動不斜、その時尊氏
まかり向べき由仰られければ、左馬頭うちまけて落のぼるよしうけたまはり候
へば、申請(て脱カ)もまかりくだるべき所存に御座候、たゞし頼朝がれいにまかせ、征夷將
軍の宣旨をかうぶりくだり申さば、てういもきやうたいせんとのぞみ申されし
が、東夷をうちしたがへてのうへには宜からむとの給ひければ、さいそにをよば
ず、すでに發向せし所に、直義に三河國にしてゆきあひぬ、よつて軍評定などしあ
はせて下向す、海道所々の合戰に討勝しかば、諸人おほく降參す、しかふして勢彌
まさり、まことに尊氏直義てうでうして、將軍の號をかうぶりける、(下文九月二十)
〔神皇正統記〕後醍醐 高氏は申うけて東國にむかひけるか、征夷將軍ならひに
諸國の總追捕使を望けれと、征東將軍(印本征夷ニ作ルハ誤レリ)になされて、ことくはゆ
すされず、(下文十一月十八)
日ノ條ニ收ム

〔元弘日記裏書〕〔武家年代記〕〔太平記〕〔難太平記〕〔應仁記〕〔源氏系圖〕〔吉野御事書案〕〔室町系圖〕〔石川系圖〕〔結城古文書寫〕〔烟田文書〕〔石川文書〕〔栃木縣廳採集文書〕〔妙嚴寺文書〕〔常樂記〕〔鎌倉大日記〕〔異本塔寺八幡宮長帳〕〔諏訪大明神繪詞〕〔信州諏訪祠文書〕

八月二十六日 新田堀口貞政、繪旨ヲ蒙リテ、北條時行ニ黨セル信濃ノ凶徒ヲ伐タントシ、村山隆義ヲ催促ス。

〔村山文書〕〔羽前〕

後醍醐天皇繪旨へ添狀
堀口民部大輔貞政

信濃國凶徒蜂起之間、繪旨如此候、早相催一族、可被致軍忠之狀如件、

建武二年八月廿六日

〔堀口〕
民部大輔貞政〔花押〕(42)

村山彌二郎殿

〔註〕 繪旨竝ニ越後國宣ニヨリ、村山隆義ノ戰功ヲ賞シ、蘭田保地頭職ヲ與フル事、去年八月二十三日條ニアリ。隆義堀口貞政ニツキ信濃ニ赴ク事十二月十七日條ニアリ。

九月十六日 義貞ノ大介タル上野國衛、畠山西蓮ノ女ノ訴ニ依リテ、同國一宮内ノ田宅ヲ之ニ付セシム。

〔武州文書〕〔十六男、喜太郎所藏〕△六二、五九九

阿波式部□□入道西蓮〔山〕□源氏申、上野國一宮内那波□田島在家等事、早莅彼所沙汰付源氏、可被執進請取狀、使節緩怠者、可有罪科之狀如件、

建武二年九月十六日

右京亮〔花押〕

眞下藤四郎殿

〔註〕 本條ニ於ケル義貞ノ支配權ノ存否ハ尊氏トノ關係ニ於テ疑問ナリ。

九月二十一日 源某、色部氏ニ令シ、兵ヲ率キテ、越後岩船宿ニ會セシム。

〔色部文書〕〔前〕△六二、六〇三

爲惡黨人退治、今日罷向候、相催一族等、不廻時刻、可被馳參于岩船宿〔越後岩船宿〕候、仍執達如件、

建武二年九月廿一日

源〔花押〕(43)

色部總領并一族御中

建武二年

(註) 藤原某、色部長倫ニ令シテ堀口貞政ニ從ヒ越後凶徒ヲ討タシムル事、三月十二日條ニアリ。堀口貞政、村山隆義ヲ催促スル事、八月廿六日條ニアリ。本條源某トハ誰ヲ指スカ不明ナレドモ、茲ニ當國ニ於テ、新田足利ノ爭端開ケシヲ見ル。

九月二十七日 足利尊氏、諸將ニ賞ヲ行フ。就中、三浦高繼ニ上野新田ヲ、吉河經賴ニ上野白井氏跡ヲ、合屋賴重ニ上野吉田氏ノ舊領ヲ與ヘル等、義貞ノ職掌ヲ侵スノミナラズ、東國ニ在ル新田一族ノ所領ヲ闕所トシテ諸將ニ與フ。又、上野守護職ヲ上杉憲房ニ與フ。

〔宇都宮文書〕△六、二、六〇九、

(足利尊氏)
(花押)

下 三浦介平高繼

可令早領知相模國大介職、并三浦内三崎、松和、金田、菊名、網代、諸石名、(以上三浦郡)大磯郷、在高麗寺、俗別當職。東坂間、三橋、末吉、上總國天羽郡内古谷、吉野兩郷、大貫下郷、攝津國都賀莊、(菟原)豐後國高田莊、(西國東郡ニ高田村アリ)信濃國村井郷内小次郎知貞跡、陸奥國糠部内五戸、(今陸奥)會津河沼郡議塚井、上野新田、(父介入道々海、時繼跡本領)事、

上野新田
三浦高繼
ニ與フ

右以人爲勳功之賞、所宛行也者、守先例可致沙汰之狀如件、

建武二年九月廿七日

(註) 入道々海ノ所領ヲ長樂寺ニ寄進セルコト、嘉曆三年十一月八日其他ニ多シ。道海、時行ニ與セシ事、左ニヨリテ知ラル。

〔三浦系圖傳〕(紀伊) 時明

時繼

三浦介、從五位下

高繼 三浦介、從五位下

三浦介、從五位下、建武二年秋、平時行蜂起、時繼爲一方之大將、以所帶之太刀、切鎌倉寶藏之鎖、即名其太刀號海老籠切、至今爲時持之、後於尾州熱田被處、建武三年於六條河原被誅、法名道海。

〔吉川家譜〕二十 △六、二、六一、

御袖判 (足利尊氏)
(ナルベシ)

下 吉河次郎經賴

可令早領知白井太郎左衛門尉跡事、

右人爲勳功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

建武二年九月廿七日

(註) 白井太郎左衛門尉跡トハ上野白井ナルベキカ。

〔御代々御墨付寫〕三 △六、二、六一、

建武二年

三浦時繼

白井某ノ跡

爰ニ御判(足利尊氏ノナルベシ)

下 合屋豊後守頼重、

可令早領知上野國吉田次郎跡事、

右人爲勳功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件

建武二年九月廿七日

梅松論

(前文ハ十月十五日ノ條ニ收ム)

今度兩大將に供奉の人々には信濃常陸の欠所を勳

功の賞に充行るる處に、義貞の討手の大將として關東へ下向のよし風聞しける

間、先義貞の分國上野の守護職を上杉武庫(禪門)に任せらる、是を拜領して用意の

爲に國に下る、(下文ハ十一月十日ノ條ニ收ム)

保曆間記

第五(前文ハ八月二日ノ條ニ收ム)

しかる所に故兵部卿親王の御かとうどの中より、

いひ出しけん、尊氏謀反の心指あるよしざんし申て、新田左兵衛佐義貞をまねき

て、種々のたくみをなし、左中將に申なし、(義貞ノ左中將ニ任ズルハ明年二月八日ニアリ) 上野國は尊氏の

ふん國なるを、義貞に申あたへけり、(眞ヲ誤レル事元弘三年十二月五日ノ條ニテ知ルベシ) 識臣の曲として能

まことを倒にふくみしかば、軍功ある尊氏上洛せば、道にて可誅よしを義貞に仰

す、(下文十月十五日ノ條ニ收ム)

上野吉田
某ノ跡

義貞東下
ノ由風聞
上野守護
職ヲ上杉
憲房ニ與
フ

義貞ニ對
スル記事
シノ誤甚
ダ

東八ヶ國
管領勅許
義貞帝ヲ
恨ムトノ
説

足利征夷
將軍

東八箇國
管領
新田一族
ノ所領ヲ
諸將ニ恩
給ス

足利一族
ノ所領ヲ
義貞家人
ニ宛行フ
新田足利
ノ確執

〔七卷册子〕

尊氏卿東八ヶ國管領ノコト勅許ナルノ間、上野國モ尊氏卿分國ナリ、上野ハ去々年ステニ新田左衛督ニ賜ノ所ナルユヘ、義貞帝ヲ恨奉リ野心アリト云々、

〔参考太平記〕

卷第十四

尊氏義貞確執奏狀附公卿僉議事

サル程ニ足利宰相尊氏卿ハ、相摸次郎時行ヲ對治シテ、東國懸テ靜謐シムレハ、勅

約ノ上ハ何ノ仔細カ有ヘキトテ、イマタ宣旨ヲモ下サレサルニ、押テ足利征夷將

軍ト申ケル、(東八箇國管領ノ事ハ第十三卷下ノ所ニ記サレ) 今度宮根相摸河ニテ

合戦ノ時、忠アル輩ニ恩賞ヲ行ハル、先立テ新田一族共拜領シタル東國ノ所領共

ヲ、悉關所ニ成シテ、

○今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、武藏、相摸、上總金勝院本、下總院本ニ

院本不載、西源院本作下野、新田一族先立テ拜領シタルヲ、皆關所ニ成、云々、

給人ヲソ附ラレケル、義貞朝臣是ヲ聞テ安カラヌ事ニ思ハレケレハ、其替ニ我分

國越後、上野、駿河、播磨ナトニ、足利一族共ノ知行ノ庄園ヲ押ヘテ、家人共ニソ行ハ

レケル、是ニ依テ新田足利中惡成テ、國々ノ確執休時ナシ、(下文元弘三年五月ノ條ニ收ム)

十月十日 義貞受領タル越後國衙、同國奥山莊荒居以下ノ村々ノ事ニ

ツキ、海老名忠文ノ訴ニ依リテ、和田又四郎ヲ召換ス。

〔三浦文書〕(前羽) △六二六三四

海老名又太郎忠文申、奥山莊荒居以下村々事、爲有其沙汰、來十三日以前可被相對(參カ)事及遲引者、無敍用之旨、可注申之由候也、仍執達如件、

建武二年十月十日

沙彌(花押)

和田又四郎殿

十月十五日 是頃(九月十日)、勅使中院具光東下シテ東國靜謐ノ事ヲ嘉シ、將士ノ賞ハ朝廷ニ於テ行ハル、ベキヲ傳へ、尊氏ノ上京ヲ促ス。尊氏黨、公家及義貞ニ隱謀アリト稱シテ、召ニ應ゼズ。第ヲ幕府ノ舊址ニ造リ、是日、尊氏之ニ徙ル。

〔梅松論〕(前文ハ八月二日ノ條ニ收ム)

京都よりは人々、親類を使者として東夷誅伐を各賀し申さる、又勅使中院藏人頭中將具光朝臣、關東に下着し、今度東國の逆浪速にせいひつする事、叡威再三也、但軍兵の賞にをいては京都にをいて倫旨を以宛行(イ)るべきなり、先早々に歸洛あるべしとなり、勅答には大御所急ぎ參るべきよし御申有ける所に、下御所仰られけるは、御上洛然るべからず候、其故は相模守高時滅亡し

直義歸洛ヲ停ム

勅使東下諸將ノ恩賞ハ倫旨ヲ以テナスト傳フ

公家並ニ義貞ノ隱謀ヲ口上洛セシメズ

鎌倉ニ邸ヲ構フ

て天下一統になる事は併、御武威によれり、しかれば頻年京都に御座有し時、公家并義貞隱謀度度に及といへども、御運によつて今に安全なり、たま〜大敵の中をのがれて關東に御座可然旨を以、堅いさめ御申有けるによつて、御上洛をとゞめられて若宮小路の代々將軍家の舊跡に御所を造られしかば、師直以下の諸大名屋形、軒をならべける程に、鎌倉の魅を誠に見出度ぞ覺えし、(下文ハ九月廿七日ノ條ニ收ム)〔保曆間記〕第五(上文ハ九月二十七日ノ條ニ收ム) かるがゆへに藏人中將源のともみつ、勅使として尊氏をめさる、關東の諸勢をば直義につけ置候て、一身いそぎはせ參べしと云々、將軍勅定に應じ上洛する所に、京都より内々此事をつげ申ける人有けるにや、直義も東國の侍も、不審に思ひとゞめければ、上洛はのびにける、(下文十一月十日ノ條ニ收ム)〔吉野御事書案〕(錦小路殿ヨリ御返事) 又建武に諷方の時、繼反逆の時、將軍身づから發向して、誅戮踵をめぐらさず、度度の大勳今古比類なし、なを先皇佞臣等が讒口によりて、叡慮いさゝか異變あり、仍賊臣を退がために、義兵を起さるゝ處に、叡慮猶彼等を御最員の故に事大變に及き、

〔七卷册子〕

九月中旬尊氏卿隱謀ノ企アルヨシ風聞シキリナリ、十九日中院頭中將具光朝臣勅使トシテ、鎌倉ニ下向ト云々、是今度東國ノ逆亂靜謐ノ條、叡威ア建武二年

リ、但軍兵恩賞ニ於テハ京都ニ於テ倫旨ヲ以テ充行ルヘキナリ、尊氏卿ハ先早々、
歸洛有ヘキヨシ仰下サル、ノヨシ云々、

十月中旬勅使具光卿歸洛サレトモ尊氏上洛セス、巷説種々ナリ、

〔三浦文書〕(前羽) △六、二、六一四

著到 三浦和田四郎兵衛尉茂實

一十月八日、御方違ニ二階堂の東のらうを警固仕畢、

一十月十五日、御所の御わたましに南總門を警固仕畢、

一十月三日、三浦、長澤へ爲與黨人退治、侍所御代官被向候間馳向了、

一十月九日、相模のはんにうへ爲與黨人退治、侍所御代官被向候間馳向了、

右着到如件(建武二年十月廿一日附、高師泰證判)

十一月二日 足利直義、義貞ヲ伐ツヲ名トシテ、檄ヲ諸國ニ飛バシテ將士ヲ招集ス。

〔結城古文書寫有造館本〕 △六、二、六八四、(本條ノ文書以下同ジ)

可被誅伐新田右衛門佐義貞也、相催一族可馳參之狀如件、

建武二年十一月二日

(足利直義)
左馬頭(花押)

二階堂ノ東ノ廊ノ十月十五日新第ニ移ル

那須下野及太郎殿

〔萩藩閔閱録〕五十八、内藤(前同文、長田)次郎左衛門(内藤次郎宛) 〔田代文書〕(筑前同文、田後)代市若宛

〔三刀屋文書〕(諸家文書、纂所收)

可被誅伐新田右衛門佐義貞也、相催一族不日可馳參之狀如件、

建武二年十一月二日

左馬頭(花押)

諏訪部(扶惠)三郎殿

〔廣峯文書〕乾(播磨)前同文、宛名ヲ闕キタレド、(モ廣峯貞長宛ナルベシ)

〔小早河什書〕四、竹原景宗代

可誅伐新田右衛門佐義貞也、相催一族不日可馳參之狀如件、

建武二年十一月二日

左馬頭圓

〔註〕 本文宛名ヲ逸セリ、

〔薩藩舊記〕前集十二、入來院氏文書(平二入道宛)

〔市河文書〕

著到 市河孫十郎近宗

右新田右衛門佐義貞可誅伐之由、自關東就被成下御教書、爲軍忠信州(小笠原)御方

建武二年

三九三

御手令馳參候、仍著到如件

建武二年十一月廿八日

(小笠原貞宗)
承了(花押)

〔飯野八幡社古文書〕坤

著到

陸奥國御家人

式部伊賀左衛門三郎盛光

同伊賀左衛門次郎貞長

同伊賀四郎光重代木田九郎時氏

同式部次郎光俊代小河又次郎時長

右者十一月二日御教書、同十二月二日御催促(佐竹貞綱ノ催促)并廿日令到來之間、相催一族等、同廿

四日所馳參也、仍著到如件

建武二年十二月廿四日

沙彌(花押)

〔古文書類〕

丹波國御家人小河小太郎成春申

建武二年十一月二日、被成下御教書之間、(中略、此下一族ヲ率キテ兵ヲ擧グルコトヲ記セリ)以此旨、可有御披露候、右言上如件

建武三年正月四日

(足利尊氏)
花押

〔毛利文書〕四 毛利元春申狀

建武二年冬、將軍家於關東御一統、就御中違、海道御進發之刻、武田(陸奥)與陸守信武、未爲兵庫助之時、自關東給御教書於安藝國、建武二年十一月(十一月ハ十一月ノ誤)捧御旛於矢野城、令對治熊谷四郎三郎入道蓮覺(前後略)

〔南路志〕

四上 香宗我部軍人所藏

義貞誅罰事、自足利殿被仰下也、早卒一族可被致軍忠之狀如件

建武二年十一月廿日

源義國(花押)

甲斐源四郎入道殿

〔香宗我部記錄〕

香宗我部系圖 △、六二一、五〇四

重通——秀賴甲斐孫四郎、中略建武二年十一月廿日、義貞誅罰之狀一通、是源義國所奉命也

建武二年

三九五

十一月六日 高師泰等、命ヲ天野經顯ニ傳ヘテ、稻村崎ヲ警固セシメ、鎌倉ノ防備ヲ固ム。

〔天野文書前田候〕△六二六八九

鎌倉中入口内稻村崎警固事、一族相共可致嚴密之沙汰、若緩怠者可被處罪科之狀、依仰執達如件、

建武二年十一月六日

散 位花押

尾張權守花押

天野安藝七郎殿(新田)

〔註〕 大日本史料曰、此間鎌倉ノ命令、多ク直義ヨリ出デタリ、本文ノ如キ、亦或ハ

然ランモ、未ダ明確ナラザルヲ以テ、姑ク主名ヲ闕ク、ト。

十一月九日 是ヨリ先、足利尊氏、武藏小泉郷等ヲ岩松經家ノ遺族ニ與フ。是日、之ヲ交付ス。

〔正本文書〕△六二六九〇。

武藏國內矢野伊賀入道善久跡所領事、

合

一所 小泉郷男舍郡内

一所 須江郷比企郡内

一所 片楊郷足立郡内

一所 久米宿在家六間多東郡内

右任御下文(足利尊氏ノ)并御施行之旨、奉打渡岩松兵部大輔經家跡御代官頼圓、定順等候畢、仍渡狀如件、

建武二年十一月九日

橘行貞在判

〔註〕 經家ハ女影原ニ戰死セシコト、七月二十二日ノ條ニ見エタリ、頼圓ハ尊卑分脈ニ據レバ、經家ノ弟ナリ、

十一月十二日 北畠顯家、鎮守府將軍ニ任ゼラル。〔公卿補任〕

十一月十八日 足利尊氏、奏狀ヲ上リテ、義貞ヲ追討センコトヲ請フ。義貞、亦之ニ對シ奏狀ヲ上リテ、尊氏追討ヲ請フ。尊氏ノ謀叛露顯シ、朝廷之ヲ追討スルニ決ス。

〔神皇正統記〕

後醍醐天皇ノ前文八月二日

程なく、東國はしつまりぬ、尊氏望む所達せずして、謀叛をおこすよし聞えける、十一月十日あまりにや、義貞を追討すへきよし、

建武二年

三九七

奏狀を奉る、すなはち打てのほりければ、京中騒動す、(下文十九日ノ條ニ收ム)

〔元弘日記裏書〕 尊氏狀到來、十一月十八日、

〔園太曆〕三十三、延文五、年正月一日條 依兵革警固時、召仰有無事、

建武二年十一月十八日、今夜被仰警固事、上卿侍從中納言公明卿、諸衛右少將藤原行輔朝臣(鳥)一身參入、

〔大乘院日記目錄〕(建武二年) 十月□日、尊氏訴狀到來、十一月□日、義貞申狀到來、

十日、尊氏叛發、十九日、尊氏追討宣下、義貞給之、

〔參考太平記〕(前文ハ元弘三年五月、月是月ノ條ニ收ム) 是ニ依テ、讒口傍ニ有テ、眞ヲ亂ル事多カリケ

ル中ニ、今度尊氏卿相摸次郎時行カ討手ヲ承テ、關東ヲ平ケテ後、隱謀ノ企アル由、
叡聞ニ達シケレハ、主上逆鱗有テ、設其忠功莫大ナリトモ、不義ヲ重ネハ逆臣タル
ヘキ條勿論ナリ、則追伐ノ宜旨ヲ下サルヘシト御憤有ケルヲ、諸卿僉議アリテ、尊
氏カ不義叡聞ニ達ストイヘトモ、イマタ其實ヲ知ラス、罪ノ疑シキヲ以テ、功ノ誠
アルヲ棄ラル、事ハ仁政ニ非スト、親房源師重子、世稱北畠准后、公明藤實子、世稱家子、類ニ諫言ヲ上ラレ
シカハ、金勝院、西源院本等、不載、親房公明諫言、以爲諸卿所奏、サレハ法勝寺ノ慧鎮上人ヲ錄倉ヘ下シ奉、事ノ様ヲ
尋窮ヘキニ定リニケリ、慧鎮上人勅ヲ奉リテ、關東ヘ下ラント欲シ給ヒケル其日、

朝廷ノ慎

尊氏ノ奏

義貞誅罰

義貞ノ義
ハハハハハハ
トツニヨ
ルトナス

尊氏卿、細川阿波守和氏源公頼子ヲ使ニテ、一紙ノ奏狀ヲ捧ラレタリ、元弘日記裏書云、尊氏狀十一月十八日到來、

云々、恐非也、本文下段云、義貞八日爲征伐、尊氏發京、異本或作十九日、按、十八日尊氏奏狀到京、則所謂八日義貞發京者、於理不通、若依異本爲二十九日發京、則尊氏奏狀始至之後、僅一日而發京也、然而義貞亦奏請討尊氏、而後帝命之東征、則恐非一日之事、十九日何由而得發哉、然義貞發京實爲二十九日、說見三子下、據是尊氏奏狀到京者、蓋十月下旬、或十一月之初乎、當與下段并見、其狀曰參議從三位當作三位、按、建武元年正月、尊氏被正三位、下段之、兼武藏守源朝臣尊氏誠恐惶謹言、

請早誅罰義貞朝臣一類、致天下泰平狀、此奏、文義章句、諸本各有異名、今參考諸本、依其是、而改其非、要之、使歸于文路而已、此下義貞之奏亦然之、凡若山門、狀等、並做之、

右謹考往代列聖德于四海、無不賞顯其忠、罰當其罪、若其道違、則纒雖建草創、遂不得守文、肆君子所慎、庸愚所輕也、去元弘之初、東蕃武臣恣振逆威、類無朝憲、禍亂起于茲、國家不獲安、爰尊氏以不肖之身、麾同志之師、自是定死於一途、士運倒戈之志、卜勝於兩端、輩有與義之誠、聿振臂致一戰之日、得勝於瞬目之中、攘敵於京畿之外、此時義貞朝臣、有恣難助之貪心、戮鳥使之急課、其罪大而無所遁身、不獲止軍、起不慮、聞尊氏已於洛陽却逆、徒履虎尾、就魚麗、義貞始以誅朝敵爲名、而其實在窮鼠反嚙、猫聞雀不辭人、期日義貞三戰不得勝、屈而欲守城深壁之處、尊氏長男義詮、爲三歲當作四歲、今云三歲、說註、幼稚大將、起下野國、其威動遠、義卒不招、馳加義貞囊沙背水之謀、一成而大得破敵、是則戰雖在他、功隱在我、而義貞掠上聞、貪抽賞、忘下愚、望太官、世殘賊國、盡害也、不

義貞諱言
ストナス

可不誠焉、今尊氏再爲饋先亡之餘殃、久苦東征之閭、頃佞臣在朝、讒口亂眞、是偏生於義貞、阿黨裏豈非趙高謀、內章邯降楚之謂乎、大逆之基、莫甚於是焉、兆前撥亂、武將所全備也、乾臨幸被下勅許、誅伐彼逆類、將致海內之安靜、不堪懇款之至、尊氏誠惶誠恐、謹言、

建武二年十月日 北條家、金勝院、西源院
本、作建武元年、非也

トソ書レタリケル、此奏狀イマタ内覽ニモ下サレサリケレハ、遍ク知人モナキ處
ニ、義貞朝臣是ヲ傳聞テ、同奏上ヲソ上タリケル、其詞曰、

從四位上行左兵衛督兼播磨守源朝臣義貞 左、北條家、南都本、
作、右恐非也、誠惶誠恐謹言、

請早誅伐逆臣尊氏直義等、狗天下狀

右謹案、當今聖主經緯天地、德光古今、化蓋三五、所以神武搖鋒、端聖文定、宇宙也、爰有源家末流之昆弟、尊氏直義、不恥散木之陋質、直蹈青雲之高官、傍聽其所功、堪拍掌一笑、太平初山川震動、略地拉敵、南有正成、西有圓心、加之四夷蜂起、六軍虎窺、此時尊氏隨東夷命、盡族上洛、潛看官軍乘勝、有意免死、然猶不決、心於一偏、相窺運於兩端之處、名越尾張、守高家、於戰場墮命之後、始與義卒軍丹州、天誅革命之日、忽乘鷓蚌之弊、快爲狼狽之行、若夫非義族約京、高家致死者、尊氏獨把鈇鉞、當強敵乎、退而憶之、渠儂忠

義貞ノ奏
狀

尊氏奏狀
ノ誤謬ヲ
指摘ス
尊氏ノ罪
ヲ數フ
一、謀言
眞ヲ亂ル

二、上聞
ヲ掠ム

三、司ニ
アラズシ
テ法ヲ行
フ
四、僭上
無禮

五、違勅
悖政

六、護良
親王ヲ陷
イル

七、護良
親王ヲ困
ニ苦シ
ム

非彼、須羞愧於亡卒之遺骸、今以功微爵多、類猜義貞忠義、利暢讒口之舌、巧吐浸潤之譖、其愆無不一入邪路、義貞賜朝敵、追罰綸旨、初起于上野者、五月八日也、尊氏附官軍殿攻六波羅者、同月七日也、都鄙相去八百餘里、豈一日中得傳言哉、而義貞聞京洛敵軍破舉旌之由、載于上奏、謀言亂眞、豈不然乎、其罪一、尊氏長男義詮、纒率百餘騎、還入錄倉者、六月三日也、義貞隨百萬騎士、立滅凶黨者、五月二十二日也、而義詮爲三才幼稚之大將、致合戰之由、掠上聞之條、雲泥萬里之差、違何足言哉、其罪二、仲時時益等、敗北之後、尊氏未被勅許、自專京都之法禁、誅親王之卒伍、非可行法、其咎甚以不淺、其罪三、兵革之後、蠻夷未心服、木枝猶不堅根之間、奉下竹苑於東國、已令苦柳營于塞外之處、尊氏誇超涯皇澤、欲興家立威、僭上無禮、罪無所遁、其罪四、前亡餘黨、纒存揚蠅、蠅忿之日、尊氏申賜東八箇國管領、不鈹用以往勅裁、養寇固恩澤、害民事利、欲違勅悖政之逆行、莫甚於茲、其罪五、雖天運循環、無往不復、成敗歸一統、大化傳萬葉、偏出于兵部卿親王智謀、而尊氏構種々讒、遂奉陷流刑、訖讒臣亂國之暴逆、誰不惡之、其罪六、親王贖刑事、爲懲侈歸正而已、古武丁放桐宮、豈非此謂乎、而尊氏奸假宿意、於公議外、奉苦尊體於囹圄中、人面獸心之積惡、是可忍也、孰不可忍也、其罪七、直義朝臣、却於相模次郎時行軍旅、不戰而退、錄倉之時、竊遣使者、奉殺兵部卿親王、其意偏在將傾國家之端、

建武二年

八、護良親王ヲ秋

新田義貞公傳

四〇二

此事雖隱未達、叡聞世之所知、逼界何藏、大逆無道之甚、千古未聞、此類其罪、八、斯八逆者、乾坤且所不容、其身也、若刑措不用者、四維方絕、八柱再傾、可無益噬臍、抑義貞一舉、大軍百戰破堅、萬卒死而不顧、而退逆徒於干戈下、得靜謐於尺寸中、而尊氏附驥尾、超險雲、控彈丸、殺籠鳥、大功所建、孰與綸言所最矣、尊氏漸爲奪天威、憂義士在朝、請誅義貞、此下金勝院本、有義助字、而義貞傾忠、心盡正義、爲朝家輕命、先勾萌、奏罰尊氏、國家用捨、孰與理世安民之政矣、望請乾臨明照、中正加斷、割於昆吾之利、可令誅罰尊氏、直義以下逆黨等之由、下賜宣旨、忽拂浮雲之擁蔽、將耀白日之餘光、義貞誠惶誠恐謹言、

建武二年十月

日金勝院本、作建武元年、西源院本、作建武元年十一月、其非也、十月、毛利家、北條家、南都本、作十一月、爲得、尊氏奏狀十一月到來、由、此見之、義貞奏狀當在十一月、

トソ書レタリケル、則諸卿參列シテ、此事如何有ヘキト、僉議有ケレトモ、大臣ハ祿ヲ重シテ口ヲ閉、小臣ハ聞ヲ憚テ言ヲ出サ、ル處ニ坊門宰相清忠進出テ申サレケルハ、今兩方ノ表奏ヲ披テ、熟一政ノ道理ヲ案スルニ、義貞カ指申處ノ尊氏カ八逆、一々其罰輕カラス、就中兵部卿親王ヲ禁殺シ奉ル由、初テ上聞ニ達ス、此一事申處實ナラハ、尊氏直義等罪責遁レ難シ、但片言ヲ以テ獄ヲ折事、率爾ニ出テ制ストモ止ヘカラス、暫東說ノ實否ヲ待テ、尊氏カ罪科ヲ定ラルヘキカト申サレケレハ、諸卿皆此議ニ同セラレ、其日ノ議定ハ終ニケリ、懸ル處ニ大塔宮ノ御介錯ニ附進

大塔宮ノ秋逆露ル

長袖者ノ長金議スニ日ヲ過ス

尊氏ノ軍勢催促狀

尊良親王東國管領義貞追討ノ大將軍

ラセ給ヒシ、南御方ト申女房、鎌倉ヨリ歸上テ、事ノ様有ノ儘ニ奏シ申サセ給ヒケレハ、サテハ尊氏直義カ叛逆仔細ナカリケリトテ、叡慮更ニ穩ナラス、是ヲコソ不思議ノ事ト思召處ニ、又四國西國ヨリ、足利殿ノ成ル、軍勢催促ノ御教書トテ、數十通進覽ス、是ニ就テ諸卿重テ僉議有テ、此上ハ疑處ニ非ス、急ニ討手ヲ下サルヘシトテ、一宮中務卿親王尊良ヲ、東國ノ御管領ニ成奉リ、新田左兵衛督義貞ヲ大將軍ニ定テ、國々ノ大名共ヲソ添ラレケル、元弘ノ兵亂ノ後、天下一統ニ歸シテ、萬民無事ニ誇トイヘトモ、其弊猶殘テ、四海イマタ安堵ノ思ヒヲ成サル處ニ、此事出來テ、諸國ノ軍勢共催促ニ從ヘハ、コハ如何ナル世ノ中ソヤトテ、安キ意モ無リケリ、

〔梅松論〕

前文九月廿七日ノ條ニ收ム

かゝりしほどに京都伺候の親類代官共はいそぎイナシ京都へ上、關東に忠を存る仁は亦京都より逃下る間、海道上下の輩俄に織綺のごとく、建武二季の秋冬より世上敢て穩かならず、下文二十五日ノ條ニ收ム

十一月十九日 朝廷、足利尊氏追討ノ兵ヲ發ス。即チ、義貞、尊氏追討ノ宣旨ヲ賜リ、上將軍尊良親王ヲ奉ジ、諸國ノ兵ヲ率キテ東海道ヨリ向フ。尋デ二十一日、鼎王、洞院實世等ノ軍、東山道ヨリ向フ。

〔參考太平記〕

卷第十四

義貞爲節度使、附一宮御進發關東事

建武二年

四〇三

義貞ニ節度ヲ下サ

尊良親王

日月ノ御紋

義貞都ヲ發ス

懸ケル程ニ十一月八日今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作二十九日爲得、說見下、新田左兵衛督義貞朝臣、朝敵追罰ノ宣旨ヲ下シ賜テ、兵ヲ召具シ今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、引率三千餘騎云々、參内セラル、馬物具眞ニ爽ニ勢有テ出立レタリ、内辨、外辨、八座、八省、階下ニ陣ヲ張、中儀ノ節會行レテ節度ヲ下サル、治承四年ニ權亮三位中將惟盛ヲ、賴朝追罰ノ爲ニ下サル、時、鈴計給リタリシハ、不吉ノ例ナレハトテ、今度ハ天慶承平ノ例ヲソ追レケル、義貞節度ヲ賜リテ、二條河原ヘ打出テ、先尊氏卿ノ宿所二條高倉ヘ、舟田入道ヲ差向テ、関ノ聲ヲ三度揚サセ流鏑二矢射サセテ、二矢、金勝院本作三矢、中門ノ柱ヲ切落ス、是ハ嘉承三年、當二、讚岐守正盛カ、平正、義親、源義家子、追罰ノ爲ニ出羽國ヘ、流出雲、嘉承二年、勅、平正盛、征討之、天仁元年、義親首傳、京、下リシ時ノ例ナリトソ聞ヘシ、其後一宮中務卿親王五百餘騎ニテ、五百、今出川家、今川家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作三百、河原ヘ打出サセ給ヒタルニ、内裏ヨリ下サレタル錦ノ御旗ヲ差擧タルニ、今出川家、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、錦御旗、白クシタル旗竿ニ附、云々、俄ニ風烈吹テ、金銀ニテ、打附タル日月ノ御紋切テ、地ニ墮タリケルコソ不思議ナレ、毛利家本云、切テ地ニ墮ケルヲ、御旗差ノ泰久武周章テ是ヲ取、云々、是ヲ見ル者、アナ淺マシヤ今度ノ御合戰ハカハカシカラシト、元弘日記裏書、神明鏡云、十一月十九日、尊良親王、義貞東征、而本文作十一月八日、按、下段云、十一月二十五日、矢矧、合戰、由、此見之、十九日發、京者爲得、若爲、八日發、京、則至、二十五日、乃十八日也、自、京至、矢矧、僅六七十里、何思ハヌ者ハ無リケリ、サル程ニ同日午刻ニ、大將新田左兵衛督義貞都ヲ立給

義貞ニ附從ノ軍勢當

由經三十八日乎、當、與、下、段、合、考、云、元弘初ニ、此人サシモノ大敵ヲ亡シテ、忠功人ニタ超リシカトモ、尊氏卿君ニ咫尺シ給フニ依テ、抽賞サマテモ無リシカ、陰德遂ニ顯ハレテ今天下ノ武將ニ備リ給ヒケレハ、當家モ他家モ推並テ、偏執ノ心ヲ失ヒツ、附從ハスト云者無リケリ、先當家ノ一族ニハ、舍弟脇屋右衛門佐義助天正本作治部大輔、本文及諸異本或云、治部大輔、或右衛門佐、左京大夫、前後不一、按、第十五卷自山門還幸段云、義助任右衛門佐、云々、然則此時未爲右衛門佐、蓋追稱之耳、太平記全篇如此之類甚多矣、凡公卿悉備子補任、其以下者、當時受領位等、先後不可悉知、今如三義助等、雖有間出、子本文、逐一不可考、且無益事實、式部大輔義治、堀口義濃守貞滿、綿打刑部少輔金勝院本云、名義昭、里見伊賀守今川家、北條家、南都本云、名時成、下段之、第十八卷里見討死段、金勝院本作貞朝、按、同大膳亮亮、金勝院本云、無三時成貞朝、有伊賀守義成、然義成者、義重孫也、恐非建武中人、未知孰是、

桃井遠江守、鳥山修理亮今川家、北條家、南都本、並云、名經盛、而本文第十七卷作義益、諸本前後不一、

南都本、並別載、同左京亮、而金勝院本亮作進、今川家本云、名家成、按、第十六卷重臨幸山門一段、本文及諸異本、有鳥山左京亮氏賴、而唯金勝院本、作修理亮義俊、第十七卷東宮義貞北國落段、本文及諸異本、又出鳥山修理亮義俊、而金勝院本亮作大夫、凡修理左京、本文及異本、往々舛舛混淆、不可分明也、因通考之、鳥山系圖有左京亮家成、家成父經成、而無義俊、氏賴、經盛、今異本或以修理左京、並出爲二人、則以修理名、作經盛者、蓋經成之謬、即系圖所謂家成之父而、所謂義俊、氏賴、豈亦經成、家成之一名耶、細屋右馬助助、金勝院本作頭、大井田式部大輔按、系圖、名氏經、然未可三確定、姑并書、聊備考耳、

或稱大江田、下段之、凡諸本、大鳥讚岐守、岩松民部大輔今川家、北條家、南都本云、名經家、籠守澤入道、額田掃部助忠、金谷治部少輔金谷、今出川家本作金澤、恐非也、少輔、金勝院本、及第十九卷作大輔、世良田兵庫助、羽川備中守守、金勝院本作前司、一井兵部大輔、堤宮内卿律師金勝院本云、田井藏人大夫天正本、田井作田中、西源院本、作田中兵部大輔、是等ヲ宗徒ノ一族トシテ、末々源氏三十餘人餘、毛利家、北條家、金勝院本、

新田義貞公篇

勝院、西源院、南 其勢都合七千餘騎七千、天正本作三千、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作二千六百 大將ノ前後ニ打圍タリ、他家ノ大名ニハ、千葉介貞胤、宇都宮治部大輔公綱、菊池肥後守武重、大友左近將監按、名貞載、近江守貞宗子也、厚東駿河守、大内新介、佐々木鹽治判官高貞、同加治源太左衛門、熱田攝津大宮司毛利家、西源院本云、名昌愛曾伊勢三郎、遠山加藤五郎、武田甲斐守、小笠原信濃守、高山遠江守、河越三河守、兒玉庄左衛門、杉原下總守、都本、作在原、高田薩摩守義遠、藤田三郎左衛門金勝院本、無三田字、難波備前守、田中三郎右衛門今川家、北條家、南都本、田中作田井、金勝院、西源院、北條家、南都本、右作左、舟田入道、同長門守、由良三郎左衛門、同美作守北條家本、美濃守、長濱六郎左衛門、金勝院、南都本、別載美濃守、大尉 山上六郎左衛門六、金勝院本作七、西源院本作次、波多野三郎金勝院本云、名宗昌、西源院本作信道、按、諸本第二卷、有波多野上野前司宣通、然則三郎恐非字、高梨、小國、河内、池、風間、山徒ニハ、道場坊助註記祐覺本文道場坊下、漏三五、字、今依異本補之、

○金勝院本載大井田新藏人大夫、加々見大和守、山口、石田、土岐、彈正少弼按、土岐氏、出子下可疑、逸見左近將監、小笠原左衛門大夫、○今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、載葛貫大勝亮、

是等ヲ宗徒ノ兵トシテ、諸國ノ大名三百二十餘人餘、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作三、其勢都合六萬七千餘騎六萬、天正、前陣已ニ尾張熱田ニ著ケレハ、後陣ハイマタ相坂關四宮河原本、作三萬、東山道ノ勢ハ、搦手ナレハ、大將二三日引下リテ都ヲ立ケリ、其大將ニハ

東山道軍先大智院

彈正尹宮洞院實世

江田行義大館左京大夫氏明

大井城

北畠顯家トノ合圖

先大智院宮、彈正尹宮按、彈正尹宮、名忠房、源彦仁子、胤、洞院左衛門督實世、持明院兵衛督入道、道應、園中將基隆、中納言、二條中將、北條家、西源院、爲冬、當作爲次、毛利家、北條家、西源院、南都本、作少將、本、作爲次、金勝院本作爲繼、按、爲冬、此下箱根竹下合戰段、從中務卿宮二戰死、爲次者第十五卷正月二十七日合戰段、從大智院宮、至東坂本、由是見之、此作爲冬者、恐訛、而爲次系圖不詳、爲次爲繼、末知是非、爲冬、權大納言藤爲世子也、侍大將ニハ、江田修理亮行義、大館左京大夫氏義當作氏明、大館家譜無氏義、島津上總入道金勝院本云、名義淳、而第十五卷作了光、可并同筑後前司、同、毛利家、西源院、天正本、作、櫻庭、石谷、猿子、落合、仁科毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、有入道字、高梨毛利家、北條家、西源院、南都本、有九郎、高梨源院、南都本云、高梨左近將監、金勝院、志賀、出納言、眞壁十郎、小田字、美濃權介助重、助重、金勝院本作諸枝、諸本第十六卷作助重、或作、佐重金勝院本又載、設樂、瀧口、志賀樂木、御木七郎、岡崎五郎、是等ヲ宗徒ノ侍トシテ、其勢都合五千餘騎、五千、今川家、毛利家、南都本、作六千、黑田宿ヨリ東山道ヲ經テ、信濃國ヘ入ケレハ、當國國司堀河中納言毛利家、名光繼、非也、北條家、南都本、作光繼、爲得、光繼參議光泰子也、按、公卿補任、二千餘騎ニテ、北條家、金勝院、西源院、建武二年、光繼爲參議信濃守、至三年五月、任中納言、蓋追稱耳、餘皆倣之、大井城ヲ攻落シテ、同時ニ鎌倉ヘ寄ント、大手ノ相圖ヲソ待タリケリ、(下文二十五日條ニ收ム)

〔參考太平記〕卷第十五、北畠顯家 去年二年、建武十一月ニ、義貞朝臣討手ノ大將承テ、關東ヘ下向セラレシ時、奥州國司北畠中納言顯家卿ノ親房子、方ヘ、合圖ノ時ヲ違ヘ、ス攻合スヘキ由、編旨ヲ下サレタリケルカ、大軍ヲ起ス事、容易カラサル間、兎角延

建武二年

引ス、

〔保曆間記〕

〔前文尊氏ヲ召セドモ應ゼザリシ事〕
その時さればこそ謀反の心ざし彌

有よし、かさねてざんし申によつて、討手を被下けり、上將には中務親皇主上の宮、公

卿殿上人其外武士には義貞を大將として、さるべきさふらひ、在京の武士、西國畿

内の勢、數十萬騎發向す、奥州よりは顯家卿後詰として、せめのぼるべきよし宣下

せられけり、〔下文十二月五日 日條ニ收ム〕

〔元弘日記裏書〕

建武二年十一月十九日、尊良親王以下東征、

〔大乘院日記目錄一〕

十九日、尊氏追討宣下、義貞給之、一宮、中務親王尊良

將殿、信濃勢以下七萬騎出陣、

〔神皇正統記〕〔後醍醐天皇ノ條ニ收ム〕 追討のために、中務卿尊良親王を上將軍といひ

て、さるへき人ノもあまたつかはさる、武家には義貞の朝臣をはしめて、おほく

の兵を下されしに、十二月に官軍引しりそきぬ、

十一月二十二日 足利尊氏追討ノ綸旨、諸族ニ發セラレ、兵ヲ率斗テ鎌

倉ニ赴カン事ヲ命ズ。又、鞍馬寺衆徒ヲシテ、其近傍ヲ警固セシム。

顯家後詰

松浦運賀

〔松浦文書〕

〔前肥〕 △、六、二、七、二、三、(不條ノ文書ハ以下同ジ)

足利尊氏、同直義已下輩、有反逆之企之間、所^{〔略〕}誅罰也、松浦小二郎入道運賀、〔相知〕令

發向鎌倉、可致軍忠者、天氣如此、悉之、

十一月廿二日

右中將〔花押〕〔下ニ右中將トアル 花押ハ皆之ニ同ジ〕

大島通秀

〔來島文書〕

〔前筑〕〔前同文、大島次郎通秀宛催促〕

〔阿蘇文書〕

相催一族、發向鎌倉、可致合戰之忠、歸參之時、別可被行勸賞之由、所被仰下也、悉之以

狀、

十一月廿二日

〔花押〕

阿蘇大宮司館

宇治惟直

上島惟頼

足利尊氏、同直義以下之輩、有反逆之企之間、所被誅罰也、上島彦八郎惟頼、令發向鎌

倉、可致軍忠者、天氣如此、悉之、

右中將〔花押〕

上田時貞

〔上田文書〕

〔前豊〕〔略前同文、上田左衛門尉時貞〕

〔阿蘇文書〕

〔前略〕〔略前同文、阿蘇前大宮司惟時宛催促、十一月廿五日附〕

建武二年

四〇九

針原久兼
都野信保
大友能長

〔薩藩舊記〕前集十二、入來（略前同文、大膳大夫奉、針原孫二）

〔萩藩閥閥録〕八十五、都野（略前同文、右中將奉、都野又五郎）

〔志賀文書〕（後）（略前同文、大友志賀藏人太郎）

〔鞍馬寺文書〕（山）

足利尊氏、同直義已下輩、有反逆之企之間、所被追討也、可警固當寺近邊要害所々者、天氣如此、悉之以狀、

十一月廿八日

右中將（花押）

鞍馬寺衆

鞍馬寺衆徒御中

十一月二十五日 高師泰ノ率キル足利軍、既ニ三河矢矧川ニ進出ス。是日、義貞ノ軍、川ノ西岸ニ着シ、兩軍戰フコト三日、官軍利ヲ獲テ敵ヲ追撃シ、更ニ遠江鷺坂、駿河今見ニ賊ヲ破リテ進撃ス。

〔多田院文書〕（影本）△六、二七三、八、

攝津國多田院御家人高橋彦六茂宗申軍忠事、

右去年建武二十一年十一月廿五日、馳參三州矢作河、（碧海郡）屬于足利上總五郎入道殿

（上總介吉良貞義ノ子滿義ヲ、上總三郎ト稱）御手、致合戰、同廿七日渡河、致散々戰、抽軍忠訖、

三河矢作河ノ戰

手越河原ノ戰

同十二月遠江國國府、上野（以上豊田郡）駿州手越河原、（有渡郡）宮根山御合戰、致忠節者也、自其路次御供令勤仕、當年建武二正月、江州勢田、宇治、京都、打出、西宮、御合戰、仁舘軍忠、將又自鎮西御歸洛後者、攝津國吹田、（鳥下郡）河内國洞手向御供仕、致合戰、忠訖、同廿七日、宇治路木幡御合戰、致忠、同晦日、竹田河原御合戰之時、分捕二人仕、致拔群忠畢、同七月二十三日、醍醐寺御合戰、仁御供仕、責落御敵、燒數箇所城、致軍忠、同八月二十二日、山科御發向之間、御共仕、於四宮河原合戰、抽忠節、同二十三日、御敵阿彌陀峯仁取陣間、同日馳向新日吉、致合戰、軍忠、同二十五日、御合戰之時、搦手山科御向之間、御供仕、合戰至極、同日於祇園門前、御敵行合、致散々戰、訖、同九月十四日、宇治御向之間、御供仕、當役所、令勤□候畢、所詮茂宗御合戰、每度於御前、抽拔群軍忠之條、御見知之者、（上段カ）爲下賜御證判、恐々言上如件、

建武二年月日

〔梅松論〕（前文ハ十八日ノ條ニ收ム）去程に數萬騎の官軍關東に下向するよし聞えければ、

高越後守を大將として大勢を差添て海道へ遣さる、師泰に仰られけるは、先三河國に下て矢作川を前にあて、御分國たる間、駈催して當國の軍勢を相待べし、努々川より西へ馬を越べからずと將軍の命を請て當所に陣を取處に、爰に義貞大勢

建武二年

四一一

高師泰

矢作川

にて河の西の岸に陣を取、兩三日相支て雌雄いまだ決ざる處に、東士三手に分て、まづ上下の手は河を渡りて、西の岸にをいて火をちらして相戦ければ、イども中の手は西陣共に進ざりけるに、剩中の手義貞の陣より堀口大炊介と云ける者乗出、四角八方を討てめぐり、武略を盡して戦ける、西の陣より河をわたして合戦難義に及ける間、師泰引退て、其後遠江の鷲坂、駿河の今見村にをいて相支といへども、爰も防ぎがたかりければ、(下文十二月五日)

〔大乘院日記目録〕(月十一)

廿三日、直義朝臣以下自録倉責上、六千餘騎

廿七日、於三河國八橋々東之宿、廿六日失合云々

〔瑠璃山年録殘編〕上 十一月二十四日新田殿下ヲ八橋ニテ合戦畢、

〔參考太平記〕卷第(前文十九日)十四(ノ條ニ收ム) 討手ノ大勢已ニ京ヲ立ヌト、録倉へ告ケル人多

ケレハ、左馬頭直義、仁木金勝院本細川、高、上杉ノ人々、將軍ノ御前へ參シテ、已ニ御一

家ヲ傾申サレン爲ニ、義貞ヲ大將ニテ、東海東山ノ兩道ヨリ攻下候ナル、敵ニ難所

ヲ越ラレナハ、防戦フトモ甲斐有マシ、急キ矢矧薩埵山ノ邊ニ馳向テ、御支候ヘカ

シト申サレケレハ、尊氏卿默然トシテ暫ハ物モ宜ハス、良有テ我普代弓箭ノ家ニ

生レ、僅ニ源氏ノ名ヲ殘ストイヘトモ、承久以來相摸守カ願命ニ隨テ、家ヲ汚シ名ヲ羞カシムル恨ヲ積タリシヲ、今度絶タルヲ繼、職征夷將軍ノ望ヲ達シ、廢タルヲ興シ、位正印本誤作三從上、今改之、三品ヲ極ム、是臣カ微功ニ依トイヘトモ、豈君ノ厚恩ニ非ヤ、恩ヲ戴テ忘ル、事ハ、人タル者ノセサル所ナリ、抑今君ノ逆鱗アル處ハ、兵部卿親王ヲ失ヒ奉リタルト、諸國へ軍勢催促ノ御教書ヲ下シタルト云、兩條ノ御咎メナリ、是一モ尊氏所爲ニ非ス、此條々謹テ事ノ仔細ヲ陳シ申サハ、虛名遂ニ消テ、逆鱗ナトカ靜マラセ給ハサラン、旁ハ兎モ角モ身ノ進退ヲ計ヒ給ヘ、尊氏ニ於テハ、君ニ向ヒ奉リテ、弓ヲ控矢ヲ放ツ事有ヘカラス、サテモ猶罪科遁ル、所ナクハ、剃髮染衣ノ貌ニモ成テ、君ノ御爲ニ不忠ヲ存セサル處ヲ、子孫ノ爲ニ殘スヘシト、氣色ヲ損シテ宜モハテス、後ノ障子ヲ引立テ、内ヘソ入給ヒケル、懸リシカハ、甲冑ヲ帶シテ參聚タル人々、皆興ヲ醒シテ退出シ、思ヒノ外ナル事カナト、耳語カヌ者ソ無リケル、角テ一兩日ヲ過ケル處ニ、討手ノ大將、一宮ヲ始進ラセテ、新田ノ人々、三河遠江マテ近ツキヌト、騒キケレハ、按、義貞發京者、十九日也、直義發鎌倉者、二十日也、或作二十三日、因九日發京、則無二十日到三河之理、是蓋當時鎌倉之浮說耳、而考之、今云、直義聞義貞到三河遠江、而後發鎌倉者、恐非也、義貞十

將軍ノ仰モサル事ナレトモ、今ノ如ク公家一統ノ御代トナランニハ、天下ノ武士ハ、指タル事モナキ京家ノ人々ニ附順テ、只奴婢僕從ノ如クナルヘシ、是諸國ノ地頭御家人ノ心ニ憤リ、望ヲ失フトイヘトモ、今マテ武家ノ棟梁ト成ヌヘキ人ナキニ因テ、心ナラス公家ニ相從フ者ナリ、サレハ此時御一家ノ中ニ、思召立御事アリト聞タランニ、誰カ馳參ラテ候ヘキ、是コソ當家ノ御運開カルヘキ初ニテ候ヘ、將軍モ一往理ノ推所ヲ以テ、個様ニ仰候トモ、實ニ御身ノ上ニ禍來ラハ、ヨモサテハ御座候ハシ、鬼ヤセマシ角ヤ有ヘキト長僉議シテ、敵ニ難所ヲ越レナハ、後悔ストモ益アルマシ、將軍ヲハ、鎌倉ニ殘シ留メ奉リテ、左馬頭殿御向候ヘ、我等面々ニ御供仕テ、伊豆駿河邊ニ相支ヘ合戰仕テ、運ノ程ヲ見候ハント申サレケレハ、左馬頭直義朝臣斜ナラス喜テ、聽テ鎌倉ヲ打立テ、夜ヲ日ニ繼テ急カレケリ、直義發鎌倉ニ事論、有異、詳註ニ相從フ人々ニハ、吉良左兵衛尉左、毛利家、北條家、南都本、作、右、尉、毛利家、北條家、於下段、可合考、同三河守、子息三河三郎、石堂入道今川家、北條家、南都本、及、川家、北條家、南都本、及、系圖云、名滿義、按、貞義子、同右馬頭毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作、修理亮、系圖作、左馬助、義基右馬頭、混雜難明、諸本亦前後矛盾、因隨其、桃井修理亮亮、金勝院本、作、大夫、系圖、及、本文、第、右馬頭、姑并、存異同、不、敢、一、定、今、無、所、考、證、上杉伊豆守今川家、北條家、南都本、及、系圖云、名重、同、民部大輔、云、今川家、北條家、南都本、及、系圖、按、憲房子、重能弟也、

直義以下
應戰ニ決ス

岩松頼有

守顯氏天正本陸奥守作、兵部、按、頼貞子、同刑部大輔頼春子、頼貞子也、毛利家、西源院前司、而、並、不、名、北條家、同式部大輔繁氏系圖云、顯氏子也、毛利家、西源院南都本、作、伊豆守清氏、左、北條家、南都本、作、右、非也、毛利家、北條家、金勝院、西源院、國子、同宮内少輔毛利家、西源院本、作、大輔、足利尾張右馬頭高經北條家、金勝院、西源院、南都本、作、也、舍弟式部大輔時家金勝院、西源院本、作、伊豫守、非也、北條家、南都本、作、伊豫守、家兼、爲、得、按、系圖、家兼、初名時家、爲、式部丞、伊豫守、而、第、十九、卷、有、異、說、可、并、見、都本、作、越後守、天正本作、三郎、太郎、按、頼章者、義勝子、初號、三郎、太郎、左京大夫、舍弟二郎義長二郎、毛利家、北條家、西源院本、稱、義勝、蓋、皆、追稱、未、必、合、當、時、之、稱、故、前、後、不、一、此、類、甚、多、皆、倣、之、今川修理亮、岩松禪師頼有西源院本作、前司、金勝院本作、高武藏守師直、越後守師泰、同豐前守北條家、南都本、云、名師重、考、久、傍書云、改、師重、本文第十六卷、第十七卷、亦作、師重、按、父子同名、南部遠江守、西源院、南都、天正本、作、南、爲、絕無、其理、蓋、太平記偶訛、而系圖因傳訛乎、今、不、可、考、定、餘、皆、倣、之、南部遠江守南部、毛利家、北條家、金勝院、得、下、倣、之、今川家、北條家、南都本、云、名宗繼、金勝院本作、武具、非也、第十六卷、南、有、三、南、遠、江、守、宗繼、按、系圖、南、賴、基子、有、三、惟、清、惟、宗、清子、有、三、遠、江、守、定繼、而、惟、宗、子、亦、有、三、惟、清、及、遠、江、守、宗繼、未、知、適、從、恐、系圖、亦、有、三、差、誤、矣、無、所、考、訂、同備前守金勝院本不出、今川家、北條家、南都本、云、名師幸、師幸、師信子、同駿河守今川家、北條家、南都本、云、名重茂、恐、非、也、按、重茂者、高、大、和、守、也、駿、河、守、大高伊豫守金勝院本、云、名孝元、外様ノ大名ニハ、小山判官天正本作、今、大、丸、梅、名師茂、師直弟也、松論作、常、大、丸、下、倣、之、按、小山判官秀朝、死、於、時、行、之、難、今、大、丸、蓋、其、子、也、

佐々木佐渡判官入道道譽、舍弟五郎左衛門尉名貞、三浦因幡守按、初名貞明、後改、貞、土岐彈正少弼頼遠金勝院、西源院、南都本、不、載、舍弟道謙毛利家本不出、金勝院、按、安藝守時明子也、遠江守入道、相繼、佐竹左馬頭義敦左、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作、右、爲、得、金勝院、源院、南都本、作、土、岐、入、道、源、院、下、倣、之、按、系圖、頼遠弟頼明、道世法名道謙、號、周、濟、房、云々、或頼明道謙並、爲、三、人、云、道謙、宮内卿、律師、云々、頼明、兵庫頭、道世、號、周、濟、房、云々、然、則、一、書、矛盾、未、知、採、擇、因、并、存、疑、宇都宮

義子 舍弟常陸介義春金勝院、西源院本、不載、小田中務大輔、武田甲斐守按、武田甲斐守、既屬義貞、出子、又出子此、者可疑、河

越三河守金勝院本云、名時弘、按、河越三河守、狩野新介、高坂七郎、松田、河村、土肥、土屋、坂東八

平氏武藏七黨ヲ始トシテ、其勢二十萬七千餘騎七、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、及神明鏡作レ六、十一月

二十日毛利家、北條家、西源院、南都本、及神明鏡作レ二、十三日、未レ知、孰是、金勝院本作レ三日、非也、鎌倉ヲ打立テ、同二十四日毛利家、金勝院、西源院本、及神明鏡作レ二

十七日、北條家、南都本、作レ二十五日、參河國矢矧東ノ宿ニ著ニケリ、

矢矧鷲坂手越河原合戰事

サル程ニ十一月二十五日毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作レ二十六日、按、毛利家、金勝院、西源院本上段云、二十七日直義至、矢矧、而今云、二十六日矢矧合戰者、大龜、櫻雲記作レ

二十日、卯刻ニ新田左兵衛督義貞、脇屋右衛門佐義助、六萬餘騎ニテ、矢矧川ニ推寄敵

ノ陣ヲ見渡セハ、其勢二三十萬騎モ有ラント覺敷テ、河ヨリ東橋ノ上下三十餘町

ニ打圍ミテ、雲霞ノ如ニ充滿タリ、左兵衛督義貞、長濱六郎左衛門尉ヲ呼テ、此河何

クカ渡リツヘキ所アル、委シク見テ參レト宣ケレハ、長濱六郎左衛門、只一騎河ノ

上下ヲ打廻リ、驍テ馳歸テ申ケルハ、此河ノ様ヲ見候ニ、渡ツヘキ所ハ三箇所候ヘ

トモ、向ノ岸高シテ屏風ヲ立タルカ如クナルニ、敵鎌ヲ汰テ支テ候、サレハ此方ヨ

リ渡シテハ中々、敵ニ利ヲ得ラレント存候、只姑ク河原面ニ御控候テ敵ヲ欺カレ

ハ、定テ河ヲ渡シテ懸リ候ハンスラン、其時相懸ニ懸リテ、河中ヘ敵ヲ追テ手痛

矢矧ニ着

義貞矢矧ニ着

長濱六郎右衛門

足利軍渡河シテ懸

ク當ル程ナラハ、ナトカ勝事ヲ、一戰ニ得テハ候ヘキト申ケレハ、

○今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本並云、長濱申ケルハ、敵定テ河ヲ渡

テ懸リ候ハンスラン、其時御方一足モ引ス、相懸ニ懸リテ河中ヘ敵ヲオビキ、

大勢ヲ二三度手痛當ル程ナラハ、敵堪兼テ本陣ヘ引カヘサン時、御方六萬餘騎

轡ヲ竝テ、敵ニ追スカフテ河ヲ渡シテ、喚テカ、ル程ナラハ、勝事ヲ一戰ノ中ニ

得ツト存候ト申、云々、下同、本文

諸卒皆此議ニ同シテ、態敵ニ河ヲ渡サセント、河原面ニ馬ノ懸場ヲ殘シ、西宿ノ端

ニ南北二十餘町ニ控テ、射手ヲ河中ノ洲崎ヘ出シ、遠矢ヲ射サセテソオヒキケル

按ニ違ハス吉良左兵衛佐、土岐彈正少弼頼遠、佐々木佐渡判官入道、彼此其勢六千

餘騎、上ノ瀬ヲ打渡テ、北條家、南都本云、上ノ瀬ニ箇所ヲ渡ス、云々、義貞、左將軍、堀口、桃井、山名、里見ノ人々ニ打

テ懸ル、官軍五千餘騎相懸リニ懸リテ互ニ命ヲ惜マス、火ヲ散シテ攻戰フ、吉良左

兵衛佐今川家、北條家、南都本、載、土岐、佐々木、兵三百餘騎討レテ本陣ヘ引退ケハ、官軍モ二百餘騎ソ討レ

ケル、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、二百騎討レテ大將ノ後ニ引退、云々、二番ニハ高武藏守師直、越後守師泰、二萬餘

騎ニテ、橋ヨリ下ノ瀬ヲ渡シテ、義貞ノ右將軍、大島、額田、籠澤、岩松カ勢ニ打テ懸ル、

官軍七千餘騎喚テ真中ニ懸入テ、東西南北ヘ懸散シ、半時許ソ揉合ケル、高家ノ兵

栗生 篠原 名張

足利軍退 鷹坂ノ陣

又五百餘騎討レテ、又本陣へ引退ク、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、三番ニ仁木、細川、今川、石堂一萬餘騎下ノ瀬ヲ渡シテ、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、官軍ノ總大將新田義貞ニ打テ懸ケリ、義貞ハ兼テヨリ馬廻リニ、勝レタル兵ヲ七千餘騎圍マセテ、栗生、篠塚、名張八郎トテ、天下ニ名ヲ得タル大力ヲ眞先ニ進マセ、八尺餘ノ金棒ニ、帖楯ノ廣ク厚キヲツ、キ雙縱敵懸ルトモ諷ニ懸ヘカラス、敵引トモシトロニ追ヘカラス、懸寄テハ切テ落セ、中ヲ破ントセハ、馬ヲ透間モナク打寄テ轡ヲ雙ヨ、一足モ敵ニハ進ムトモ、退ク心有ヘカラスト、諸軍ヲ諫テ下知セラレケル、敵一萬餘騎、陰ニ閉テ圍マントスレトモ、陽ニ開テ懸亂サントスレトモ、敢テ亂レズ、懸入テハ討セ、破テ通レハ切テ落サレ、少モ漂ハス戰ケル間、人馬共ニ氣疲レテ左右ニ分テ控タル處ニ、總大將義貞、副將軍義助、七千餘騎ニテ、香象ノ波ヲ蹈テ大海ヲ渡ルラン勢ノ如ク、閑ニ馬ヲ歩マセ鋒ヲ雙テ進ミケル間、敵一萬餘騎其勢ニ辟易シテ、河ヨリ向ヘ引退、其勢若干討レニケリ、今川家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、敵五退、此勢モ又五百餘騎河ヲ渡サントテ、川中川岸ニテ三百餘騎討レケル、云々、日已ニ暮ケレハ、合戰ハ明日ニテソ有ンスラント、録倉勢皆河ヨリ東ニ陣ヲ取テ居ケルカ、如何思ヒケン、爰ニテハ叶ハシトテ、其夜院本作ニ夜半矢矧ヲ引退、鷹坂ニ陣ヲソ取タリケル、懸ル處ニ宇都宮、仁科、愛曾伊勢守、熱

手越ノ陣

義貞ノ感 狀

田攝津大宮司、後馳ニテ三千餘騎、義貞ノ陣ニ著タリケルカ、矢矧ノ合戰ニ合サル事ヲ無念ニ思ヒテ、打寄ルト均シク、鷹坂ヘ推寄テ、矢一ヲモ射ス、拔連テ攻タリケル、引立タル鎌倉勢、鷹坂ヲモ又破ラレテ、立足モナク引ケルカ、左馬頭直義朝臣ノ兵二萬餘騎、新手ニテ馳屬タリ、敗軍是ニカヲ得テ、手越ニ陣ヲソ取タリケル、西源院本云、十二月朔日、敗軍ノ御方ヲ助ン爲ニ、直義師直三十萬騎、手越ニ著ハ、鎌倉勢力ヲ得テ引留ル、云々、梅松論云、初、尊氏使テ高師泰防、義貞於矢矧ニ而屢爲義貞所破、由此十二月二日直義來救、云々、此說與西源院本同、然諸本上段云、直義率諸將、十一月二十日發鎌倉、二十四日至矢矧、二十五日與義貞戰、敗而退、於鷹坂、又爲所破、時直義之兵二萬來加、云々、與西源院本、梅松論不同、梅松論出子下、可ニ合考、（下文十二月五日）

〔幕府諸家系譜〕 與津 △六、二、七四八

秀盛 與津大膳亮、與津兵衛尉、後二條院武者所

氏次 與津所二郎、仕尊氏、建武二年十一月三、於三州矢矧戰死、泰秀 與津所太郎

〔平氏大須賀君島系譜〕 (常陸遣) △(同) 前)

成胤 左衛門尉、胤時 正六位、備中守、十郎、建武二年乙亥十一月、於三州矢矧合戰有功、母者三浦平行泰、功依之新田義貞賜感狀等

富高 岡本信濃守

十一月二十六日 朝廷、足利尊氏、直義ノ官爵ヲ削ル。〔公卿補佐〕〔足利家官位記〕〔續史愚抄〕

十一月二十六日⁽¹⁾ 新田義顯、大將トシテ、諸將ト共ニ京都ニ殘リ守ル。細川定禪、讚岐鷺田莊ニ據リテ叛ス。飽浦信胤・田中信高等、備中福山城ニ據リテ定禪ニ應ジ、兒島高德等ノ官軍ト戰フ。越中守護普門利清亦叛ス。凶徒諸國ニ蜂起ス。

〔參考太平記〕⁽²⁾ (貞隆洛ノ條ニ收ム) (石動山由來) (能登) (尊卑分脈) (村上源氏中院) 十一月二十六日⁽²⁾ 足利直義、伊豆三島社神官ニ祈禱ヲ託ス。

〔三島神社文書〕(乾伊) △六、二、七五六、

祈禱事於當社可致精誠之狀如件

建武二年十一月廿六日

(足利直義)
(花押)

三島宮大夫殿

十二月二日 武田信武、直義等ノ發シタル義貞追討ノ檄ニ應ジテ安藝ニ舉兵ス。是日ヨリ數日間ニ、邊見・波多野・周防・吉河等附近ノ諸族、旗下ニ集ル。尋デ、熊谷蓮覺ヲ安藝矢野城ニ攻ム。

〔小早川什書〕^六 △六、二、八四二

爲誅伐新田右衛門佐義貞、逸見四郎源有朝馳參御方候、以此旨可有御披露候、恐惶

謹言、

建武貳年十二月二日

源有朝

進上 御奉行所

(武田信武)
承了(花押)

〔黃薇古簡集〕^一 △六、二、八四三、

武田甲斐守殿(信武)一見狀 于時兵庫助殿

爲誅伐新田右衛門佐義貞、伊勢國眞弓御厨地頭波多野彦八郎景氏馳參御方候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武貳年十二月三日

藤原景氏

進上 御奉行所

承了(在判)

〔吉川家什書〕^十 △六、二、八四五、

著到

爲誅伐新田右衛門佐義貞、宮莊地頭周防次郎四郎親家馳參御方候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武二年

四二一

建武二年十二月五日

藤原親家 判裏

進上 御奉行所

備武 承了 判

〔吉川家什書〕

三 十△六二八四五

爲誅伐新田右衛門佐義貞、吉河三郎師平、今月七日馳參御方候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

藤原師平 判裏

建武二年十二月七日

進上 御奉行所

備武 承了 判

〔吉川家什書〕

八 十△六二八四六

安藝國大朝本莊一分地頭吉河三郎師平子息吉二郎經朝申、

爲誅伐新田右衛門佐義貞、去年建武十二月七日馳參御方、同廿四日誅伐熊谷四郎三郎入道蓮覺之時、押寄矢野城、致毎日合戰之忠、同廿六日大手懸先、打破木戸之處、師平打死仕候畢、此等次第御實檢之上者、早預御判、可備後日龜鏡候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

足利黨熊谷蓮覺ノ攻ム矢野城ヲ

建武三年五月十日

藤原經朝 判裏

進上 御奉行所

備武 承了 判

十二月五日 義貞、足利直義ヲ駿河手越河原ニ擊破ス。直義、退キテ箱根ニ據ル。

〔梅松論〕

前文ハ十一月二十 五日ノ條ニ收ム

依之建武二年十二月二日、下御所數万騎を卒して、同

五日、手越河原に馳向て終日入乱て戰けるに、人馬の足音は百千の雷の地に落かとうたがはれ、劍戟のひらめきけるは電のこどし、おそろしなむどもいふ計なし、かゝりしほどに、討死手負數をしらす御方利を失ひし間、武家の輩多く降參して、義貞に屬す、名字は、かりあるによつて是をかゝす、然間、下御所は箱根山に引籠り、水のみを堀切て要害として御座有けるに、仁木、細川、師直、師泰以下不殘一人當千の輩陳を取、下文ハ十一 日條ニ收ム

〔難太平記〕

細川今川 異見事

一建武二年に、駿河國手越河原の戰に、御方打負しに、錦小路殿御討死有べきよしを、細川郷房イ按、定 勸申候間、淵邊と云御年來の仁申トシテして云、先御前に討死仕べし

建武二年

手越河原ノ戰

箱根水呑ヲ守ル

と、唯一騎大勢の中に馳入てうたれき、御方つゞくに及ず、今川名兒耶三郎入道此時討死也、故入道殿申されけるハ、是ハ御打死のつばにあらす、御退き有て、味方をまとめられて、後日の御合戦可目出之由申して、御馬の口を押返しければ、御馬廻りの人々、一同に御馬の尻を打てひかせ申けり、くらく成ければ、故殿計とゞまられしか共、敵馳かゝらざりければ、夜に入て御跡しにより興津の宿に追付申さわけり、(下文、明年二月十日、二日條ニ收ム)

〔参考太平記〕(前文ハ十一月二十日ノ條ニ收ム) 同十二月五日、新田義貞矢矧鷲坂ニテ、降人ニ出

タリケル勢ヲ并テ八萬餘騎、手越河原ニ打莅テ敵ノ勢ヲ見給ヘハ、新手加ハリタリトモ、氣疲レタル敗軍ノ士卒、半交リテ跡ヨリ引カハ、敵立直ス事有ヘカラス、只懸テ見ヨトテ、脇屋右衛門佐義助、千葉介、宇都宮諸異本載、紀清兩黨、六千餘騎ニテ手越河原ニ推寄テ、東西ニ渡シツ渡サレツ、午刻始ヨリ酉ノ下マテ、十七度迄ソ戦タル、夜ニ入ケレハ、兩方人馬ヲ休メテ、河ヲ隔テ篝火ヲ燒、初ハ月雲ニ隠レテ夜已ニ深ニケレハ、義貞ノ方ヨリ究竟ノ射手毛利家、金勝院、西源院本云、射手三百人、云々、北條家、南都本、作五百人、ヲ勝リテ、敵ノ陰ヨリ敵ノ陣近ク忍ヒ寄リ、後陣ニ控タル勢ノ中へ、雨ノ降如ク込矢ヲ射タリケル、數萬ノ敵コレニ周章騒テ跡ヨリ引ケル間、新手ノ兵命ヲ輕ンヌル勇士共、是ハ如何ナル

事ソ返セ返セト云ナカラ、落行勢ニ引立ラレテ、鎌倉マテソ落タリケル、サレハ新田義貞、度々ノ軍ニ打勝テ伊豆府ニ著給ヘハ、落行勢共、弦ヲ卷兜ヲ脱、降人ニ出ル者數ヲ知ス、宇都宮遠江入道、元來總領宇都宮京方ニ在シカハ、縁ニツレテ馳附タリ、佐々木判官入道、太刀打シテ痛手數多所ニ負フ、舍弟五郎左衛門ハ手越ニテ討レシカハ、金勝院本云、道譽ハ舍弟五郎左衛門手越ニテ討レシ時、手ノ者共皆討死シテ僅ノ勢ニ成ケレハ、云々、下同、而異人也、可二并見一系圖云、建武二年十二月五日、佐々木五郎左衛門貞満於手越ニ討死、云々、世中サテトヤ思ヒケン、降參シテ天正本無、道譽降參事、而云、道譽退於

○西源院本云、道譽ハ舍弟五郎左衛門并怒賀四郎、手越ニテ討レツル時、手ノ者皆討死シテ僅ノ勢ニ成ケレハ、暫時ノ事ヲ計テ、義貞ノ前陣ニ打ケルカ、敗軍ノ士卒馳集テ、又五百餘騎ニ成ケレバ、宮根合戦ノ時取テ返シテ攻戦、又將軍へ參ケル、云云、

官軍此時、若足ヲモタメス追懸タラマシカハ、敵鎌倉ニモ堪フマシカリケルヲ、今ハ何ト無トモ、東國ノ者共御方ヘソ參ランスタン、其上東山道ヨリ下リシ搦手ノ勢ヲモ待ヘシトテ、伊豆ニ逗留セラレケルコソ今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、七日迄徒ニ逗留ス、云々、天運トハ云ナカラ、ウタテカリシ事共ナリ、(下文十一日、條ニ收ム)

〔保曆間記〕(前文十一月十九條ニ收ム)將軍この事を聞て、先直義以下の勢をさしのぼせ、駿河國てこし河原にて行合て合戦す、直義打負て箱根山にて引退き、(下文十一日條ニ收ム)

〔平姓眞壁家系〕平姓眞壁氏



十二月十一日 義貞、直義ヲ箱根ニ攻メ、將ニ之ヲ撃破セントス。尊氏起チテ義助ノ軍ヲ竹下ニ襲フ。官軍利アラズ。明日、佐野山ニ戦フ。大友貞載等叛キテ尊氏ニ應ジ、官軍支フル能ハズ。十三日、官軍又伊豆國府ニ敗レ、遂ニ尾張ニ退キ守ル。

尊氏兄弟、之ヲ追撃シテ西上ス。義貞、天龍渡河ニ美談ヲ遺ス。

尊氏恭順ヲ装フ

〔梅松論〕(前文五日ノ條ニ收ム) 將軍は先日勅使具光朝臣下向のとき、歸洛有べきよし仰られし所に、御參なき條、御本意にあらざる間、此事に付てふかく歎き思召れて仰られけるは、我龍顔に昵近し奉りて勅命を請て、恩言といひるいりよといひ、いつ

尊氏起ツ

尊氏竹ノ下足柄ニ向フ
坂ノ本ノ戦
藍澤原戦

の世いつのときなりとも君の御芳志を忘れ奉るべきにあらざれば、今度の事條々御所存にあらすと思召ける故に、政務を下御所に御ゆづり有て、細川源藏人頼春并近習兩三輩計召具て潜に淨光(明)寺に御座有し程に、海道の合戦難義たるよし聞召て將軍仰られけるは、守殿命を落されば、我有ても無益なり、但違勅の心中にをいて更に思召さず、是正に君の知處也、八幡大ばさつも御かご有べし、先達(面)諸軍勢をば向られしかども、御遠慮(や)有けん、小山、結城、長沼が一族をばおしみ止らる、此輩は(甲略累代武略のほまれをのこし、弓馬の家の達者也、其勢二千余騎仰を蒙りて將軍の先陳として建武二季十二月八日、鎌倉を御立ありければ、諸人箱根の御陳に加て合力あるべき(か)とおもふ處に、將軍謀に仰られけるは、我水のみに至、其敵さゝふる計にて利を得る事有べからず、此あら手を以箱根山を越て發向せしめ合戦を致さば、敵おどろきさはがむ所を誅伐せむ事、案の内なりとて、同十日の夜、竹の下道夜をこめて天の明るをまつほどに、辰の一天に一宮新田(の)脇屋の大將として懸せばやせ、しと詠せし足柄の明神の南なる野にひかへたり、御方の先陳は山を下りて野山にうち上るに、小坂の本にてかけ合戦しに、敵こらへずして引退所を、御方勝に乗て三十余り攻詰て藍澤原にをいて爰を限と戦し

建武二年

四二七

御下文始
佐野山戦

大友貞載
朝敵トナ

二條爲冬
戦死

伊豆國府
ノ戦
義貞箱根
ヨリ退ク

に、敵數百人討取間御かむにたへずして武藏の太田の庄を小山の常犬丸に充行はる。是は由緒の地なり、又常陸の關の郡を結城に行はる。今度戦場の御下文の(イ)はじめなり、是を見聞輩命をわすれ、死をあらそひて勇戦む事をおもはぬ者ぞなかりける。香餌の下には懸魚有、重賞の處には勇士ありといふ本文是なりけりと(ぞ)覚えし。翌日十二日、京勢駿河に引退き、佐野山に陣を取處に大友左近將監官軍(と)して、其勢三百余騎にて下向したりけるが、御方に參らすべきよし申ける間、子細有まじき旨仰られける程に、當所の合戦矢合の時分に御方に加りて合戦の忠節を致しければ、敵陣早く破れて二條中將爲冬を始として京方の大勢討れぬ。此爲冬(の)朝臣は將軍の御朋友なりしかば、彼頭を召よせ御らん有て御愁傷の色深かりき。其夜は雨ふりしかば、伊豆の國府を見おろして山野に御陣を召る。昨日今日の軍に御方討勝し間、御勢雲霞のごとし、通夜の雨なりしに、あくる十三日(の)はれまをもまたずして伊豆の國府に攻入給ふ處に、義貞以下の輩水呑の陣を引打(て)通夜没落しけるが、三島明神の御前を過て海道へ出る時分に、御方はせ合て辰巳二時の間合戦有し、ときの聲矢さけび戦合けるゑいやごゑ、六種震動にことならず、爰にをいて島山安房入道討死す。義貞の勢わづかにして富士川(を)渡しけると

足利軍西
上ニ決ス

天龍川ノ
美談

ぞ聞えし、味方は竹の下、佐野山、伊豆の國府、三ヶ日の合戦に打勝て、敵大勢(討)取て今日十三日足がら箱根の兩大將一手に成て、府中より車返し、浮島原に到るまで陣を取すといふことなし、いろ／＼の幕を引、思々の家の紋旗(を)立並て風に飄したる有様、幾千萬といふ數をしらす。去程に翌(日)十四日、御逗留有ける儀に云、是より兩(大)將鎌倉に御歸有て關東を御沙汰有べきか、又一義に云、縦關東を全くし給ふとも、海道京都の合戦大事なり、しかじたゞ一手にて御立有べしと有ければ、同十五日、海道に向ひ給ふ、浮島原に出給ひしにころは十二月半の事也しかば、不二のね麓野(イ)に至まで深雪つもりてまことに天山には弁(へ)す、いづれのとしの雪かとぞおぼえし。去五日、手越河原の合戦の時分、京方に屬したりし輩、不二河にて降參す、むかしより東士西に向ふ、夏、壽永三年には範頼義經、承久には泰時(并)時房、今年建武二年には御所高氏、直義、第三ケ度なり、御入洛何のうたがひかあらむとぞ勇悦ありける。去ながら海道は山河の間に足がりの難所に付(て)合戦治定有べしと覚えし處に、天龍川の橋を強くかけて渡守を以警固す。此河は流はやく水ふかき間、ゆゝしき大事なるべきに橋をば誰が沙汰(と)して渡(し)たりけるぞと尋られしかば、渡守共云、此間の亂に我等

義貞最後
ヨリ渡ル

名ヲ重ン
ズ

敵軍ヲ感
嘆セシム

は山林に隠忍候て、舟どもをば所所に置いて候ひしに、新田殿當所に御着有て、河には瀬なし、敗軍なれ共大勢なり、馬にて渡すべきにあらず、又舟を以渡さばをそくして、味方を一人成ともうしなはむ事不便なるべし、いそぎ浮橋をかくべし、難澁せしめば汝等を誅すべしと、御成敗候しほどに、兩三日の間に橋をかけ出して候なり、新田殿は御勢を、夜日五日渡させ給ひて一人も残らずと見えし時、新田御殿御渡り候し也、其後軍兵共此橋をやがて切落すべきよし下知せしとき、義貞橋の中より立歸て大に御腹を立られて、我等を近く召れて仰ふくめられ候しは、敗軍の我等だにも掛て渡るはし、いかにも切落したり共、勝に乗たる東士、橋を懸ん事時日をめぐらすべからず、凡敵の大勢に相向ふとき、御方は小勢にて川を後にあて、戦ふ時にこそ、退まじき謀に舟をやき橋をきるこそ、武略の一の手だてなれ、義貞が身として、敵とてもかけてわたるべきはしを切落して、敵に急におそはれじをあはてふためきけるなど、いはれむ處、末代に至るまで口おしかるべし、よく橋を警固仕れとて、靜に御渡り候し也、此故に御勢を待奉りてはしを守り候なりと申ければ、是を聞人々皆、涙をながして、弓矢の家を生れば誰もかくこそ有べけれ、疑なき名將にて御座有けるとて、義貞を感じ申さぬ人ぞなかりける、去程

に將軍の御方には東八ヶ國并海道の輩一人も残す屬し奉るあいだ、美濃近江に

〔元弘日記裏書〕

(下文ハ明年正月一日ノ條ニ收ム)

建武二年十二月十三日、官軍失利歸洛、

〔源威集〕

(羽後) △六、一九、六三二、

橋ニ付テ昔物語可申、建武二乙君臣有事、參州從矢作川合戰初マリ新田義貞爲戰ト官軍責下ノ間、東士失利、箱根山水呑ヲ堀切テ、大將左馬頭殿直義御坐、師直、師泰ヲ始トノ、仁木、細川ノ人々曾我、嶋津、岩戸已下御勢爲不及三百餘騎、大軍擗タリシニ、將軍箱根山ヲ捨テ、十二月十日夜中、足柄ノ大山ヲ越、佐竹、結城ノ勢ヲ先トス、十一日、羽下藍澤原ニテ、一日兩度ノ合戰ニ打勝テ、翌日十二日、佐野山合戰ニ、大友左近將監五百餘騎味方、依參、打勝賜ノ間、夜中ニ大雨、義貞水呑ノ固ヲ解テ、大軍沒落ス、武將嚴シク責給フ間、十三日ノ朝、雨中ニ伊豆國府於小濱責戰、義貞被打破、海道、越間、水呑ノ御勢折下リテ、於府中兩將御對面、是將軍依武略也、扱義貞ハ遠州天龍河、數日逗留ノ、浮橋ヲ渡シテ、軍勢不殘渡テ、叡末川ヲ越テ、此橋見苦布也、不可切、能々爲警固、東國ノ勢ヲ渡セト、渡守、仰舍テ有飯洛事ヲコソ、貴賤感申セシニ、今

天龍川ノ
美談

建武二年

武將瀨田、橋被切給事、戰士等思切トノ御匠也、是ヲ以是ヲ案スルニ、建武義貞、文和將軍、橋付テ、共ニ名將ノ意業成ト云ヘ、唯武略ハ同也、是モ源氏ノ不有勇堪者歟、

〔阿蘇文書〕九 △六、二、七七七

上島彦八郎惟頼軍忠事、

右今月十一日、於宮根山城、攻寄垣楯際致合戦、惟頼被疵、左肩上 腰骨如此致軍忠上者、爲後規爲給御一見狀、言上如件、

建武二年十二月廿七日

(中略) 承訖 花押

今月十一日、於宮根山、攻寄垣楯之際、致合戦忠節、兩所被被疵候之條、令見知候畢、狀如件、

建武二年十月廿七日

上島彦八殿

(字吉) 惟時(花押)

〔阿蘇文書〕△六、二、七七八

阿蘇品(一ニ北坂梨 子ト稱ス)六郎三郎惟定謹言上、(中略)

そののち將軍御むほんにつき候て、はこね山に御むけ候し、したかて御とも仕候て、(字治惟時ニ)わたくしの一めいををします、ちうきんをいたし候ぬ、これしかしなから、御をんのところをそんし候て仕候き、(下略 興國二年十月十八日附)

〔鎮西古文書編年録〕

戸次家 古文書 △六、二、七七八 (建武三年三月日附)

目安

大友戸次左近大夫頼尊軍忠事、預御一見狀、欲浴恩賞施弓箭面目子細事、

一去年十二月十二日、於佐野山最前參御方致軍忠事、

一同十三日、於伊豆國府致散々合戦、令太刀打抽軍忠畢、分取頭三若黨手負十四人、

一正月二日、近江國馳向伊岐須城濱手、懸先致忠畢、分取頭三若黨手負八人、

一同八日、追落八幡凶徒、同九日、十日、於大渡橋抽軍忠畢、

一同十六日、法勝寺南門合戦、及散々太刀打以下斷

一同廿日、於室津致打出合戦□□於御供下向鎮西、同三月二日、抽筑前國多々良

濱軍忠畢、親類若黨手負討死百餘人、分取頭五十四、

以前條々如此、云海道、云京都合戦、抽所々軍忠、迄于鎮西御供仕、於博多給御教書罷、向玖珠城抽戰功之子細、皆以存知候上者、下略

建武二年

佐野山戰
伊豆國府
近江伊岐
須城攻擊
法勝寺戰
打出合戰
多々良濱
合戦

〔野上文書〕（諸家文書） △六二七七九

豐後國御家人野上彦太郎清原資賴代平三資氏謹言上、

欲早任海道京都所々合戰忠預御一見狀浴恩賞事、

右去年十二月十二日、屬于左近將監貞載（天友手）於伊豆國佐野山參御方致合戰之條、戶次豐前太郎被見知訖、次同十三日、伊豆國府合戰之時、抽軍忠訖、次今年正月二日、近江國伊幾須之城合戰次第、狹間四郎入道（正供）小田原四郎左衛門入道以下令見知訖、次同十日、淀大渡橋上合戰之時、資賴射火箭、其後乘燒落柱押渡敵陣、致軍忠之條、須賀五郎、村畝治部房、小薦太郎左衛門尉見知訖、次同十一日、唐橋烏丸合戰之時、資賴打組太田判官一族、益戶七郎左衛門尉令分取、即被實檢之上、守護被註進訖、次同十六日、於法勝寺致合戰之條、古莊孫四郎、同六郎見知訖、加之預御教書、令發向球珠城、抽軍忠之間、大將所有御註進也、然早預御一見狀、爲浴恩賞、言上如件、

建武三年九月四日

承了沙彌（花押）

〔大友文書〕（立花伯爵所藏） △六二七八〇

著到 伊豆國佐野山御方馳參之時給之、

佐野山伊豆國府戰
伊幾須戰
淀大渡戰
唐橋烏丸戰
法勝寺戰

大友一族大炊四郎入道殿正供（狭間）

右着到如件（建武二年十二月十二日附三浦因幡守證判）

〔相馬文書〕二 △六二七八一（親應三年十一月廿二日附吉良貞家ヨリ仁木兵部大輔宛）

相馬出羽守親胤申恩賞事、申狀一卷謹令進覽之候、去建武二年下總千葉城（千葉郡）發向之時、親胤屬當手、至于箱根坂水吞致戰功候訖、次奥州下向之後、去貞和三年、伊達郡藤□（岩代伊達郡）靈山、田村莊宇津峯城等發向之時、率一族馳參、依抽軍忠、郎從等被疵候、加之去年宇津峯宮、伊達飛驒前司、田村莊司一族以下凶徒、府中襲下候處、同十月廿二日馳向柴田郡倉本河、一族并郎從數輩手負打死之上、親胤被疵候、下略

〔池田文書〕（備前） △六二七八二

成田藏人三郎重親申軍忠事、

右去年二（建武）十二月御上洛之間、屬總領攝津右近將監殿（親秀御手）最前馳參致路次宿直、度々抽軍忠、當年正月十六日、廿七日、晦日、致每度之忠、去六月屬同御手、抽連日軍勞、同十九日、於竹田河原懸先、同卅日、於東寺（北カ）比西八條、令對治御敵、糠辻子合戰懸先、八月廿三日、馳向竹田川原致警固、同廿五日、同斷合戰懸先、頸二令分捕畢、此條御見知上者、賜御判爲備後證、言上如件（建武三年九月日附親秀證判）

建武二年

四三五

箱根水吞ノ戰

〔山内首藤文書〕

十一 備後 六二七八三

里見義俊ノ子山内土用鶴丸

備後國津田郷（世羅郡ニ上下津田村アリ）總領地頭山内首藤三郎通繼今者討死子息土用鶴丸代時吉謹言上

欲早被關守護人朝山次郎左衛門尉楚忽注進被止關所御沙汰爲亡父通繼討死跡申恩賞處以當郷稱鹽飽左近入道跡入非據注進條無謂子細事

副進

- 一卷 代々御下文以下手繼證文等案
- 一卷 御感御教書軍忠之所見

右當郷者爲先祖相傳之地代々知行無相違者也而亡父通繼將軍自關東御上洛之由依傳承爲御方最前馳參于關東間於遠江國見付（應）蔭中令參會候御共近江國伊岐須宮大渡橋上御合戰之時致忠節遠矢可仕之由被仰下之間以遠矢射拂御敵了爲御前事之間无其隱者也其後去年正月卅日京都御合戰時於三條河原令討死了土用鶴丸依爲幼少差進代官時吉於御方備中國福山（窪屋郡地頭片山村）御合戰以下去年六月山門責其後度々御合戰之時屬尾張守殿御手抽軍忠之條御感御教書以下明鏡之間爲討死之跡當時申恩賞之處結句懸命之本領入關所之條難堪之上者所詮早爲

大渡橋上合戰ニ遠矢ヲナス

被止關所之注進恐々言上如件

建武四年三月日

〔參考太平記〕

（前文五日ノ條ニ收ム）サル程ニ足利左馬頭直義朝臣ハ錄倉ニ打歸テ合戰

ノ様ヲ申サン爲ニ將軍ノ御屋形へ參ラレタレハ四門空シク閉テ人モオシアララカニ門ヲ敲テ（毛利家本云、敵皇嘉門、其非也、按、皇嘉門、院本云、須賀左衛門大夫公能、在、内裏南面朱雀門西、錄倉何有、皇嘉門）誰カ有ト問給へハ須賀左衛門

ニ御出家候ハント仰候シテ面々様々申留メテ置進ラセテ候御本結ハ切セ給ヒテ候へトモイマタ御法體ニハ成セ給ハストン申ケル左馬頭高上杉ノ人々是ヲ

聞テ角テハ彌軍勢共憑ヲ失フヘシ如何セント仰天セラレケルヲ上杉伊豆守重能姑思案シテ將軍縱御出家有テ法體ニ成セ給ヒ候共勅勘遁ルマシキ様ヲタニ

聞召候ハ、思召直ス事ナトカ無テ候へキ謀ニ綸旨ヲ二三通書テ將軍ニ見セ進ラセ候ハ、ヤト申サレケレハ左馬頭兎モ角モ事ノヨカラン様ニ計ヒ沙汰候へトソ任セラレタリケル伊豆守サラハトテ宿紙ヲ俄ニ染出シ能書ヲ尋テ職事ノ

手ニ少モ違ヘス是ヲ書其詞曰、足利宰相尊氏左馬頭直義以下一類等誇武威輕朝憲之間所被征罰也彼輩縱雖爲

傳綸旨ヲ作ル

尊氏出家セントス

建武二年

四三七

隱遁身不可寬刑罰、深尋彼在所、不日可令誅戮、於有戰功者、可被抽賞者、給旨如此、悉之以狀、

建武二年十一月二十三日

今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作三日、爲得、蓋衍三十字、按、二十三日、則義貞發京之後也、軍兵何由持三十三日之給旨、且直義重能、

奸巧能詐、必不
レ作、疎垂之事、

右中辨光守奉

武田一族中

小笠原一族中

へト同文章ニ名字ヲ替テ、十餘通書ヲソ出シタリケル、左馬頭直義朝臣是ヲ持テ急建長寺へ參リ給ヒテ、將軍ニ對面有テ、涙ヲ抑ヘテ宣ヒケルハ、當家勅勘ノ事、義貞朝臣カ申勸ルニ依テ、則新田ヲ討手ニ下サレ候間、此一門ニ於テハ、縱遁世降參ノ者ナリトモ、求尋テ誅スヘシト議シ候ナル、叡慮ノ趣モ又同遁ルル所候ハサリケリ、先日矢矧手越ノ合戰ニ、討レテ候シ敵ノ膚ノ守リニ入テ候シ給旨共、是御覽候へ、加樣ニ候上ハ、トテモ遁レヌ一家ノ勅勘ニテ候へハ、御出家ノ議ヲ思召翻サレテ、氏族ノ陸沈ヲ御助候へカシト申サレケレハ、將軍此給旨ヲ御覽シテ、謀書トハ思ヒモ寄給ハス、誠ニサテハ一門ノ浮沈此時ニテ候ケル、サラハ力ナシ、尊氏モ、

義貞足利
ヲ議スト
云フ

尊氏起ツ

旁ト共ニ弓矢ノ義ヲ專ニシテ、義貞ト死ヲ共ニスヘシトテ、忽ニ道服ヲ脱給ヒテ、錦ノ直垂ヲソ召レケル、サレハ其比錄倉中ノ軍勢共カ、一束切トテ、髻ヲ短クシケルハ、將軍ノ髮ヲ紛ラカサンカ爲ナリケリ、サテコソ事叶ハシトテ、京方へ降參セントシケル大名共モ、右往左往ニ落行ントシケル軍勢モ、俄ニ氣ヲ直シテ馳參シケレバ、一日モ過サルニ將軍ノ御勢ハ、三十二天正本作二十萬騎ニ成ニケリ、

箱根竹下合戰附二條爲冬討死事

サル程ニ同十二月

今出川家本作十一月、非也、

十一日 金勝院本誤作二十一日、 兩陣ノ手分有テ、左馬頭直義

根路ヲ支へ、將軍ハ竹下へ向フヘシト定ラレニケリ、此間度度ノ合戰ニ打負タル兵共、イマタ氣ヲ直サテ勇マス、昨日今日馳集リタル勢ハ、大將ヲ待テ猶豫シケル間、敵既ニ伊豆府ヲ打立テ、今夜野七里山七里ヲ超ルト聞ヘシカハ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、義貞山七里ヲ超ルト聞ヘケレト、足利尾張右馬頭高經、舍弟式部大輔、三浦因幡守、土院、南都本云、義貞山七里ヲ超ルト聞ヘケレト、足利尾張右馬頭高經、舍弟式部大輔、三浦因幡守、土院、鎌倉勢イマタ箱根竹下へモ向ハス、云々、 佐々木佐渡判官、赤松雅樂助貞範、雅樂助、金勝院、西源院本、作、筑 岐彈正少弼頼遠、舍弟道謙、毛利家本作、道 佐々木道譽、下倣レ之、 加樣ニ目クケルカ、加樣ニ目クラヘシテ、云々、下同三本文、而不載、足利高經兄弟、土岐頼遠、佐々木道譽、下倣レ之、 加樣ニ目クラヘシテ、鎌倉ニ聚居テハ叶フマシ、人ノ事ハヨシ兎モ角モアレ、イサヤ先竹下へ馳向テ、後陣ノ勢ノ著ヌ先ニ敵寄セハ一合戰シテ討死セントテ、十一日ノマタ宵

足利高經
等先ツ竹
下ニ向フ

建武二年

四三九

尊氏竹下ニ着ク

尊良親王脇屋義助竹下ニ向フ

箱根路ノ戦

ニ金勝院、天正、竹下へ馳向フ、其勢僅ナリシカハ、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都本云、其勢百騎許、云々、金勝院本云、其勢二三百騎、云々、物冷クソ見ヘタリケル、サレトモ義ヲ守ル勇士ナレハ、強多少依ヘカラストテ、竹下へ打上テ、敵ノ陣ヲ遙ニ直下シタレハ、西ハ伊豆府、東ハ野七里山七里ニ燒並タル篝火ノ數幾千萬トモ知サリケリ、只晴天ノ星ノ影、滄海ニ移ル如クナリ、サラハ御方ニモ篝火ヲ燒セントテ、雪下草打拂處々刈集メテ、幽ニ火ヲ吹附タレハ、夏山ノ茂ミカ下ニ夜ヲ明ス、照射ノ影ニ異ナラス、サレトモ武運強ケレハニヤ、敵今夜ハ寄セ來ラス、夜既ニ明ナントシケル時、將軍鎌倉ヲ打立セ給ヘハ、仁木、細川、高、上杉、是等ヲ宗徒ノ兵トシテ、都合其勢十八萬騎、毛利家、金勝院本、作二十萬騎、今川家、北條家、西源院、南都本、作二十萬騎、竹下へ著給ヘハ、左馬頭直義六萬餘騎ニテ、宮根峠へ著給フ、サル程ニ明レハ十二日辰刻ニ、京勢共伊豆府ニテ、手分シテ竹下へハ中務卿親王、卿相雲客十六人、今川家、毛利家、北條家、金勝院、南都本、作二十餘人、副將軍ニハ脇屋治部大輔義助、細谷右馬助、堤卿律師、大友左近將監、佐々木鹽治判官高貞ヲ相副テ、已上其勢七千餘騎、搦手ニテ向ハレケリ、宮根路へハ、又新田義貞宗徒ノ一族二十餘人、二十、今川家、本、作三十、千葉、宇都宮、大友千代松丸、按、名氏奉、貞宗子、左近將監貞也、菊池肥後守武重、松浦黨ヲ始トシテ、國々ノ大名三十餘人、都合其勢七萬餘騎、大手ニテソ向ハレケル、同日午刻ニ軍始リシカハ、大手搦手敵御方、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、

菊池武重

道場坊助

新田十六

敵御方八十萬騎、云々、互ニ関ヲ作リツ、山川ヲ傾ケ天地ヲ動シ、喚叫テ攻戰フ、サル程ニ菊池肥後守武重、宮根軍ノ先懸シテ、敵三千餘騎ヲ遙ノ峰ヘマクリ上、坂中ニ楯ヲツキ並テ、一息繼テ堪ヘタリ、是ヲ見テ千葉、宇都宮、河越、高坂、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、作高山、愛曾、熱田大宮司、今川家、北條家、金勝院、南都本、載、厚東、西源院本、愛曾作、愛智、載、厚東、金勝院本、又載、阿曾秋月、一勢一勢陣ヲ取テ、曳ヤ聲ヲ出シテ攻上攻上、喚叫テ戰フタリ、中ニモ道場坊助注記祐覺ハ、兒十人同宿三十餘人、紅下濃ノ鎧ヲ一様ニ著テ、北條家、金勝院、西源院、南都本云、紅下濃、鎧、黒、絲、成、鎧、一様ニ著テ、云々、兒ハ紅梅ノ作り花ヲ一枝ツ、兜ノ眞額ニ挿タリケルカ、楯ニハツレテ一陣ニ進ケルヲ、武藏相摸ノ荒夷共、兒トモ云ス只射ヨトテ、散々ニ指詰テ射ケル間、面ニ進タル兒八人矢庭ニ倒レテ、小篠ノ上ニソ伏タリケル、黨ノ者共、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、猪股横山百餘人、云々、是ヲ見テ、首ヲ取ント拔連テ打テ下リケルヲ、道場坊カ同宿共、兒ヲ討セテ何カ堪ヘキ、三十餘人太刀長刀ノ鋒ヲ並テ、手負ノ上ヲ飛超飛超、坂本様ノ袈裟切ニ、成佛セヨト云儘ニ、追ツメ追ツメ切テ廻リケル間、武士散々ニ切立ラレテ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、武士ハ皆小太刀ナレハ、小手ニ腕内兜散々ニ斬立ラル、云々、北ナル峰へ颯ト引テ、姑シ息ヲソ繼タリケル、此隙ニ祐覺カ同宿共、面々ノ手負ヲ肩ニ引懸テ、麓ノ陣ヘソ下リケル、義貞ノ兵ノ中ニ、杉原下總守、今川家、毛利家、北條家、西源院、南都本、本、杉原、高田薩摩守義遠、葦堀七郎、葦堀、金勝院本、作、葦名、藤田六郎左衛門、川波新左衛門、藤田三

黨ヲ結ベ
ル十六人

郎左衛門藤田、金勝院本作三藤元一 同四郎左衛門金勝院本作三郎兵衛、北條家、南都本不載、藤田三郎左衛門、故以三郎左衛門、爲川波氏 栗生左衛門、篠塚伊賀守金勝院、西源院本不載、栗生篠塚二人 難波備前守、河越參河守、長濱六郎左衛門、高山遠江守、園田四郎左衛門金勝院本作一掃部助 青木五郎左衛門、同七郎左衛門金勝院本無、左衛門字、西源院本出、于園田下、爲園田氏 山上六郎左衛門トテ、黨ヲ結タル精兵ノ射手十六人アリ、按、所出、於上、者十七人、而今云十六人、相懸 一様ニ笠驗ヲ附テ、進ムニモ同ク進ミ、又引時モ共ニ引ケル間、世人是ヲ十六騎黨トソ申ケル、彼等カ射ケル矢ニハ、楯モ物具モタマラサリケレハ、向フ方ノ敵ヲ射スカサスト云事ナシ、執事船田入道ハ、馳廻テ士卒ヲ諫メ、大將軍義貞ハ、一段高キ處ニ、諸卒ノ行迹ヲ實檢セラレケル間、名ヲ重シ命ヲ輕スル、千葉、宇都宮、菊池、松浦ノ者共、勇進テ戰ケル間、鎌倉勢馬ノ足ヲ立兼テ、引退者數ヲ知サリケリ、

○鳥津家、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本並云、義貞ハ一段高キ所ニ打上リテ、分明ニ是ヲ見給ヒケル間、名ヲ重シ命ヲ輕スル、千葉、宇都宮、大友、菊池カ兵トモ、勇ミ進テ攻ケル程ニ、始六萬餘騎六萬、今川家、北條家、南都本作三、七萬、此上作六萬、今相懸 有ツル宮根勢、討レテハ、颯ト引、手負テハ引テ落、落ルヲ見テハ、彌引後レシト落ケル間、旗ノ數次第ニ減シテ、今ハ十分一モ見ヘサリケレハ、此下、今川家、金勝院本不出 義貞勝ニ乗テ、鎌倉勢ニ向ケル時、村上河内守信貞カ一族四十餘人餘、毛利家本作二 都合其勢五百餘騎ニ

竹下ノ親王ノ軍

京家ノ人

テ、義貞ノ勢ヲ追下シ、手負死人數百人ニ及ヘリ、直義是ヲ感シテ、疊紙ニ恩賞ノ下文ヲ書テ與ヘラル、信濃國鹽田莊毛利家本云、鹽田庄十二郷、云々 トソ聞ヘシ、云々、懸ル所ニ竹下ヘ向ハレタル、中書王良ノ御勢、諸庭ノ侍北面ノ輩五百餘騎、愁ニ武士ニ先ヲ懸ラレシトヤ思ヒケン、錦ノ御旗ヲ先ニ進メ、竹下ヘ押寄テ、敵イマタ一矢モ射サル先ニ、一天ノ君ニ向ヒ奉リテ、弓ヲ引矢ヲ放ツ者、天罰ヲ蒙サランヤ、命惜クハ兜ヲ脱、降人ニ參レト聲々ニソ呼ハリケル、是ヲ見テ尾張右馬頭、舍弟式部大輔、土岐彈正少弼、頼遠、舍弟道謙、三浦因幡守、佐々木佐渡判官入道、赤松筑前守貞範毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本、此段首赴、竹下之人、不載、高經兄弟、頼遠、道譽、而今唯毛利家本、加三山名伊豆守時氏、爲四人、相懸 宵ヨリ一陣ニ有ケルカ、敵ノ馬ノ立様旗ノ紋、京家ノ人ト覺ルソ、矢タフナニ遠矢ナ射ソ、只拔連レテ懸レトテ、三百餘騎轡ヲ雙ヘ、弓馬ノ家ニ生レタル者ハ、名ヲコソ惜メ命ヲハ惜マヌ者ヲ、言所虛事カ實事カ、戰テ手並ノ程ヲ見給ヘトテ、一同ニ関ヲ咄ト揚、喚テコソ懸タリケレ、官軍ハ敵ヲカサニ受テ、籠ニ引タル勢ナレハ、何カハ一タマリモタマルヘキ、一戰ニモ及ハスシテ、捨鞭ヲ打テソ引タリケル、是ヲ見テ、土岐、佐々木諸異本、或不載、此人、既註、于上 一陣ニ進テ、詞ニモ似ヌ人々カナ、キタナシ返セト恥シメテ、追立追立攻ケル間、後レテ引兵五百餘騎、或ハ生虜レ或ハ討レ、殘少ニ成ニケリ、手合ノ合戰ヲ仕違ハテ、

京勢退却
脇屋義助

大中黒ト
二引兩

脇屋義治
ト父義助
ノ情

義治十三
歳

官軍漂フテ見ヘケレハ、仁木、細川、高上杉ノ人々勇進ミテ、中書王ノ御陣ヘ、會釋モ
 ナク撃テ懸ル、サレハ引漂フタル京勢ニテ、叶ヘキ様無リケルヲ、中書王ノ副將軍、
 脇屋右衛門佐、云甲斐ナキ者共カ、怒ニ一陣ニ進テ御方ノカヲ失フコソ遺恨ナレ、
 コ、ヲ散サテハ叶マシトテ、七千餘騎ヲ一手ニナシテ、馬ノ頭ヲ雁行ニ連テ、旌ノ
 足ヲ龍妝ニ進メテ、横合ニ閑々ト懸ラレケル、勝誇タル敵ナレハ、何カハ少モヒル
 ムヘキ、十文字ニ合テ八文字ニ破ル、大中黒ト二引兩ト、二ノ旌ヲ入替入替、東西ニ
 靡キ南北ニ分レ、萬卒ニ面ヲ進メ、一舉ニ死ヲソ争ヒケル、誠ニ兩方名ヲ知ラレタ
 ル兵共ナレハ、誰カハ一人モ遁ヘキ、互ニ討ツ討レツ、馬ノ蹄ヲ浸ス血ハ混々トシ
 テ、洪河ノ流ル、カ如クナリ、死骸ヲ積メル地ハ、彙々トシテ、屠所ノ肉ノ如クナリ、
 無慙ト云モ疎ナリ、爰ニ脇屋右衛門佐ノ子息、式部大輔トテ今年十三ニ成ケルカ、
 敵御方引分レケル時、如何シテ紛レタリケン、郎黨三騎相共ニ、敵ノ中ニソ殘リケ
 ル、此人幼稚ナレトモ心早キ人ニテ、笠驗引切テ投捨、髪ヲ亂シ顔ニ振懸テ、敵ニ見
 知ラレシト、サハカヌ體ニテソオハシケル、父義助是ヲハ知ラス、義治カ見ヘヌハ、
 討レヌルカ又生捕レヌルカ、二ノ間ヲハ離レシ、彼カ死生ヲ見スハ、片時ノ命生テ
 モ何カハスヘキ、勇士ノ戰場ニ命ヲ捨ル事、只是子孫ノ後榮ヲ思フ故ナリ、サレハ

義助ノ奮
戰ヲ追拂
フ

片引兩

義治生還

鹽谷高貞
大友貞載
叛逆ス

イマタ幼身ナレトモ、片時ノ別ヲ悲ミテ、此戰場ニモ伴ヒツルナリ、其生死ヲ知ラ
 テハ如何サテ有ヘキトテ、鎧ノ袖ニ涙ヲカケ、大勢ノ中ヘ懸入給ヒケルカ、誠ニ父
 ノ子ヲ思フ志、今ニ初ヌ事ナレトモ、哀ナル御事カナ、イサヤ御供仕ラントテ、義助
 ノ兵共、轡ヲ雙ヘ三百餘騎、主ヲ討セジト懸入ケル、義助ノ二度ノ懸ニ、サシモノ大
 勢戰疲レテ、一度ニハツトソ引タリケル、是ニ利ヲ得テ、義助尙北ルヲ、追テ進マレ
 ケル處ニ、式部大輔義治、我カ父ト見成シテ、馬ヲ引返シ主從四騎ニテ、北條家、金勝院、
西源院、南都本
云、義治馬ヲ引返シ、キタナキ人々ノ引ヤウカナ、敵ハ小勢ニテア
 ルモノヲ、イサヤ返シテ討死セント仰リテ、主從四騎引返、云々、 脇屋殿ニ馳加ハラント、馬ヲ前メラ
 レケルヲ、誰トハ知ラス、片引兩ノ笠驗附タル兵二騎、御方カ返スソト心得テ、ヤサ
 シクコソ見ヘサセ給候ヘ、御供申テ討死シ候ハントテ、連テ、是モ返シケリ、式部大
 輔義治ハ、父義助ノ勢ノ中ヘツト懸入様ニ、若黨ニキツト目クハセセラレケレハ、
 義治ノ郎從ヨセ合テ、續テ返シツル二騎ノ兵切落シ、首ヲ取テソ差擧タル、金勝院、
西源院、
南都本、並云、義治ハ義助ノ陣近クナリシカハ、三人ノ郎等ニ目クハセシテ、主從四騎
 ヒシヒシト寄せ、續テ返シツル二騎ノ兵ヲ切落シ、其首ヲ取テ味方ノ中ヘ馳入、云々、 義助是ヲ見給ヒテ、死タ
 ル人ノ蘇生シタル様ニ悦テ、今一涯ノ勇ヲ成シ、姑人馬ヲ休メヨトテ、又元ノ陣ヘ
 ソ引返サレケル、一陣餘ニ開クタヒレシカハ、新手ヲ入替テ戰ハシメントシケル
 處ニ、大友左近將監、佐々木鹽治判官カ、千餘騎ニテ後ニ控ヘタルカ、如何思ヒケン

一矢射テ後、旌ヲ卷テ將軍方ニ馳加リ、却テ官軍ヲ散々ニ射ル、

○天正本云、義助、義治ヲ見給ヒテ勇ヲナシ、敵ノ真中へ懸入テ、身命ヲ捨テ闘ハ

レタリ、此勇力ニ拂ハレテ、大勢ノ陣シトロニ成テ、馬ノ足ヲ立兼タレハ、已ニ難

儀ニ及ケル處ニ、山名小二郎入道按系圖、山名彌二郎政子息時氏、元名義氏、義俊子也。ヲ見テ、今日ノ大

將ヲ奉ル上ハ、御方ノ難儀ニ及ヲ見テ、イカ、只ハ有ヘキ、イサ一支戰テ、叶ハス

ハ討死セントテ、御方ノ敗軍ヲ懸出テ、馬ヲ進メケル處ニ、結城カ勢七百餘騎、敵

ニ陣ヲ破ラレシト、馬ノ足ヲ立收、閑マリカヘリテ控タリ、山名入道是ヲ見テ、ア

レハ御方カト思ハレケレハ、馬ヲ打寄テ宣ケルハ、今日ノ合戰思ハサルニ、敵ノ

小勢ニマクラレテ、御方已ニ漂ヘリ、是ヲ助ケスハ誰カハ一人モ遁ヘキ、馳入テ

打死シテ、諸卒ノ命ヲ助テ、後日ノ用ニ立ント存スルナリ、御邊達證據ニ立テ、將

軍ノ御前ニ御沙汰ノ有ン時、我等カ戰功ヲ舉給ヘトテ、馬ヲ進ル處ニ、結城是ヲ

聞テ、當家ニハイマタ、人ノ討死ノ支證ニ立タル例ナシトテ、七百餘騎ヲ一手ニ

成テ、敵ノ真中ニ懸入テ、一人モ殘ラス討死ス、サレハ強敵尙勇進テ、御方敗軍ニ

成ヌレハ、事難儀ナリケルヲ、佐竹右馬頭義敦一陣ニ馳入テ、死ヲ願ス戰タリ、是

ヲ見テ山名入道、其子伊豆守時氏、其弟三河守按、名兼義、彈正少弼、佐渡判官、土岐、佐々

山名政氏
子息時氏
ト足利方
ニアリ

義助退却
佐野原

二條爲冬
戰死

木身命ヲ名ニカヘテ、勝誇タル強敵ヲ、速ニ拉ントソ進ケル、赤松貞範、梶原又六、

同孫六、大勢ノ中ニ破テ入り、敵三人斬テ落シ、其頭ヲ取テ指擧タリ、是ヲ見テ、大

友左近將監、鹽治高貞、千餘騎ニテ旌ヲ卷降參ス、下同、

中書王ノ御勢ハ、初度ノ合戰ニ若干討レテ、又モ戰ハス、右衛門佐ノ兵ハ、兩度ノ懸

合ニ人馬疲レテ無勢ナリ、是ソ新手ニテ一軍モシツヘキ者ト憑レツル、大友、鹽治

ハ忽ニ翻テ、親王ニ向ヒ奉リテ弓ヲ引、右衛門佐ニ懸合テ戰シカハ、官軍爭カ堪フ

ヘキ、敵ノ後ヲ遮ラヌ前ニ、大手ノ勢ト成合ントテ、佐野原金勝院本作、佐野河原、下倣之。引退ク、仁

木、細川、今川、荒川、高、上杉、武藏相摸ノ兵共、三萬餘騎ニテ追懸タリ、爰ニテ中書王ノ

股肱臣ト頼思召タリケル、二條中將爲冬討レ給ヒケレハ、天正本云、爲冬、中書王ノ股肱臣ト高ラカニ名乗テ討死ス、云々、

右衛門佐ノ兵共、返合返合三百騎、所々ニテ討死ス、是ヲモ願ス、引立タル官軍共、我

先ニト落行ケル程ニ、佐野原ニモタマリ得ス、伊豆府ニモ支ヘスシテ、搦手三百餘

騎ハ、三百、今川家、毛利家、金勝院、西源院、南都、天正本、作三萬、爲冬、得、海道ヲ西ヘ落テ行、

官軍引退宮根事

追手宮根路ノ合戰ハ、官軍戰フコトニ利ヲ得シカハ、僅ニ控テ支タル足利左馬頭

ヲ追落シテ、鎌倉ヘ入ンスル事掌ノ内ニ有ト寄手皆勇ミイサミテ明ルヲ遅シト

義貞前根
ヨリ退ク
十六騎黨
熱田大宮
司
菊池武重

待ケル處ニ、搦手ヨリ軍破レテ、寄手皆追散サレヌト聞ヘケルハ、諸國ノ催シ勢、路次ノ軍ニ降人ニ出タリツル坂東勢、幕ヲ捨旗ヲ側メテ、我先ニト落行ケル間、サシモ廣キ宮根山ニ、スキマモナク充滿シタリツル陣ニ、人アリトモ見ヘス成ニケリ、執事舟田入道ハ、一ノ攻口ニ敵ヲ攻テ居タリケルカ、敵陣ニ竹下合戦ハ、將軍打勝セ給ヒテ、敵ヲ皆追散シテ候ナリト、早馬ノ參テ、旬ル聲ヲ聞テ、實ヤラン覺東ナク思ヒケレハ、只一騎御方ノ陣々ヲ打廻テ見ルニ、幕計殘テ人ノアル陣ハ無リケリ、サテハ竹下ノ合戦ニ、御方早打負テケリ、カクテハ叶フマシト思ヒテ、急キ大將ノ陣ヘ參テ事ノ仔細ヲ申ケレハ、義貞姑ク思案シ給ヒケルカ、何様陣ヲ少引退テ、落行勢ヲ留テコソ、合戦ヲモセメトテ、舟田入道ヲ打連テ、宮根山ヲ引テ下リ給フ、其勢僅百騎ニハ、百、金勝院本過サリケリ、姑ク馬ヲ控テ後ヲ見給ヘハ、例ノ十六騎黨、馳參タリ、又北ナル山ニ添テ、三葉柏ノ旗ノ見ヘタルハ、敵カ御方カト問給ヘハ、熱田大宮司百騎許ニテ待奉ル、其勢ヲ合テ野七里ニ打出給ヒケレハ、鷹羽ノ旗一流差舉テ、菊池肥後守武重、三百餘騎ニテ馳參、爰ニ散所法師一人、西ノ方ヨリ來リケルカ、舟田カ馬ノ前ニ畏テ、是ハ何クヘトテ御通り候ヤラン、昨日ノ暮程ニ、脇屋殿竹下ノ合戦ニ討負テ、落サセ給ヒ候シ後、將軍ノ御勢八十萬騎、八十、天正本作三十二、下做伊

栗生篠塚
ノ勇

一條某ヲ
討取ル

豆府ニ居餘リテ、木ノ下岩ノ陰、人ナラスト云所候ハス、今此勢計ニテ御通り候ハシ、事、努々叶フマシキ事ニテ候トソ申ケル、是ヲ聞テ栗生ト篠塚ト打雙テ候ケルカ、笠踏張ツトノピアガリ、御方ノ勢ヲ打見テ、哀兵共ヤ、一騎當千ノ武者トハ、此人々ヲソ申ヘキ、敵八十萬騎ニ、八十、毛利家本初作三六、今同三本文、相繼御方五百餘騎、能程ノ合手ナリ、イテ懸破リテ道開テ參セン、繼ケヤ人々ト勇メテ、數萬騎打集リタル敵ノ中ヘ懸テ入、府中ニテ一條次郎三千餘騎ニテ關ヒケルカ、新田左兵衛督ヲ見テ、ヨキ敵ト思ヒケルニヤ、馳雙ヘ組ントシケルヲ、篠塚中ニ阻テ、打ケル太刀ヲ弓手ノ袖ニ受トメ、大ノ武者ヲカイ爬テ、弓杖二丈許ソ抛タリケル、一條モ大力ノ早業ナリケレハ、抛ラレタレトモ倒レス、漂フ足ヲ踐直シテ、猶義貞ニ走懸ラントシケルヲ、篠塚金勝院本馬ヨリ飛テヨリ、兩膝合テ倒ニ蹴斃ス、倒ルハ、ト均シク、一條ヲ起シモ立ス、作栗生抑テ首搖切テソ指擧タル、一條カ郎等共、目ノ前ニ主ヲ討セテ、心ウキ事ニ思ヒケレハ、篠塚ヲ討ント、馬ヨリ飛下リ飛下リ打テ懸レハ、篠塚カイ違テハ蹴倒シ、蹴倒シテハ首ヲ取、足ヲモタメス一所ニテ、九人迄コソ討タリケレ、是ヲ見テ敵數十萬騎有ト云トモ、敢テ懸合ントモセサリケレハ、義貞靜々ト伊豆府ヲ打テ通り給フニ宵ヨリ落テ其邊ニ紛レ居タル官軍共、此彼ヨリ馳附ケル程ニ、義貞ノ勢二千餘

小山ヲ追散ス山名里見

甲斐源氏

高山義遠

騎許ニ成ニケリ、此勢ニテハ縦百重千重ニ取籠タリトモ、ナトカ懸破テ通ラサルヘキト悦テ行處ニ、木瀬川ニ旗一流打立テ、勢ノ程二千騎許見ヘタリ、近々ト打寄テ旗ノ紋ヲ見レハ、二巴ヲ旗ニモ笠驗ニモ書タリ、サテハ小山判官ニテソ有ラン、一騎モ餘サス打取レトテ、山名里見ノ人々天正本載、額田桃井、馬ノ鼻ヲ竝テ叫テ懸リケル程ニ、小カ勢四角八方ニ懸散サレテ、百騎許ハ討レニケリ、カクテ浮島原ヲ打過レハ、松原ノ陰ニ旌三流差テ、勢ノ程五百騎許控ヘタリ、是ハ敵カ御方カト、在家ノ者ニ問給ヘハ、是ハ昨日竹下ヨリ一宮ヲ追進ラセテ、所々ニテ合戦シ候シ、甲斐源氏ニテ候トソ答申ケル、サテハ好敵ソ取籠テ討トテ、二千餘騎ノ勢ヲ二手ニ分テ、北南ヨリ押寄レハ、叶ハシトヤ思ヒケシ、一矢ヲモ射スシテ、降人ニ成テソ出タリケル、此勢ヲ先ニ打セテ遙ニ行ハ、中黒ノ旗ヲ見附テ、落隠居タル官軍トモ、彼方此方ヨリ馳附テ、七千餘騎ニ成ニケリ、今ハカフト勇テ、今井見附ヲ過ル處ニ、又旗五流差舉テ、小山ノ上ニ敵二千許控ヘタリ、降人ニ出タリツル甲斐源氏ニ、此敵ハ誰ソト聞給ヘハ、是ハ武田小笠原ノ者共ニテ候ナリト答フ、サテハ攻ヨトテ、四方ヨリ攻上リケルヲ、高山薩摩守義遠高山、本文及諸異本上段作高山、今本文及北條家、西源院、南都、本作高山、相繼、金勝院、本云、名義遠、亦與前相繼、恐非、此敵ヲ餘サス討ントセハ、御方モ許多亡フヘシ、大敵ヲハ開テ攻ルニコソ、利ハ候ヘト申

由良舟田

天龍川
浮橋

諸卒ヲ渡シハテテ義貞渡ル

栗生左衛門

義貞飛ビ渡ル

ケレハ由良舟田實モトテ、東一方ヲハ開テ、三方ヨリ攻上リケレハ、此敵共遠矢少々射捨テ、東ヲ指テソ落行ケル、天正本云、今井見附ヲ見給ヘハ、武田小笠原旗五流打立テ、二千餘騎ニテヒ、カヘケルヲ、義遠一隊ニ前ミ喚テ懸ケレハ、敵コラヘ兼テ東ヲ指テ引、云々、是ヨリ後ハ敢テ遮ル敵モ無リケレハ、手負ヲ相助、サカル勢ヲ待連テ、十二月十四日暮程ニ、天龍河ノ東ノ宿ニ著給ヒケリ、折節河上ニ雪降テ、河ノ水岸ヲ浸セリ、長途ニ疲レタル人馬ナレハ、渡ス事叶フマシトテ、俄ニ在家ヲ壞テ、浮橋ヲソ渡サレケル、此時モシ將軍ノ大勢、後ヨリ追懸テハシ寄タリセハ、京勢ハ一人モナク亡ヘカリシヲ、吉良上杉ノ人々、長兪議ニ三四日逗留アリケレハ、川ノ浮橋程ナク渡シスマシテ、數萬騎ノ軍勢殘ル所ナク、一日カ中ニ渡テケリ、諸卒ヲ皆渡シハテ、後、舟田入道ト大將義貞朝臣ト、二人橋ヲ渡リ給ヒケルニ、如何ナル野心ノ者カシタリケン、浮橋ヲ一間張綱ヲ切テソ捨タリケル、舍人馬ヲ引テ渡リケルカ、馬ト共ニ倒ニ落入テ、浮又沈ヌ流レケルヲ、舟田入道、誰カアルアノ御馬引上ヨト申ケレハ、後ニ渡リケル栗生左衛門、鎧著ナカラ川中ヘ飛ツカリ、二町許游キ附テ、馬ト舍人トヲ左右ノ手ニ差舉テ、肩ヲ超ケル水ノ底ヲ閑ニ歩テ、向ノ岸ヘソ著タリケル、此馬ノ落入ケル時、橋二間許落テ、渡ルヘキ様モナカリケルヲ、舟田入道ト大將ト、二人手ニ手ヲ取組テ、ユラリト飛渡リ給フ、天正本云、義貞弓脇ニ插テ向岸ヘ越給フ、云々、其跡ニ候ケル兵二十

新田義貞公篇

餘人二、金勝院本作三、而飛兼テシハシ徘徊シケルヲ、伊賀國住人ニ名張八郎金勝院本云、名久高トテ、名譽ノ大力ノアリケルカ、イテ渡シテトラセントテ、鎧武者ノ總角ヲ取テ中ニ提ケ、二十人迄コソ投越ケレ、今二人殘テ有ケルヲ、左右ノ脇ニ輕々ト挾テ、一丈餘落タル橋ヲユラリト飛テ、向ノ橋桁天正本作二、向岸ヲ踏ケルニ、踏所少モ動カス、眞ニ輕クニ見ヘケレハ、諸軍勢遙ニ是ヲ見テ、アナイカメシ、何レモ凡夫ノ態ニ非ス、大將ト云手ノ者共ト云、何レヲ捨ヘキトモ覺ネトモ、時ノ運ニ引レテ、此軍ニ打負給ヒヌルウタテサヨト、云ヌ人コソナカリケレ、其後浮橋ヲ切テツキ流サレタレハ、敵縦寄來ルトモ、左右ナク渡スヘキ様モナカリケルニ、引立タル勢ノ習ナレハ、大將ト同心ニ成テ、今一軍セント思フ者無リケルニヤ、矢矧ニ一日逗留シ給ヒケレハ、昨日迄二萬餘騎有ツル勢、十方へ落失テ十分カ一金勝院、西源院本、作三分一モナカリケリ、早旦ニ宇都宮治部大輔、大將ノ前ニ來テ申サレケルハ、今夜官軍共、夜モスカラ落候ケルト承カ、實モ陣々マハラニ成テ、イツクニ人有トモ見ヘ候ハス、爰ニテモシ數日ヲ送ラハ、後ニ敵出來テ、路ヲ塞ク事有ヌト覺候、哀今少引退テ、アシカ洲股ヲ前ニ當テ、京近キ國々ニ、御陣ヲ召レ候ヘカシト申サレケレハ、諸大將クニモ皇居ノ事オホツカナク候ヘハ、サノミ都遠キ所ノ長居ハ、然ヘキトモ存候ハストソ同シケ

ル、義貞サラハ屯モ角モ、面々ノ御異見ニコソ從ヒ候ハメトテ、其日天龍川今川家、北條家、南都天正本、作二矢矧宿ヲ立テコソ、尾張國迄ハ引レケレ

〔保曆間記〕一、前文五日、條ニ收ム直義うちまけて引退き、箱根山にて將軍（セカ）の相待所に、

尊氏も此事を聞て鎌倉をうちたち、竹の下をまはりて、京都の勢を中にとりこめむとせしかば、義貞以下の官軍かなひがたくや思ひけん、引退きしを、直義やがて追懸、海道を、一きはいさみて責のぼる、（谷長ノ説）なりよし親王、義貞以下、京へ落のぼりけり、（下文ハ明年正月一日條ニ收ム）

〔應仁記〕三、赤松家傳之、事并神隱之御事新田義貞都ニ有リテ、シキリニ讒訴シケレハ、尊氏退治

ノ論旨ヲ蒙テ、義貞關東下向ノ時、貞範又竹下合戰、無比類忠戰ノ條、建武二年十二月十二日、貞範ニ播磨國并丹波國ノ内春日部莊御教書下シ玉フ、

〔竺仙錄東京帝國大學本〕一、住淨智寺語錄、△、六、二、八〇、三、聞宮根山大戰上堂、舉雲門大師云、天帝釋

與釋迦老子、在中庭裏、相爭佛法甚闢、雲門只知彼一時、大似脫空、豈知此一時、事存誠實、何故、即今在宮根山下、兩陣交鋒、直得劍氣凌空、風飛雲起、昨夜富士山頭雪消一半、

〔尊卑分脈前田侯藤原氏御子左流〕

爲世（傍註略）爲冬左中將、正四下、建武二年十一月、於關東戰場卒、

〔河本系圖〕(但馬)

國時三郎左衛門、時重長左衛門尉、元弘二年足利尊氏丹州篠村著陣時、久下長澤諸共尊氏、陣ニ來ル、建武二年十二月十一日、宮根戰場ニテ打死、五十七歳、成時(註略)

〔三島神社文書〕(伊豆) △六二八〇八

奉寄 伊豆三島大明神、

伊豆國長崎郷(田方郡ニ長崎村アリ、)事、

右所奉寄進之狀如件、

建武二年十二月十一日

(足利尊氏)
(花押)

十二月十三日⁽¹⁾九州南部ニ官軍起ル。足利方、之ヲ新田與同仁ト稱ス、

〔薩藩舊記〕前集十三 眞本御領諸 縣郡大田原村新助藏 △六二八一〇、

土持新兵衛尉宣榮(國綱ノ子)於日向國所々致軍忠次第事、

一去年^{建武}十二月十三日、世上開亂之由依有其聞、一族相共欲令上洛之處、伊東藤

內左衛門祐廣、新田右衛門佐義貞候人同彌七、同彌八、益戸以下凶徒等、令亂入國富莊以下所々、

依致濫妨狼藉、國中平均相隨、致黨類之由、披露之間、同廿七日、一族相共揚御旗、打出

宿所候事、(下略、建武三年二月七日附、島津莊總政所宛、若林秀信證判)

伊藤祐廣
義貞祇候
人

尊氏寄進

新田與同
仁

新田右衛門佐殿與同仁、伊東藤內左衛門尉祐廣以下凶徒等、去年十二月廿四日、押寄足利殿御領穆佐院、逮于合戰之由、(下略、建武三年二月七日附、土持宣榮守護奉行所宛、重賢證判)
十二月十三日⁽²⁾尊氏、義貞追討ノ令ヲ大友氏泰ニ與ヘ軍ニ會セシム。明日、大友貞載、是ヲ承ケテ、肥前諸族ヲ招ク。

〔大友文書〕(立花伯爵所藏) △六二八一六 〔青方文書〕(長崎圖書) 兩者共

可被誅伐新田右衛門佐義貞也、相催一族、不日馳參、可致軍忠之狀如件、

建武二年十二月十三日 (足利尊氏)
(花押)

大友千代松丸 (氏季)

〔深堀系圖證文記錄〕(佐賀文書集所收) △六二八一七 〔青方文書〕(兩者共)

可被誅伐新田右衛門佐義貞由事、關東御教書如此、早任被仰下之旨、率一族可被參上之由、可相觸肥前國地頭御家人之狀如件、

建武二年十二月十四日 (大友貞載)
左近將監

守護代

〔深堀系圖證文記錄〕(佐賀文書集所收) △六二八一六

可被誅伐新田右衛門佐義貞由事、去年十二月十三日關東御教書、并御施行如此、早

建武二年

任被仰下之旨、不日令參洛、可被抽軍忠候、仍執達如件

建武三年正月十六日

沙彌遍雄 因友代圖

深堀彌五郎殿

〔青方文書〕（長崎圖書）（右同文書）
（館所藏）（方孫四郎宛）

十二月十七日 越後ノ新田堀口貞政、村山隆義等ヲ催促シテ、東山道官軍ニ合スベク、上野、信濃方面ニ發向ス。

〔歷代古案〕六（越佐史料卷二）
三四三頁

村山彌次郎源隆義、信州亂に被越時、書置、

信州とう亂によつて、罷向候之間、子息孫二郎左衛門藏人とも仕候程に、もしいかなる事も候は、隆義所領越後國本黨保南條總領分、同國園田保、并沼田保半分、今泉郷（松岡彌三郎同四郎入道）跡半分事、彼所々三分二者、孫二郎母一後程讓與訖、一後々左衛門藏人女房半分讓あたへ候所、殘半分をまん福寺建徳寺貳分わけてまいらせて、隆義後生をとうへき也、但孫二郎義房左衛門藏人中一人もたすからは、無子細知行すへし、爰まんふく寺田二町、建徳寺田二町、東女房園田に八反、むまのをうかやしき者（遠近）い覽あるへからす。

信州動亂ニヨツテ發向

一隆義跡三分一者、東女房建徳寺しうたん藏主まいらせ候、一後之者、同兩寺よせまいらせ候、但子共中一人もいきて候は、隆義無子細可知行候、仍爲後日狀如件、

建武二年十二月十七日

源隆義判

堀口貞政

〔源姓村山系圖〕

隆義

建武二年八月、後醍醐天皇第八宮成良親王、鎌倉朝敵之餘黨東國在而、相模二郎平時行凶、徒信濃國江打越、時日不移、則鎌倉江責上、依信州

蜂起、從後醍醐天皇給旨賜、村山彌二郎源隆義一族相催可致軍忠旨、新田一族堀口

民部大輔貞政以證判賜下、依建武二年十二月十七日、上野國利根川發向、嫡男村山

孫二郎義房、同左衛門藏人父子四人相竝、信州動亂ニ付罷向、討死、

十二月十九日 越後ニ於ケル足利黨加地景綱、是日、新田方ノ河村秀義一族ト同國瀨波郡ニ戰フ。廿三日、小國・荻・風間・池・河内・白河一族ト松崎及豊田莊ニ戰フ。廿四日、沼垂ニ戰フ。廿五日、白河莊渡ニ戰フ。又此等諸氏及新田里見輔阿闍梨重慶ト島崎城ニ戰フ。

〔色部文書〕△六二八二三

秩部三郎藏人高長申軍忠事、

右當國蜂起之間、屬于佐々木近江權守景綱（加地）去年二（建武）自十二月十九日、ニ合戰（日カ）

建武二年

四五七

加地景綱

河村秀義
小國以下
ノ蒲原津
松崎合戰
沼垂合戰
佐崎原合
戰
菅名莊戰

無退轉、然而河村彌三郎秀義一族以下等、押寄瀨波郡(岩船郡ニ瀨波町村アリ)之間、一族相共馳向致合戰、直追落城內燒拂畢、是同小國兵庫助政光、(疾)風間池河內一族以下等、構蒲原津(中蒲原郡)城、堀橋籠之間、同於廿三日松崎(西蒲原郡)致合戰之時、野田左衛門次郎頭被射貫畢、(折カ)間同廿四日沼垂(中蒲原郡ニ沼垂町アリ)馳下、抽軍忠之時、秩父八郎長清、同左衛門三郎、中間江藤三以下五人討死仕畢、是次五月十七日、於佐崎原合戰者、捨一命、若黨中間討死被疵、其數不及注申、是同八月廿六日、菅名莊(中蒲原郡ニ菅名村アリ)、佐々河山、并青橋條(中蒲原郡ニ青橋アリ)、黑、金津保(中蒲原郡ニ金津村アリ)於所々合戰、致軍忠畢、是同十一月十二日、蒲原發向之時、最前馳參候畢、是所詮此之間合戰及兩年、屬于大將軍、當國退治無殘所、此等次第御見知上者、賜御證判、爲備向後龜鏡、恐々言上如件、

建武三年十二月三日

(加地景綱カ) 承了 在御判

鳥崎城
里見輔阿
關梨重慶

越後國瀨波郡新莊內一分地頭秩父三郎藏人高長軍忠事、
右當國大將屬佐々木加地近江權守殿御手、馳參最前御方刻、(疾)小木、風間、河內、池一族等、西古志郡鳥崎城(鳥崎村ハ後ニ三鳥郡ニ入レリ)立籠之間、馳向搦手追落上、里見輔阿關梨重慶侍、生捕飯野三郎二郎光廣被誅畢、仍賜證判、爲備向後龜鏡之狀如件、

建武三年二月七日

承了 團

〔水原文書〕

(伊佐早 謙舊藏) △六、二八二四

白河爲氏
豐田莊合

越後國白河莊(東蒲原郡)山浦條地頭大見能登權守代加治岡兵衛四郎政光申軍忠事、
右凶徒白河與五爲氏同一黨、并小國兵庫助同一族等爲對治、馳向大將佐々木近江權守景綱之間、屬彼御手、是去年建武十二月廿三日、豐田莊(東蒲原郡)鴻集合戰致忠、同廿五日白河莊渡合戰之時、捨身命抽忠節之條、御見知之上者、賜御判爲備後證狀如件、

建武三年二月二日

(加地景綱) 承了 花押

〔中條文書〕

(米澤中條 弘資氏藏)

右去年建武二、十二月十九日、當國兇徒爲對治、大將軍佐々木加地近江權守景綱、御發向之時、同日馳參御方、度々合戰致軍忠、賜御證判之狀、
一、同三年二月十八日、小國、河內、池、風間、(疾)於木、千屋、高梨等一族以下御敵重蜂起之間、爲對治、大將軍蒲原津御發向時、同時馳下之處、河村彌三郎秀義一族發謀叛、自後攻懸間、同二十日馳向奥山庄金山寺尾城、義成懸先、秀義一族須藤三實名討取畢、

建武二年

越後官軍
蒲原津陣
河村秀義
奥山庄金山寺尾城

加地庄洲崎合戰

義成郎徒富澤總太郎茂長、右肩同腕被切畢、同二十一日、於加地庄洲崎、爲牧彥太郎清時奉行、被梟頸、

沼垂合戰 小國政光

一、同二十二日、馳下加地庄沼垂湊、同廿四日渡河、對於小國兵庫助政光一族以下凶徒、散々合戰畢、同三月十四日、日々夜々合戰無退轉、致軍忠畢、自三月十五日、至于五月、義成一族等相具、奥山庄楯籠觀音侯城、

奥山庄觀音侯城

一、同五月十六日、伴政光以下凶徒等又蜂起、令亂入加地庄之間、同庄佐々木宿懸合、被終日合戰、其夜渡河、十七日曉、義成一族等相具、懸一陣、政光一族小國彌六、不知實名

佐々木宿懸合戰

討取之刻、義成若黨富澤總太郎茂氏、又同四郎次郎近宗討死、

青橋山戰 河内爲氏

一、同七月廿七日、小國、河内以下御敵、又令亂入加地奥山兩庄之間、義成一族等相具、楯籠觀音侯城、同八月四日、政光一族等以下御敵、追落奥山庄内、

新津城

一、八月廿七日、伴凶徒等重蜂起之間、大將軍御發向之時、馳參、同晦日、於長井保青橋山、對河内爲氏一族、致合戰、

觀音侯城

一、九月一日、對於河内、小野、風間、於木、千屋、高梨以下一族合戰之時者、一族等相具、一方於架壘、繩手、致終日合戰之刻、義成被疵、

深堀系圖證文記錄

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

深堀彌五郎殿

一、同四日、大將軍護法城被楯籠之間、義成等又楯籠于觀音侯城、是等次第大將軍御見知上者、賜御證判、爲備末龜鏡、粗言上如件、

建武二年

四六一

護法城 觀音侯城

十二月二十三日⁽¹⁾ 小貳賴尙、直義ヨリ義貞追討ノ檄ヲ承ケ、鎮西ノ諸族ヲ招ク

〔深堀系圖證文記錄〕^(二) (佐賀文書) △六二八一六

被誅伐新田右衛門佐義貞由事、如去月二日關東御教書者、相催一族以下軍勢等可馳參云々、任被仰下之旨、不日可被參上候、仍執達如件、

建武二年十二月廿三日 (少貳賴尙) 太宰少貳判

深堀彌五郎殿

〔兒玉韞採集文書〕^(一) (筑前) (前同文中村孫) (四郎入道宛)

〔近藤文書〕^(筑後) (前同文、下荒木六) (郎入道女子代宛)

〔相良文書〕^(肥後) (前同文、相良八郎宛) (前同文、中村孫) (四郎入道宛)

〔薩藩舊記〕^(前集十二、高尾野) (前同文、杉左衛門次郎入道宛)

〔薩藩舊記〕^(前集十二、富光) (前同文、建武二年十二月) (前同文、富光九郎宛)

〔青方文書〕^(長崎圖書) (館所藏) (前同文、橋本) (青方孫四郎宛)

〔橘中村文書〕^(東大史料編) (前同文、橋本) (青方孫四郎宛)

〔龍造寺文書〕^(坤) (佐賀文書、纂所收) △六二八七一

被誅伐新田右衛門佐義貞由事、如去月二日關東御教書者、相催一族以下軍勢等、可馳參云々、任被仰下旨、不日可被參上候、仍執達如件、

建武二年十二月廿三日

賴尙(花押)

龍造寺孫六入道殿

〔改正原田記附錄〕(前同文、補三)

十二月二十三日⁽²⁾ 東山道ノ官軍、小笠原貞宗、村上信貞等卜信濃大井莊ニ戰フ。

〔忽那文書〕(乾 六、二、八三七)

一見了(洞院實世ナルベシ)

(花押)

伊豫國忽那島東浦地頭彌次郎重清(忽那)致軍忠子細事、

右尊氏直義爲誅罰、自京都發向山道之處、小笠原信濃前司、貞宗村上源藏人(信貞)以下凶徒等、爲朝敵人之間、被誅伐之刻、去廿三日、於信州大井莊(佐久郡)致合戰了、且島津上總入道(貞久)之手、木村三郎入道、東條圖書助等見知之上者、不及子細、所詮被成下御判、爲備弓箭之面目、言上如件、

忽那重清

信州大井莊合戰

建武二年極月廿五日

無相違

(花押同上)

伊豫國忽那島東浦地頭次郎左衛門尉重清致軍忠由事、

右尊氏直義爲誅罰、下賜討手繪旨、屬大將軍洞院左衛門督殿(實世)御手、發向山陽道之(東山道)致隨分之軍忠令參洛畢(中略、明年正月二十七日ノ條ニ收ム)此等子細御見知之上者、賜御一見書、備向後龜鏡、彌爲致弓箭面目、言上如件、

建武三年二月三日

〔忽那一族軍忠次第〕(伊豫 他國合戰)

山道海道合戰、大將洞院右大將殿、于時左衛門督、建武二年至于同三年、

〔河野土居系圖〕(伊豫) 通增 土居彦九郎、任伊豫權介、號 建武二年乙亥十二月、屬新

田義貞卿幕下、自京都發向山道、於信州大井莊合戰、抽軍忠、

〔市河文書〕(酒田市 本間光正氏藏)

市河刑部大輔助房代難波太郎左衛門尉助元軍忠事、

建武二年

四六三

洞院實世

大井莊合戰

右村上源藏人殿爲信州御靜謐御下向之間最前馳參御方、今月十三日、同十七日、兩度馳向英多莊清瀧城、致軍忠上者、賜御一見書御判、爲備後代龜鏡、恐恐言上如件、

建武三年正月十七日

(村上源氏)
承了(花押)

(註) 村上信貞證判市河經助軍忠狀(正月十日)及小笠原貞宗證判同經助及助泰軍

忠狀(正月十日)モ内容略同ジ

〔市河文書〕

市河左衛門十郎經助軍忠事、

右先代高時一族大夫四郎、同丹波右近大夫、并當國凶徒深志介知光以下輩、寄來之間、於守護代小笠原余次兼經并村上源藏人信貞大將、於八幡山西麓麻績御厨、被致散々合戰之間、屬彼手經助致軍忠上者、賜御一見書御判、爲備後代龜鏡、恐々言上如件、

建武三年二月廿三日

(吉良時忠)
承了(花押)

(註) 村上信貞證判經助軍忠狀及吉良時衛證判經助軍忠狀(本狀ト)モ同ジ

十二月二十五日 諸國ニ朝敵蜂起シ京都ヲ衝カントスル形勢アリ、勅使、尾張ニ下向シ、義貞ニ歸洛防衛ヲ命ズ。是日、義貞勅使ト共ニ歸洛ス、

〔元弘日記裏書〕〔保曆間記〕(何レモ十一月一日)

〔參考太平記〕卷第十四 諸國朝敵蜂起附義貞歸洛事

懸ル處ニ十二月十一日、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都、天正本、作二十日者、近是、按、此下又讀岐ヨリ高松三郎頼重、早馬ヲ立テ京都ヘ申ケルハ、足利一族細川卿律師定禪、按、頼貞子、若宮別當、去月二十六日、當國鷺田庄ニ於テ、鷺田、諸異本、或作三財田、旌ヲ舉ル處ニ、今川家、毛利家、北條家、金勝院、西源院、南都本云、僅十六騎ニテ旗ヲ舉、云々、託問香西是ニ與シテ、則三百餘騎ニ及フ、是ニ因テ頼重時刻ヲ運サス對治セシメン爲ニ、先屋島ノ麓ニ打寄テ、國中ノ勢ヲ催ス處ニ、定禪遮テ夜討ヲ致セシ間、頼重等身命ヲ捨テ防戰フトイヘトモ、屬スル所ノ國勢忽ニ翻テ、剩御方ヲ射ル間、頼重カ老父、并ニ一族十四人、四、天正本、作三三、郎等、三十餘人、其場ニ於テ討死仕畢、一陣遂ニ彼カ爲ニ破ラレシ後、藤橋兩家坂東坂西ノ者共、殘所ナク定禪ニ屬スル間、其勢已ニ三千餘騎ニ及ヒ、近日宇多津ニ於テ兵船ヲ轉シ、備前兒島ニ上リテ、已ニ京都ニ攻上ラント仕候、御用心有ヘシトソ告申ケル、カ、リケレドモ、京都ニハ新田越後守義顯ヲ大將トシテ、結城、名和、楠以下、宗徒ノ大名共、大勢ニテ有シカハ、四國ノ朝

建武二年